

独立行政法人国立博物館に係る業務の実績に関する評価（平成13年度）

全体評価（法人全体を評価）

評価項目	評価の結果
事業活動	<p>国立博物館の本来の業務である収集・保管、公衆への観覧、調査研究及び教育普及等の国民に対して提供するサービスについては、質・量ともに充実した業務を実施し、中期目標に向かって着実に成果を上げている。特に、保管業務、教育普及業務については組織の改編を伴う充実が図られた。</p>
収集・保管	<p>国立博物館は、文化財の保護政策の一つとして大きな役割を担いつつ、明治時代から今日にいたるまでに収蔵品115,978件、寄託品10,187件を収集している。平成13年度は、各館の収集方針に基づき国宝1件、重要文化財18件、重要美術品4件を含む購入71件、寄贈149件、寄託164件の合計384件の文化財を新たに収集し、その散逸、破壊、海外流出が問題とされる中で、かけがえのない文化財を後世へ継承するという重要な役目を果たした。また、購入については、企業会計が導入された独立行政法人制度のメリットを活かし、長期的な計画を検討しており、次年度以降、着実に実施することが望ましい。法人の総収蔵件数の約8%を占める寄託品については、長年の国立博物館の実績により培われた寄託者等との信頼関係の賜物であり、引き続き良好な関係を保つよう努力する必要がある。寄附・寄贈は有効な収集方法の一つであるため、文化庁と連携協力し税制問題を含めたその推進方策を検討することが望ましい。</p> <p>日本の有形文化財の多くは、いずれも永い年月を経て今日に伝わっているものであるだけに不適切な温湿度管理、かび、光、汚染物質などによる劣化、脆弱化、破損あるいは虫害等の生物被害を起こしやすい。特に木や紙などの有機質文化財は材質が脆弱であり注意が必要である。国民の貴重な文化遺産を後世に永く伝えていくため、文化財を健全な環境で保管する努力をしなければならない。保管に関しては、各館とも施設の構造、収蔵庫や展示室の違い、絵画、書跡、彫刻、金工、刀剣、陶磁、漆工、染織、考古資料等の種類の違いに応じ、科学的データ及び経験に基づき細心の注意を払い温湿度、照明、空気汚染及び防犯・防災等の管理を実施している。また、東京国立博物館に保存修復課、京都国立博物館に文化財管理官、奈良国立博物館に文化財修理指導室を新たに設置し、保存体制の強化が図られた。今後さらに、それぞれの文化財に適した温湿度や照明の設定条件について研究を進め、より適切な管理がなされることが望ましい。また、研究員や運送業者等が展示・梱包・運搬等を行う際には、文化財の取り扱いの知識と技術が重要であるため、正しい取り扱いについて研究員や運搬業者の指導に努めることが望ましい。</p> <p>現在設立準備中の九州国立博物館（仮称）及びこれから建設する京都国立博物館百年記念館（仮称）については、これまでの各館の実績を活かし空調設備や収蔵庫の構造などが適切な保存環境となるよう配慮が必要である。</p> <p>文化財は最善の保存方法と保存環境を整えた上で、劣化に備えて定期的に点検を実施し、状況に応じて早急に対処できるようにしておく必要がある。このため国立博物館では平成13年度より、文化財の保存状況を記録した保存カルテの作成を開始した。また、研究員が、修理を要する範囲、修理方法や修理材料などについて修理業者を指導しながら、修理を必要とする文化財のうち緊急度の高い157件を実施し、修理データを記録した。文化財の修理データは、将来、再び修理する際の貴重な情報として役立つため、今後もさらに記録を充実していくことが望ましい。保存カルテや修理データなど文化財に関する情報については、各館の特性を踏まえつつ、共通規格によるデータベース化が望ましい。</p>
公衆への観覧	<p>平成13年度、国立博物館は展覧会事業として常設展、特別展・共催展11回、地方巡回展4回及び海外交流展3回を実施した。</p> <p>常設展においては、文化財の劣化等の状態を勘案しながら310回の陳列換えを行い、12,625件の文化財を公開した。その際、研究員が蓄積した研究成果を活かし、学術的に高い水準を保ちながら、特別陳列や国宝室など広く観覧者の興味を喚起させる陳列の工夫が行われた。</p> <p>特別展・共催展については「国宝醍醐寺展」「横山大観」「雪舟」「正倉院展」など国民の関心に応えるものや、「時を超えて語るもの」「仏舎利と宝珠」など学術的意義の高いものなど企画および展示内容を十分検討し、多くの人々に優れた文化財を鑑賞する機会を提供した。</p> <p>また、「美術の中の子どもたち」「ヒューマンイメージ」等の国立博物館の自主企画展については、各館の姿勢と研究成果の発表の場として意義があった。広報活動については、マスコミとの連携等により一層の強化を図ることが望ましい。</p> <p>地方巡回展・海外交流展については、国立博物館の優れた文化財を地方及び外国の人々に鑑賞する機会を提供するものとして有効であった。海外交流展については、より有効なものとするため共催者又は開催地のニーズをよく把握し、中期的な展望の下に企画及び実施することが望ましい。</p> <p>以上のように国立博物館の展覧会事業は、国民の関心に応えたものや学術的意義の高いものをバランスよく実施し、目標入館者数を約29万人超えるなど十分な成果を上げた。また、入館者に対するアンケート調査の結果では、概ね8割以上の肯定的な回答を得ており、展覧会に対する満足度は非常に高い。</p> <p>しかしながら、「横山大観」「雪舟」では入場制限や柔軟な開館時間の設定を行ったが、展示場に入場者が多すぎて鑑賞しにくい状況が一時みられた。今後とも、展覧会場の広さに応じた入場者数とするため、柔軟な開館時間の設定等の工夫を検討し、より良い観覧環境を確保するよう一層努力する必要がある。</p> <p>今後は、展覧会に関する費用対効果やアンケート等の分析を行い、今後の展覧会の企画・内容、適正な入館者数の設定及び入場料金を含めた予算の設定などに活用することが望ましい。その際に、展示における教育的効果が十分に発揮されるよう、そのための予算の確保を検討することが望ましい。</p> <p>国立博物館では展覧会事業以外の文化財の活用方策として、貸与及び特別観覧等を実施している。平成13年度は、貸与1,830件（貸与先302箇所）、特別観覧3,892件の実績を上げた。貸与等については、優れた文化財を鑑賞する機会を増やし、国内外の公私立博物館の発展に大きく貢献する活動として、施設及び文化財の状態等に留意し、展覧会等の趣旨を考慮しながら、件数を増やしていくことが望ましい。</p>
調査研究	<p>平成13年度、国立博物館では、収蔵品にかかる調査研究、特別展にかかる調査研究、保存環境に関する調査研究、九州国立博物館（仮称）の展示等にかかる調査研究、近畿地区社寺を中心とした文化財の総合調査研究、神と仏の思想的交流と造形に関する調査研究、南都諸社寺等に関する調査研究、海外所在日本文化財を対象とする調査研究、大和古代寺院出土遺物の調査研究、仏教美術写真収集及びその調査研究、韓国国立慶州博物館や中国上海博物館等との学术交流など質・量ともに充実した調査研究を実施した。</p> <p>このような日常的な研究員の調査研究は、学術研究上の成果は無論のこと、出品作品の選定、展示の構成や手法、適切な文化財の収集・保管、教育普及など、博物館活動の基礎となるものでもあるため今後も確実に継続して実施することが望ましい。</p> <p>また、研究成果については、展覧会図録、紀要、各種調査研究報告書、学会発表、講演会、シンポジウム等により公表されているが、より広く国民が利用できるような様々な媒体を用いることが望ましい。</p> <p>外部研究者との交流についても積極的に取り組んでおり、引き続き幅広く行うことが望ましい。</p>

教育普及	<p>学習指導要領が改訂され小中学校の週5日制の完全実施や総合的な学習の時間の新設などの状況の下、博物館が社会に学習の機会を提供することが求められており、国立博物館においても教育普及活動の充実が期待されている。</p> <p>国立博物館では、東京国立博物館に教育普及課、京都国立博物館に教育広報室、奈良国立博物館に教育室を設置し教育部門の充実を図り、資料の公開、ワークショップや親と子の文化財教室等の児童生徒を対象とした事業、講演会、友の会、学芸担当職員の研修、博物館実習生の受入等大学との連携、博物館ニュース等の刊行物の発行、デジタル化した文化財等の情報の館内及びインターネットでの公開、ボランティアの受入などを実施し、平成12年度の実施回数や参加者数を超える成果をあげた。</p> <p>しかしながら、多岐にわたる教育普及活動については、限られた人員・予算の中で充実した事業を行うため、国立博物館として果たすべき役割について検討し、そのうえで全般にわたる見直しを行うことが望ましい。特に、友の会活動や博物館実習生の受け入れについては、他の業務とのバランスを勘案のうえ、目的の明確化と内容を見直す必要がある。</p>
その他	<p>国立博物館では、高齢者や身体障害者等のためのトイレ、エレベータ、スロープ及び車椅子を設置している。また、入館者の要望の多様化・高度化に応えるため、特別展での音声ガイドの貸し出し、ハイビジョン等の映像による解説、ギャラリートーク、夜間開館、小中学生の無料観覧日などを実施し、積極的に入館者サービスに努めた。</p> <p>今後も、アンケート結果の分析やモニター制度を検討するなどの確に入館者のニーズを把握し、きめ細かなサービスを提供することが望ましい。その際には、すべての要望に答えるのは難しいため優先順位をつけメリハリのあるサービスを心がける必要がある。</p> <p>特に、国立博物館を世界に開かれたものとするために、インフォメーション、解説等について複数の外国語を使用するなど、より一層、外国人にも親しまれるための改善が必要である。</p>
業務運営	<p>国立博物館の業務運営については概ね中期計画に基づく年度計画を履行したが、業務の効率化、人事など、まだ改善可能な点があると思われる。今後、より効率的な運営を実施するためには、運営責任者が財務諸表等経営に関するデータを分析したうえで予算・事業を計画し、法人の持っている資源を最大限に活用する必要がある。</p>
運 営	<p>平成13年度は、法人設立の年ということもあり、東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館の3館が統合したことによる本部機能の設置並びに教育普及部門及び保存部門などの組織の体制整備を図るとともに、設立前から実施していた事業を確実に実施し、必要な事業の拡張についても可能な範囲で行われた。</p> <p>東京国立博物館で実施したファッションショー、奈良国立博物館で実施した茶会やコンサートなど国の機関としては困難であった文化に関する企業等との連携が始められた。また、小中学生の常設展観覧料の無料化、開館日の増、デジタル画像等の販売、賛助会員制度など新たな活動について検討がなされた。</p> <p>今後、さらに国立博物館が発展するためには、事業の重点的な実施など思い切った決定が必要と考えられる。そのためには、法人の組織力を高め法人が一体となって業務を遂行していく必要がある。組織力を高めるためには、人材の育成を目的にした研修と共に、組織の目的に関する共通認識を得るための法人内教育や研修が必要である。</p> <p>なお、新たな課題として、危機管理や著作権への対応についても検討することが望ましい。</p>
財 務	<p>展覧会内容の充実、入場券の前売り、夜間開館の実施、広報の充実など国民に対するサービスの向上に努めたことにより、展覧会、図録、特別観覧、講習会、展覧会企画監修等において、予定収入の約5億5千万円より約1億3千万円の増を図ることができた。</p> <p>また、共済組合事務、予算管理事務、資金運用事務、損害保険事務等の一元化を図り、光熱水量の節約、廃棄物の分別等によるリサイクル、OA化によるペーパーレス化、積極的な一般競争入札の実施により、平成13年度の運営費交付金のうち約1.03%の効率化を行った。</p> <p>今後は、各事業の実績評価や財務諸表等を分析したうえで適切に予算を配分し、独立行政法人制度のメリットを活かし柔軟で弾力的な経営を行い、業務への支障やサービスの低下を招くことなく、さらに効率化を図ることが望ましい。</p>
人 事	<p>業務運営の効率化及びサービスその他の業務の質の向上を図るには、法人内の人材を適切に配置し、十分に活用する必要がある。</p> <p>事務職については、文化庁、文部科学省及び国立大学との定期的な人事交流により、安定した人員の供給と組織の活性化がなされているが、博物館業務固有の専門分野における人材育成において困難な面がある。今後はさらに事前の調整を十分に行うなど改善を図る必要がある。</p> <p>また、事務職・研究職共に、組織としての意思決定の統一、ネットワーク財産の蓄積、組織の活性化を図るため、東京・京都・奈良の3館における人事交流を積極的に行う必要がある。</p> <p>さらに、研究職については、経験と知識の専門性を尊重しつつ地方とのネットワーク財産の蓄積と活用及び異種混成による組織の活性化を図るため、公私立博物館、大学、文化庁及び民間企業等との人事交流を検討する必要がある。</p> <p>なお、人材育成については、企業会計研修、マナー研修等を実施し、職員の能力開発に努め、事務能率の増進が図られた。</p>
施 設	<p>独立行政法人国立博物館の施設等を計画的に整備充実することは、博物館活動の基盤に関わる重要な課題である。</p> <p>京都国立博物館においては、平成9年に開館100周年を迎えたのを契機として、老朽化、狭隘化し、かつ耐震構造上の問題等を抱えている現新館建物に替えて百年記念館（仮称）を建設することが計画された。その一環として、平成13年度には、東収蔵庫の建設、仮設事務所として使用するための旧東山区役所の改修、埋蔵文化財調査用整理保管庫取設、東山区役所跡地購入等を実施した。</p> <p>奈良国立博物館においては、国宝や重要文化財に指定された文化財の保存修理とそれに伴う調査研究を行うための文化財保存修理所が平成14年2月21日に開所し、総合的文化財修理専門施設として使用を開始した。また、西新館の空調設備についても、既に29年が経過し老朽化が進んでいることから、抜本的な改修工事に取り掛かった。</p> <p>その他、国立博物館には、東京国立博物館の表慶館トイレ・エレベータの設置や、また、東洋館収蔵庫・資料館空調設備・黄林閣・本館収蔵庫・本館外装・困障、京都国立博物館の本館・文化財保存修理所空調設備、奈良国立博物館の西新館など老朽化が進んでいるものも数多くあり、文化庁を含めて協議を進め早急に対処する必要がある。特に、24時間空調の実施を含めた設備の改修計画を検討することが望ましい。</p>
総 評	<p>平成13年度の国立博物館は、本来の業務である収集・保管、公衆への観覧、調査研究、教育普及の質の向上及び業務運営の効率化への取組みに対し努力し、年度計画以上の実績を上げるなど、中期目標を達成するための着実な一歩を踏み始めた。</p> <p>また、貴重な国民的財産である文化財を良好な状態で後世に伝え、文化財を広く国民に紹介し、我が国の顔として国際文化交流を推進するとともにナショナルセンターとして国内外の博物館活動の充実へ寄与する文化の振興を図る活動を通じて、社会に貢献した。</p>

項目別評価（東京国立博物館）

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評価																															
		A	B	C		段階的評価	定性的評価																														
<p>1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。</p> <p>(1) 各博物館の共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>(2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進</p> <p>(3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進</p> <p>(4) 外部委託の推進</p> <p>(5) 事務のOA化の推進</p> <p>(6) 積極的な一般競争入札を導入</p> <p>2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。</p>	<p>効率化の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評価を決定する。</p>	<p>1業務の効率化</p> <p>【方針】 博物館活動の充実、自己収入の確保を図りながら、管理部門を中心に通常業務経費の1%効率化を図る。</p> <p>(1)各博物館の共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>【取り組み】 従来各部において処理していた物品供用事務、旅費計算事務及び予算管理事務を総務部会計課において一括処理を行うよう改善した。</p> <p>【実績】 物品調達事務及びそれに伴う支払事務の効率化並びに予算管理事務の円滑化が図られた。また、共済組合事務、予算要求、資金運用及び損害保険などの各部における事務負担軽減が図られた。</p> <p>【自己点検評価】 効率化が図られた事により、独立行政法人移行後の本部事務組織体制が整備されたことから効率化が十分に達成されたと判断する。</p> <p>(2)省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進</p> <p>【取り組み】 光熱水量の使用状況を把握し、管理部門を中心に経費節減に努める。また廃棄物の分別収集を徹底し、リサイクルを推進した。</p> <p>【実績】 管理部門を中心に経費節減に努め、以下の通りの節減が図られた。また廃棄物の分別収集を徹底し、リサイクルを推進した。</p> <table border="1"> <tr> <td>・光熱水量</td> <td>平成13年度実績</td> <td>平成13年度予算</td> <td>増減率</td> </tr> <tr> <td>電気料金</td> <td>11,683万円</td> <td>11,685万円</td> <td>99%</td> </tr> <tr> <td>ガス料金</td> <td>3,927万円</td> <td>3,845万円</td> <td>102%</td> </tr> <tr> <td>水道料金</td> <td>3,728万円</td> <td>4,047万円</td> <td>92%</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>19,338万円</td> <td>19,577万円</td> <td>98%</td> </tr> </table> <table border="1"> <tr> <td>・廃棄物減量化</td> <td>平成13年度</td> <td>平成12年度</td> <td>対前年比</td> </tr> <tr> <td>一般廃棄物</td> <td>116,965kg</td> <td>150,580kg</td> <td>77%</td> </tr> <tr> <td>産業廃棄物</td> <td>31,190kg</td> <td>34,700kg</td> <td>89%</td> </tr> </table> <p>【自己点検評価】 数値において十分達成された。今後来館者サービスの向上を図る必要性を踏まえ効率化を維持していく手法が必要である。</p> <p>(3)講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進</p> <p>【取り組み】 ボランティアの活用（育成）推進のための研修会の実施や日本文化啓蒙のための講演会等を実施し、もって館内施設の有効利用に努めた。また、外部研修会等へ対する施設の貸付を実施した。</p> <p>【実績】 ボランティア研修会を20回開催した。館内施設の有効利用を図るとともに、中期目標期間中のボランティア受け入れ増加に寄与し、もって博物館提供サービス業務の一層の充実と効率化を図る。また外部講演会・研究会等への施設貸付が14回行われた。</p> <p>【自己点検評価】 主に教育普及関連事業に活用され、好評を得ている。今後さらに多くの外部講演会・研究会等に積極的に活用するための受け入れ態勢の整備と広報活動を行い、施設の有効活用を図る必要があると思われる。</p>	・光熱水量	平成13年度実績	平成13年度予算	増減率	電気料金	11,683万円	11,685万円	99%	ガス料金	3,927万円	3,845万円	102%	水道料金	3,728万円	4,047万円	92%	計	19,338万円	19,577万円	98%	・廃棄物減量化	平成13年度	平成12年度	対前年比	一般廃棄物	116,965kg	150,580kg	77%	産業廃棄物	31,190kg	34,700kg	89%	<p>B</p>	<p>業務運営の効率化を図るため共済組合事務、損害保険契約事務などの事務の一元化、水道等の節約、リサイクル、OA化の推進及び監視業務や入場券の販売業務の外部委託等を実施し、法人全体の運営費交付金の1.03%の効率化に積極的に貢献するなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>しかし、まだ改善可能な点があると思われるので、博物館本来の業務に支障のない程度に一般競争入札や外部委託を実施するなど、引き続き積極的に取組む必要がある。</p>
・光熱水量	平成13年度実績	平成13年度予算	増減率																																		
電気料金	11,683万円	11,685万円	99%																																		
ガス料金	3,927万円	3,845万円	102%																																		
水道料金	3,728万円	4,047万円	92%																																		
計	19,338万円	19,577万円	98%																																		
・廃棄物減量化	平成13年度	平成12年度	対前年比																																		
一般廃棄物	116,965kg	150,580kg	77%																																		
産業廃棄物	31,190kg	34,700kg	89%																																		

(4) 外部委託の推進
【取り組み】
 看視業務等の業務内容を見直し、可能なものから外部委託を実施した。
【実績】
 看視業務11ポストと入場券の販売業務2ポストを業務委託に移し、定員管理の効率的な実施を図った。
【自己点検評価】
 監視業務及び入場券の販売業務については、全て業務委託されたことで達成できた。今後、労務・技能業務については、職員の退職及び定員削減による補充等について、外部委託を踏まえた、定員管理の効率的な実施を図る。

(5) 事務のO A化の推進
【取り組み】
 館内LANを活用した、ペーパーレス化の推進した。
 事務のO A化推進のため、グループワークソフトの導入、職員研修を実施した。
【実績】
 館内の職員通知文書は、パソコンの掲示板により周知し、各会議案内については、メールでの案内を徹底し、ペーパーレス化を推進するとともに入館者数等の共通情報の掲示による館内情報の共有による業務の効率化が図られた。
 事務のO A化推進のため、グループワークソフトの導入の推進により、会計事務処理の電算化を図り、各種伝票作成時において帳簿類への自動記帳反映がなされ、事務処理の正確化、迅速化及び効率化を実現した。
【自己点検評価】
 独立行政法人移行を契機に、事務処理のO A化が大きく前進した。
 今後もO A機器の活用手法を検討して、業務の効率化のために活用していく必要がある。

(6) 積極的な一般入札の導入
【取り組み】
 事業計画をうけて、効率的な調達と早期購入による有効活用を図るため、年度契約実施計画を策定し、契約事務の適正な執行を行うこととした。
【実績】
 発注に占める一般競争の件数は2件であった。
【自己点検評価】
 上記の2件は一般競争入札になじむ調達契約において実施したものであり、他に指名競争契約、また随意契約金額の範囲内の調達においても、複数の業者から見積書を徴収し、競争原理を働かせるよう努めた。

2 事業評価の実施及び職員の意識改革
【方針】
 運営委員会、評価委員会、外部評価委員会を開催し、年度を通しての事業評価を行い、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。
 各種研修・講習会を通じ、職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図るとともに、職員を外部研修に派遣し、その資質の向上を図る
【実績】
 13年度は法人化の初年度となることから、事業評価については、実質的に14年度に行うこととなる。
 職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図るための一環としては、企業会計研修会を実施した。
【自己点検評価】
 会計研修を行い、スムーズな会計処理の移行が図られた。引き続き、各種研修会等を通じ、職員の理解促進等に努めるとともに、財務諸表作成事務を通じて法人の業務運営のための分析・評価・事業評価を行うための人材育成に努め、業務運営の効率化を図る。

効率化の達成率	1.5%以上	1.0%以上 1.5%未満	1.0%未満
---------	--------	------------------	--------

独立行政法人国立博物館全体の効率化実績 運営費交付金予算額 4,570,843,000円 効率化した額 47,501,889円 効率化 1.03%	B
--	---

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評価	
		A	B	C		段階的評価	定性的評価
<p>1 収集・保管</p> <p>(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。</p> <p>(東京国立博物館) 日本を中心にして広く東洋諸地域にわたる美術及び考古資料等を収集する。</p> <p>(京都国立博物館) 京都文化を中心とした美術及び考古資料等を収集する。</p> <p>(奈良国立博物館) 仏教美術を中心とした名品を収集する。</p> <p>(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている分野を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。</p>	<p>文化財の収集（購入・寄贈・寄託）の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評価を決定する。</p>			<p>【方針】</p> <p>国民のニーズに沿った質の高い文化財を体系的・通史的にバランスよく集める必要があり、そのため本年度は収蔵品の欠落部分のうち、近世の絵画・工芸・と仏教彫刻を補うことを重点に置いて収蔵品の充実を図ることを目的とした。</p> <p>【取り組み】</p> <p>収集においては、市場の問題、相手方の意向等、博物館の一方的意思だけでは行かないところがあり、情報収集が大事な取り組みとなっている。このため、学識者、古美術商、蒐集家等、文化財に関わる方々と緊密な連携を図りつつ、研究論文、専門誌、展覧会カタログ、売目録、インターネット等、各種の媒体を利用して文化財の情報収集に努めた。また、それらを活用しながら、実地調査及び研究を行い、所蔵者とも協議を重ね、購入や寄贈・寄託が可能な文化財を具体的に選定し、収集活動を推進した。</p> <p>収集に際しては、分野の担当官が選定した候補物件をもとに、鑑査会を計7回、外部有識者等からなる買取協議会・買取評価会を計4回実施し、審議を行った。</p> <p>【実績】</p> <p>陳列等に不可欠と考える文化財29件を購入し、寄贈・寄託については、新規32件を加え、総計約2,434件を受け入れ、国宝1件(刀剣)、重要文化財3件(絵画)、重要美術品2件(絵画・漆工各1件)を含む、143件あまりを受贈した。</p> <p>(購入)</p> <p>前期は彫刻、金工、漆工、染織、東洋漆工、東洋考古、東洋染織、民族資料の各分野から、陳列等に不可欠と考える文化財29件、約2億8千万円余りを購入した。</p> <p>また後期に伝雪舟筆の「四季花鳥図屏風」(六曲一双)を約3億円で購入するにあたり、13年度予算では約1億3千万円不足だったため、14年度予算とあわせて購入することとした。これは法人になったメリットが作用したものである。</p> <p>本屏風は14年度行われる「雪舟展」において展示する予定である。</p> <p>(寄贈)</p> <p>国宝1件(刀剣)、重要文化財3件(絵画)、重要美術品2件(絵画・漆工各1件)を含む、143件を受贈した。</p> <p>特に指定文化財4件と重要美術品の2件は、長年寄託していただいた1名の篤志家からのものであり、寄託制度の効果といえる。</p> <p>(寄託)</p> <p>新規32件を加え、総計2,291件を受け入れた。ただし12年度末2,304件あったものの中から、20件程が当館の購入・寄贈の対象となったことや、所蔵者の要望による引き取りがあったことなどのため、12年度より13件減となった。</p> <p>【自己点検評価】</p> <p>本年度の収蔵品は、いずれも当該分野の欠落部分を補うもので、国民に広く公開するのにふさわしい文化財として、学識者や蒐集者からも陳列品の充実に寄与するものとの評価を得ている。寄贈・寄託の目標2,500件には60件ほど及ばなかったが、内容の上では多岐にわたって質の高い文化財を収集できた。</p> <p>参照：事業実績統計表 1～27頁(購入)、45・47頁(寄託) 1</p>	<p>A</p> <p>博物館の収集方針に基づき、「聖徳太子立像」など質の高い文化財を29件購入し、新たに国宝1件、重要文化財3件、重要美術品2件を含む寄贈143件、重要文化財1件を含む寄託32件を受入れるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。独立行政法人制度のメリットを活かした購入を計画しており、次年度以降着実に実施することが望ましい。</p> <p>寄附・寄贈は有効な収集方法の1つであるため、文化庁と連携協力し税制問題を含めたその推進方を検討することが望ましい。</p> <p>東京国立博物館の2,291件の寄託品は、長年の実績により培われた寄託者等との信頼関係の賜物であり、引き続き良好な関係を保つよう努力することが望ましい。</p> <p>文化財の散逸や海外流出について、文化庁、国立美術館等との連携を図り情報収集など迅速に対応することが望ましい。</p>	
		<p>寄託件数(東博は寄贈も含む)</p>	<p>2,500件以上</p>	<p>1,750件以上 2,500件未満</p>			<p>1,750件未満</p>
<p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く後世へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。</p> <p>(2)-2 収蔵品の保存カルテ作成、保存環境の調査等を実施し、収蔵品の保存環境の向上を図る。</p>	<p>保管の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評価を決定する。</p>			<p>(2)-1保存環境・保存体制の整備・充実</p> <p>【方針】</p> <p>保存体制の充実を図るための組織体制の整備として課・室体制とするとともに部屋面積の拡充を行った。</p> <p>【取り組み】</p> <p>従来「保存修復管理官」という単独官で保存の充実にあたっていたが、課・室体制とするとともに部屋面積の拡充を行った。</p> <p>【実績】</p> <p>環境保存室と保存技術室からなる保存修復課を新たに設置し、4人のスタッフを配置し、保存体制の充実を図った。それにより保存カルテの作成、保存環境の調整も端緒についたという段階であるが確実に成果を上げた。</p>	<p>A</p> <p>収蔵品の保存及び管理環境の維持充実を図るため文化財の種類、保管場所等の違いにより、温湿度や照明等を適正に管理し、また、新たに保存修復課を設置し、保存カルテを作成するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。今後も、年間を通して、適正な温湿度の管理をすることが望ましい。また、引き続き保存カルテを作成するとともに、長期的に保存環境を整備することが望ましい。</p>	

			<p>【自己点検評価】 保存修復課の設置は日本の博物館のなかでも画期的な取り組みである。また今後は京都国立博物館、奈良国立博物館との情報の共有化や、東京文化財研究所等の保存に係る関係機関との連携を深め、保存体制の基盤の強化を図っていく。</p> <p>(2)-2保存カルテの作成、保存環境調査の実施</p> <p>【方針】 文化財の劣化状況等を記録した保存カルテの作成については10万件を超える収蔵品に対して、初年度において年間に達成可能な件数を見極めるために、500件を一応の目安とする。また博物館内の展示室、収蔵庫など保存環境調査（空間の温湿度、空気汚染、生物生息状況などのデータ採取・解析）を継続的に行い、それに基づいた処置あるいは計画を実施・提案する。本館、東洋館など古い施設に対する環境改善を図ることが、場所に関する重点的な目標である。</p> <p>【取り組み】 収蔵品の本格あるいは応急修理、他館への貸与など作品の状態を点検しなければならない機会を利用しながら、カルテの蓄積を図った。</p> <p>【実績】 保存修復課及び担当各室の協力もと貸与品1,400件のうち461件、応急修理時に33件のカルテを作成することができた。 保存環境調査に関しては全館の収蔵庫、展示場等約200箇所に記録計を設置し、確実にデータの採取を実施した。また、改修後の本館地下の収蔵庫への作品の搬入については保存環境調査のデータ解析に基づき実施することができた。</p> <p>【自己点検評価】 カルテ作成の目安として考えた500件は、現時点における保存修復課の態勢においてほぼ適切な数値であることが確認できた。 これらのデータの解析によって、各施設における保存環境の特性を明らかにしていくことが可能になったことは大きな成果といえる。 参照：事業実績統計表 49頁</p>				
<p>(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。</p> <p>緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。 長期寄託品等の修理を実施する。 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。 文化財修理・保存処理関係のデータベース化とその公開を実施。 (3)-2 国内外の博物館等の修理、保存処理の充実に寄与する。</p>	<p>修理の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>【方針】 事前の点検調査によって特に傷みが著しい作品に対し、中期計画の年度内に500件程度の修理を実施する計画であり、そのうち緊急性の高い100件程度を13年度に実施する。また長期寄託品の修理の実施については毎年1点程度の割合で本格修理を行う。 文化財修理のデータベース化は、毎年実施する本格修理に関して、その修理内容を、文字と画像を用いてデータベース化する。文化財に係る研究者、修理技術者、一般公衆が利用することによって、文化財保存の意義を伝えられるようにしていきたい。</p> <p>【取り組み】 絵画・書跡35件、考古79件、他合計137件の本格修理を実施した。 修理を実施するにつき、鑑査会で修理候補物件を選定し、さらに現状保持・復元等の修理の指針を策定し、修理業者を指導した。長期寄託品の修理の実施については候補作品の選定を行い、優先順のリストを作成すると同時に、外部資金の積極的な導入を図った。 文化財修理のデータベース化は研究者から一般の人にも有効に活用できるようなデータベースフォーマットを検討作成した。</p> <p>【実績】 予定の期間内に総ての作品の修理を完了し、次年度以降の陳列や貸与に供する事が可能となった。また、それに合わせて修理報告書の作成も完了した。 修理方法は次の通りである。 絵画・書跡：表具の解体修理、裏打ち、表装の取替え 考古金属遺物：合成樹脂含浸による本体の強化処置 土器：解体処理をし、土器片の再接合と欠失部位の充填 染織品：解体後、破損部の補強 また土器、金属器、染織裂等の修理において断片が不適切な位置に接合された作品が数点存在することが判明し、今回の修理により正常と判断できる場所に復した。 長期寄託品の修理については宗教法人 観修寺所蔵「紙本著色観修寺縁起 1巻」の本格修理を、財団法人住友財団文化財維持・修復事業助成からの援助により、行うことができた。修理は2ヶ年継続の予定である。修理後、常設展に活用する。 文化財修理のデータベース化では平成11年度と12年度のデータを一括して281件の修理実績のデジタルデータ化を完了した。デジタルデータの蓄積を図りながらデータベースを構築していく必要がある。</p>	<p>B</p>	<p>傷みの著しい絵画、書跡及び考古などの収蔵品137件を修理業者を指導しながら修理し、修理報告書を作成するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 特に、修理報告書を作成しデータベース化することは、文化財を再修理する際の貴重な記録となるため、今後も積極的に取り組み、その公開についても検討することが望ましい。 また、多くの文化財が修理を必要とする中で、中・長期的な修理計画を立てることが望ましい。</p>		
	<p>保存カルテ作成件数</p>	<p>500件以上</p>	<p>350件以上 500件未満</p>	<p>350件未満</p>	<p>461件</p>	<p>B</p>	

			<p>【自己点検評価】 現在、修理は全て外部の技術者に委託している。本格的な修理の大部分は今後とも現在の実施方法を取らざるを得ないが、展示や貸与時の応急的な処置や日常的な作品の安全のための処置を迅速に実施する体制が必要である。</p> <p>参照：事業実績統計表 55～76頁,83頁</p>		
			<p>文化財修理等のデータベース化件数</p> <p>300件以上</p> <p>200件以上 300件未満</p> <p>210件未満</p> <p>281件</p> <p>B</p>		
<p>2 公衆への観覧</p> <p>(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ各館において魅力ある質の高い常設展・特別展等を実施する。</p> <p>(1)-2 常設展においては、東京・京都・奈良の国立博物館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本の文化や歴史の理解の促進に寄与する展示を実施する。</p> <p>(1)-3 特別展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の博物館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の促進に配慮する。</p> <p>(東京国立博物館) 年3～5回程度</p> <p>(京都国立博物館) 年2～3回程度</p> <p>(奈良国立博物館) 年2～3回程度</p> <p>(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。</p> <p>(1)-5 海外交流展については、海外の博物館等と連携を図りながら、国内外の優れた文化財を広く国民に観覧する機会を提供するとともに、日本の文化を海外に紹介し、日本への理解の増進に資する展覧会を実施する。(年1回程度)</p> <p>(1)-6 各館の連携による共同企画展等の実施について検討し推進する。</p> <p>(1)-7 収蔵品の効果的活用、地方における観覧機会の充実を図る観点から、全国の公立博物館等と共催で、地方巡回展を実施する。(年1～2か所程度)</p> <p>なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。</p> <p>(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。</p>	<p>展覧会の状況</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>総入場者数は約165万人であり目標を30万人上回った。常設展は展示活動の中心と考え関心と呼ぶような陳列替えや特集陳列を多数行っている。特別展・共催展は当初企画した6企画のうち、5企画を実施した。企画内容は、観覧者、専門家からもよい評価を得た。目標を達成したと考えられる。入場者数は719,793人で目標の56万人を超え、十分達成した。</p> <p>参照：事業実績統計表 85・86頁</p> <p>【方針】 日本・東洋の美術、考古資料等を総合的に展示するとともに、国民のニーズや学術的意義を踏まえ、種類別、時代別、特別のテーマなどの指標を立てて展示を計画する。本年度はとくに日本美術への国際的関心や著名作品の特化した展示を工夫する。新たに、展示作品の制作時期を、主として近代以前とする従来方針の拡張を積極的に図り、現代の伝統工芸作品等の展示を考慮する。</p> <p>【取り組み】 常設展は、本館の日本の絵画、書跡、漆工、陶磁、染織、甲冑、刀剣、彫刻、金工の時代別展示、東洋館の中国・朝鮮の考古、絵画、書跡、彫刻、当時、染織、漆工、その他アジア地域の文化財の陳列、平成館の日本の考古、法隆寺宝物館の法隆寺献納宝物の展示に於いて、保存のため及び季節の取り合わせによる陳列替えを行いながら実施する。従来の展示室を活用して「江戸と桃山の陶磁」、「平成13年新指定国宝・重要文化財」等、個別のテーマによる特集陳列を年間20本以上設定した。また、絵画、彫刻、書跡等、従来行われてきた分野別の展示だけでなく、展示室の一部を特別の展示室に改める他、臨時使用の展示室を常設展示室に改装する等の拡充を図った。</p> <p>【実績】 常設展を活性化するための新たな取り組みや従前からの本館、東洋館、平成館、法隆寺宝物館を活用した常設展示においては分野別の展示に加えて、「中世・近世の経塚遺物」など近年の調査研究の成果や新発見資料の紹介など、学術的意義を考慮した特集陳列を積極的に実施した。これらにより、一般向けから研究者向け等、各種の常設展示を行い、展示内容を活性化することで年度の目標を十分に達成できた。作品の保護のため展示場の照明を抑えることや陳列替えを絵画1か月半毎、書跡2か月毎、彫刻・工芸3か月毎、考古6か月毎に行っているが、このあたりを観覧者に理解してもらえよう、引き続き広報等工夫を図りたい。入館者数は、244,340人で20万人を超え、目標を達成した。開館日数 306日 陳列件数 9,981件 陳列替回数 233回</p>	<p>A</p>	<p>広く国民に優れた文化財・美術作品を鑑賞する機会を提供するため、国民の関心に応えたものや学術的意義の高いものなどバランスに配慮しながら、常設展、特別展・共催展6回、海外交流展2回を開催し、目標入館者数以上の実績を上げるなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。入館者に対するアンケート調査の結果では、概ね9割の肯定的な回答を得ており、展覧会に対する満足度は非常に高かった。なお、広報活動については、さらに充実を図ることが望ましい。海外交流展については、中期的な展望のもと企画・実施することが望ましい。</p> <p>東京国立博物館では、本館・東洋館・法隆寺宝物館において常設展を実施し、年間を通して233回の陳列替えを行い9,981件の文化財を公開した。また、日本の文化や歴史の理解の促進に寄与する国宝絵画室・書跡室、工芸の至宝室、歴史資料展示室、浮世絵展示室等を新設するなど、魅力ある常設展とするため積極的に取り組んだ。</p>

				<p>(新たな取り組み)</p> <p>国宝絵画室、国宝書跡室、工芸至宝室の新設 従来、各分野の時代陳列の流れの中での展示だけであったが、その作品の魅力をも十分に鑑賞できるように、1件もしくは2件をサイクルで展示した。展示室には1年間のスケジュールを掲示し、「これを観たい」との観覧者の要望に応えることに努めた。 13年度展示件数 絵画10件、書跡13件、工芸17件 資料展示室の新設 従来展示する機会の少なかった近世、近代資料については、資料展示室を新設し、「資料が伝える江戸城」等特定のテーマを設定して常時展示することとした。 浮世絵展示室の拡充 外国人観覧者の要望に応えるかたちで浮世絵展示室を拡充した。これにより平成12年度252件の陳列数であったが、約83件増え、335件の陳列を行った。 展示作品の幅を拡大 新収品展示の一環として開催した特集展示「日本の伝統工芸 人間国宝の技と美」は、現代作品を展示したもので、東京国立博物館の展示作品の幅を拡充する新方針を反映させた。</p> <p>(特記事項)</p> <p>本年度において特記されるのは、特別展「松永耳庵コレクション」でコレクションの歴史的意義を明確に提示し得たことは大きな成果と考えられる。それと共に、自主展としては過去最高の20万人余の入場者数を獲得しただけでなく、美術雑誌にも特集記事が組まれ、観客の85%以上から好評を得た。</p> <p>【自己点検評価】</p> <p>常設展入館者数は20万人を超え、目標を達成した。 また、特集陳列の実施により一般向けから研究者向け等、各種の常設展示を行い、展示内容を活性化することで年度の目標を十分に達成できた。 今後、作品の保護のため展示場の照明を抑えることや陳列替えを絵画1か月半毎、書跡2か月毎、彫刻・工芸3か月毎、考古6か月毎に行っているが、このあたりを観覧者に理解してもらえよう、引き続き広報等工夫を図りたい。 また特別展「松永耳庵コレクション」でコレクションの歴史的意義を明確に提示し得たことは大きな成果と考えられる。</p>		
入館者数	200,000人以上	140,000人以上 200,000人未満	140,000人 未満	244,340人	A	
特別展 美術の中のこどもたち	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			<p>【方針】</p> <p>さまざまな時代とジャンルにわたって表現されている子供の姿を通じて、日本人にとって子供がどのような存在であったかを探求する。</p> <p>【取り組み】</p> <p>北海道から九州にいたる各地から、縄文時代から近代にいたる各時代の関係作品を集め、(1) こどもの世界(2) 成長するこども(3) 親の願い(4) 聖なるこどもの項目をもうけて系統的に展示した。また、こどもの遊びに対する理解を深めるため、関連するワークショップ、講演会を開催し、自主企画展では初めて広報充実のためマスコミとの共催事業とした。</p> <p>【実績】</p> <p>これまで美術史の視点から余り着目されていなかった作品等もテーマに沿って十分活用し、重層的に日本人にとってこどもがどのような存在であったかを示すことができたと考えている。また、観客やジャーナリズムからは、企画趣旨そのものや、文化的な視点を積極的に反映させることにより、従来、展覧会に出品する機会の少なかった歴史資料を十分に活用したことなどに対し、好評価を得た。観客の90%弱から高い評価を得た。 しかし、入場者数は目標入場者数の3万人を超え、4万人を超えたものの広報効果を期待してマスコミとの共催をしたのにも拘らず、期待したほどの波及効果はなかった。</p> <p>自己点検評価】</p> <p>展覧会名称は、来年度の展覧会については、内容を反映した直接的でわかり易いものにする必要がある。今回のマスコミとの共催は企画草案段階からのものでなく、実務がかなり進んだ時点で主に広報を依頼したものであったが、このような展覧会共催事業のあり方については再検討が必要である。</p>	A	日本美術に表現された子供をテーマにしたことは新鮮であった。東京国立博物館がこのテーマに取り組む必然性を入館者に説明することにより、より深く展覧会の意図を理解させることが出来たのではないかと思われる。
入館者数	30,000人以上	21,000人以上 30,000人未満	21,000人 未満	44,993人	A	

国宝醍醐寺展 山から下りた 本尊	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			<p>【方針】</p> <p>創建以来、1100年余の歴史をもつ京都・醍醐寺が所蔵する平安から江戸時代にいたる仏教美術等の豊かさを、近年の調査研究の成果を踏まえ、醍醐寺ならではの選りすぐりの作品を集めて総合的に展示する。醍醐寺・日本経済新聞社との共催展。</p> <p>【取り組み】</p> <p>真言密教寺院としての特色や、近世の豊臣秀吉による再興事業などを展示内容に反映させることとした。種類別のわかり易い展示構成を心がけ、(1)醍醐寺の仏教絵画、書跡、(2)醍醐寺の近世絵画・工芸、(3)醍醐寺を彩る人々、(4)醍醐寺の仏像の4部構成とした。また、多くの関連イベント等は共催者の支援を得て実施することとした。</p> <p>【実績】</p> <p>これまで、一般に公開される機会が少なかった醍醐寺の秘宝を一堂に展示したことや、堂内や厨子内に安置されているため十分に鑑賞することの困難であった本尊の薬師三尊像や、弥勒菩薩像などの名品をケースなしで、至近距離で観ることができたことなど観覧者の90%強が良かったと回答している。</p> <p>展示効果の高い仏像については専用の展示室に安置したが、観覧者の約60%が最も関心の高い種類として仏像を上げており、展示方法についても好評を得た。また能狂言の公演や護摩焚きなどの関連イベントにも高い関心が寄せられた。</p> <p>【自己点検評価】</p> <p>豊潤な同寺の仏教美術の悉皆調査による研究成果を十分に示すことができたと考え。また、観覧者の満足度も極めて高く共催事業としてその目標を十分に達成することができた。なお、仏教を中心とする宗教美術に対する国民の関心は高く、アンケート調査などをもとに新たな企画立案をする必要がある。</p>	A	醍醐寺の豊かな仏教美術に対する研究の成果が活かされた大変充実した内容であり、展示方法も効果的であった。
	入館者数	170,000人以上	119,000人以上 170,000人未満	119,000人 未満	195,611人	
天神さまの美術	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			<p>【方針】</p> <p>日本の全国各地に広がる天神(菅原道真の御霊)信仰は、天神さまの名前で国民に親しまれており、関係する社寺等には膨大な文化財が蓄積されている。門外不出の秘宝を含め、新たな調査の成果も踏まながら、これらを総合的に展示する。東京新聞、NHK、NHKプロモーションとの共催展で、開催にあたり全国の天満宮の連合組織である全国天満宮梅風会から協力を得た。</p> <p>【取り組み】</p> <p>基礎データとして菅原道真の生涯を作品展示によって検証するとともに、御霊となった天神信仰のあり方や、そこから派生した祭礼、芸能などを考慮し、項目を立てながら有機的に展示構成することとした。項目は(1)道真公の遺品と生涯、(2)天神縁起の諸相、(3)天神の姿、(4)天満宮の遺宝、(5)祭礼と芸能、の5部構成とした。また、多くの関連イベント等は共催者、協力者の支援を得て実施することとした。また、天神信仰の全国的波及を考慮し、同展を大阪、福岡に巡回させることとした。</p> <p>【実績】</p> <p>共催者、協力者の支援を得て、巡回先の地方美術館等の学芸員と共同で行った事前調査により新たに確認された作品や、海外からの里帰り作品、荏柄天神社の天神坐像等の門外不出の秘宝の公開や、天神信仰の実際を作品展示を通じて明らかにすることができ、初期の目的は達成できた。また観覧者からも好評であった。</p> <p>また、神職舞、巫女舞、里神楽、獅子舞など各天満宮に伝わる伝統芸能を共催者、協力者の協力により館内で公演し、天神信仰の広がりについての理解を深めることができたことなど、共催事業としての意義深いものとなった。</p> <p>しかし、天神さまの美術と聞いてどのような作品が展示されているのか想起され難かったのか入場者数は目標16万人のところ約13万人で目標に届かず、今後の課題も残された。</p> <p>【自己点検評価】</p> <p>庶民信仰に依拠する展示内容であったが、信仰と美術の関係がうまく表現し得なかったのか今一步、国民的関心を引き付けることができなかつた。企画内容、名称、展示の方法、広報等展覧会の総括し、次年度以後の企画立案に反映させる必要がある。</p>	B	日本の博物館の個性が活かされた優れた企画であり、内容的にも充実していた。しかし、庶民信仰という前提が強く、信仰と作品との関係がわかりにくい点があった。
	入館者数	160,000人以上	112,000人以上 160,000人未満	112,000人 未満	135,864人	

<p>時を越えて語るもの</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>【方針】 史料編纂所と東京国立博物館の所蔵品を中心に、歴史のもつ意味や時代ごとの美意識の変遷などをわかり易く展示するとともに、大学とのはじめての共催事業として、長年に渡り大学が蓄積した研究成果を披露する。東京大学史料編纂所との共催展。</p> <p>【取り組み】 日記、文書等が展示の中心であるため、絵画、彫刻等の美術作品を加えることにより、展示にアクセントをつける等の工夫をした。とくに国絵図を原寸大に複製し床面に展示するなど、これまでにない会場設置を計画した。 歴史研究の成果を表現する方法として、大規模のデジタルミュージアムを民間企業の技術協力を得ながら展示室内に設定した。 展示内容は(1)公家日記の世界、(2)武家文書の世界、(3)鎖国と開国、(4)東京大学史料編纂所のあゆみ、(5)歴史学のデジタルアーカイブの5部構成とした。 東京大学教員による講演会や作品解説を行い展示品の理解の一助としたほか、香道実演の三条西家の祖に当たる三条西実隆については展示(1)公家日記の世界、の中で大きく取り上げ、肖像、日記等各種資料を展示した。</p> <p>【実績】 通常、歴史学は言葉で語られ、記述されるが、展覧会により生の原本資料を直接見ることができたことや、国絵図、デジタルミュージアムなどの新たな試みへの評価など、全体として観客の90%近くの良い評価を得、目標はほぼ達成できた。 また、新聞などの他、歴史学の研究雑誌に取り上げられるなど、研究者の評価も高く、教員による解説も聴衆の約90%から好評を得た。はじめての大学との共催事業として意義深いものとなった。 一般の観客からは文書等が中心であったため難しいとの感想もあったが、研究者や歴史ファンからは好評であった。 デジタルミュージアムについては、動画については内容が浅かったこと、資料を豊富に搭載したアーカイブでは検索に時間がかかり、多数の観客が入場する展示室内に設置することへの問題が残った。 入場者数は63,789人で、目標の5万人を超え、目標を達成した。</p> <p>【自己点検評価】 初めての取り組みであった展示室を使用しての大規模のデジタルミュージアム導入について、バーチャルの世界と実物が隣接する展開の中で、デジタルミュージアムに何の役割を發揮させるのか検討する必要がある。また、導入する場合には、コンテンツ作成や設置場所など周到な計画が必要であり、今後、検討していかなければならない。</p>	<p>A</p>	<p>東京大学史料編纂所資料集発行100周年年記念事業として長年の研究成果が披露された、特に学術的意義の高い展覧会であった。 また、デジタル技術を活用した意欲的な試みがなされた。</p>						
<table border="1"> <tr> <td data-bbox="813 1213 937 1287">入館者数</td> <td data-bbox="937 1213 1062 1287">50,000人以上</td> <td data-bbox="1062 1213 1210 1287">35,000人以上 50,000人未満</td> <td data-bbox="1210 1213 1368 1287">35,000人 未満</td> <td data-bbox="1368 1213 2350 1287">63,789人</td> <td data-bbox="2350 1213 2487 1287">A</td> </tr> </table>	入館者数	50,000人以上	35,000人以上 50,000人未満	35,000人 未満	63,789人	A				
入館者数	50,000人以上	35,000人以上 50,000人未満	35,000人 未満	63,789人	A					
<p>横山大観 その心と芸術</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>【方針】 近代絵画史上に大きな足跡を残した横山大観の作品のうちから、大作、名作を厳選し、その精髓を展示する。多数の観客に大観芸術の価値の高さを再認識してもらうことを目標とした。朝日新聞社との共催展。</p> <p>【取り組み】 2名の館外研究員の参画をもとめ、東京国立博物館の絵画研究者と共同で、横山大観の作品のうち53件を厳選した。厳選した名品を一堂に陳列する趣旨から、展示効果を高めることを主眼とし、会期中、展示替を行わないこととした。特別展で通常行われる、複数の項目を立てての展示構成も、この展覧会においては名品鑑賞の観点から敢えて計画しないこととした。会期中、共催者の支援を得て関連の講演会を開催した。</p> <p>【実績】 観客のアンケートでは、回答者の90%から評価を得た。好評の種類も「感動」が65%、「展示方法」が13%で、展示効果を考慮した名品主義的展示という目標を十分に達成することができた。総入場者数は約28万人で、目標の15万人を約13万人超えた。 また図録が大判ではあったが、薄く作品主体であったことが好評であった。 共催者が新聞広告や電車内、駅等での広報を積極的に行うなど、共催展としての成果を上げることができた。</p> <p>【自己点検評価】 一日平均9千人を超える入場者数であったため、展示室が混雑した。入場規制を実施し、入場待ちの人のため日除けや雨をしのぐテントを設置したが、観客からは混雑への適切な処置が求められた。来年度の多数入場が予想される特別展では、混雑対策を予め行うことが課題である。</p>	<p>A</p>	<p>横山大観の大作、名品を一堂に陳列した「名品主義」のものとして、博物館の方針が着実に達成された企画・内容ともに充実した展覧会であった。また、入館者数については、約28万人の実績を上げた。 しかし、当展覧会では、入場制限や柔軟な開館時間の設定を行ったが、展示場に入場者が多すぎて鑑賞しにくい状況が一時みられた。今後とも、展覧会場の広さに応じた入場者数とするため、柔軟な開館時間の設定等の工夫を検討し、より良い観覧環境を確保するよう一層努力することが望ましい。</p>						

入館者数	150,000人以上	105,000人以上 150,000人未満	105,000人 未満	279,536人	A	
ウースマン・ソウ展	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			<p>【方針】 アフリカ・セネガルの現代彫刻家ウースマン・ソウの野外彫刻展。アフリカの民族的闘争の悲劇、魂の叫びを表現し、彫刻としての生命力を強くもつソウの代表作品を展示するとともに、募金活動を行い、セネガルの貧しい子供たちへの支援基金とすることを目的とする。セネガル大使館との共催展。</p> <p>【取り組み】 ウースマン・ソウの彫刻は大作で群像を基本とするため、構内の野外各所に一群を1具ずつ展示するとともに、構内にキオスクを設置してセネガルの現状を写真パネル等で報告して、募金活動を行うこととした。 セネガル大使館側のウースマン・ソウ日本展企画実行委員会事務局をパリに、日本事務局を東京に設置した。</p> <p>【実績】 実務進行中の5月、ウースマン・ソウ日本展企画実行委員会事務局から、資金調達が不調となり、同展の実施が困難になったとの連絡を受けた。同展の最大の協賛者である日本企業が他企業と合併したため、新会社の経営方針により資金供出が不可能となったとの報告であった。これを受け、セネガル大使及びウースマン・ソウ日本展企画実行委員会事務局が東京国立博物館長に同展中止の旨を報告した。</p> <p>【自己点検評価】 協賛会社の合併等の事態は予測困難であったが、今後は共催者の展覧会に係る運営経費等について調査し、慎重に検討することが課題として残された。</p>	-	(共催者の資金調達の事情により) 展覧会を中止することになったものであるため、評定しない。
海外交流展 長谷川等伯展	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			<p>(リートベルグ美術館・京都国立博物館・国際交流基金との共催)</p> <p>【方針】 スイス連邦チューリヒ市のリートベルグ美術館と連携し、同館に於いて桃山時代の巨匠長谷川等伯の主要作品を紹介する。</p> <p>【取り組み】 日本が初めてヨーロッパと交流をもった桃山時代の美術について、彼地では関心が高いが、そのなかでこれまで全体的に紹介される機会のなかった長谷川等伯について、その代表作である「松林図」をはじめとする作品によって、画業を体系的に紹介することによって、桃山美術の多面性を理解できるように努めるとともに、東洋美術への関心を高めることを図った。</p> <p>【実績】 会場：スイス・リートベルグ美術館 入館者数：30,812人 陳列件数：31件(うち指定品18件)</p> <p>【自己点検評価】 日本文化を含めた東洋美術に対する理解を深めることを目的に、スイス共和国国立美術館チューリヒ市のリートベルグ美術館と連携し、同館に於いて日本が初めてヨーロッパと交流をもった桃山時代美術について巨匠長谷川等伯の主要作品を紹介した。1万人以上の入館者を得て、広くスイス国での日本文化に対する関心の高まりに貢献できた。</p>	A	日本の優れた文化財を海外へ紹介するものであった。今後とも継続して取り組むことが望ましい。 また、国立博物館が海外交流展を実施していることは日本国内においてあまり知られていないため、積極的に公表することが望ましい。
はにわ 一悠 久の守護者 ～ 世紀	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			<p>会場： フランス・パリ日本文化会館、10月2日～12月15日 イタリア・バラツォ・デッレ・エスポジオーニ(ローマ)1月15日～3月4日(中止)</p> <p>【方針】 近年、欧米においては、日本の縄文から古墳時代の美術への関心が高まっており、今回はそれを受けて古墳時代の「はにわ」に焦点を当てた展覧会を開催する。国際交流基金と共催。</p> <p>【取り組み】 パリ展においては、わが国を代表する「はにわ」の名品の一堂に集め、質の高さを引き出すため、基本的に作品1点ごとの専用ケースを使用し、古墳に祀られた当初の姿を彷彿させる目的で群像展示も一部で行った。</p> <p>【実績】 パリ展では、室内の照度を落として暗くし、作品にはスポット照明を当てることで作品のみが浮かび上がるような独特の展示方法で、魅力的な会場作り成功した。しかし、入場者数は約1万4千人と比較的少なく、外国での展示会場を選択する上での課題を残した。 パリ展後予定していたローマ展は、展示会場との調整がつかず開催を中止した。</p> <p>【自己点検評価】 外国で実施する日本美術展の会場を選択する上で、事前の調査が今後の検討課題となった。また、会場の知名度や広さ、広報の方法等についても再検討する必要がある。</p>	B	日本の優れた文化財を海外へ紹介するものであった。今後とも継続して取り組んで欲しい。 入館者が少なかったことやイタリアでの展覧会の中止など、展示会場等を慎重に検討したうえで実施する必要がある。

<p>(2)-1 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。</p>	<p>貸与・特別観覧の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>			<p>貸与・特別観覧</p> <p>【方針】 収蔵品について、館内における陳列を通じてだけでなく、国内外の博物館施設へ積極的に貸与することにより、国民に対して文化財の観覧の機会をより多く提供し、日本及び東洋の文化に広く親しんでいただくとともに、文化的な側面における国際交流の一層の促進を図る。 また、特別観覧を通じて、文化財の学術的研究や教育普及に寄与し、文化財に対する国民の理解を深める一助とする。特に本年度は、各種の文化財情報を積極的に公開・提供し、また、従来、煩雑なきらいのあった諸手続きを合理化して申請者の負担を軽減するよう取り計らい、貸与及び特別観覧の制度が利用しやすい環境作りを目指す。</p> <p>【取り組み】 収蔵品について、収蔵品目録の刊行やインターネットでの画像・関連資料の公開等を通じて、公私立博物館・美術館、研究者、教育者、出版社、マスコミ、一般等へ積極的な情報提供を行った。 申請等の諸手続きについては、これまで各分野の担当部署に個別に申込むという方法をとっていたため、複数の分野にまたがる申請の際には煩雑な手続きが必要となっていたが、本年度からこれを改め、申請等に要する手続きを一つの部署（列品課）で集約して行えるようにした。さらに、貸与に際しては、文化財保存の観点から、脆弱な材質の文化財に対して陳列期間が一定の範囲におさまるよう処置する必要があるが、貸与を奨めるにあたり、当館の陳列体系の見直しをすることによって陳列期間の調整を行い、外部でも陳列できる猶予期間を作り出し、貸与できる作品の幅を広げるように努めた。これらの処置により、利用者の便宜の拡大を図った。</p> <p>【実績】 国内外の172箇所の機関に対し、1,441件にのぼる文化財を貸与した。数値の多さに見られるように、貸与先が実施する展覧会等の内容の充実や、地方や海外における文化財の観覧機会の拡充等に寄与することができた。 新規貸与については、積極的に相談、助言を行い、貸与の希望に沿うよう取り計らった。特別観覧は、熟覧、撮影、模写・模造、写真原板使用等、2,734件を行った。</p> <p>【自己点検評価】 情報提供の推進や事務手続きの一元化等の効果もあずかり、本年度の貸与及び特別観覧は、目標件数を大きく上回り、予想以上の成果を達成した。 館外の研究者等に収蔵品を詳細に調査研究する機会を提供し、また、出版物等への写真掲載を通じて一般の文化財鑑賞の利便性を高めるなど、学術的研究や教育普及等の進展に一定以上の役割を果たすことができたといえる。 収蔵品の貸与、特別観覧の事務の一元化により列品課の事務量が增大したことへの対応を検討する必要がある。 参照：事業実績統計表 105～107頁，109頁</p>	<p>A</p> <p>文化財の効率的活用を図るとともに、他館との相互活用を促進するため、積極的な広報や事務手続きを簡素化し、貸与1,441件特別観覧2,743件を行うなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 今後も、貸与等の要望が増えると思われるが、収蔵品の保存状態に留意し、展覧会の趣旨を考慮しながら、幅広くその要望に答えることが望ましい。</p>			
		貸与件数	1,072件以上	750件以上 1,072件未満			750件未満	1,441件	A
		特別観覧の件数	1,000件以上	700件以上 1000件未満			700件未満	2,743件	A
<p>(2)-2国立博物館及び公私立博物館が所蔵する考古資料を相互に貸借し、歴史的・考古学的に体系的・通史的な展覧会を実施する。(年間5件程度)</p>					<p>考古相互貸借</p> <p>【方針】 東京国立博物館が収蔵する考古資料は、昭和20年代頃までの比較的古い時期の発掘によるものが大半をしめるのに対し、各地の公立博物館等では、近年の発掘による考古資料がその中核をなしている。これらは相互に密接な関連をもち、互いに補完し合うことにより、歴史的、考古学的な意義が高まるとともに、それらを体系的に陳列、公開することにより、考古資料をより有効に活用して、国民の多様かつ高度な学習ニーズに応えることができる。そのため、国内各地域の代表的な考古資料収蔵機関と連携を図り、関連性をもつ資料を具体的に選定し、相互に貸借を実施する。</p> <p>【取り組み】 考古資料を収蔵する公立博物館等と情報交換を活発に行いながら、都道府県の教育委員会を通じて考古資料の相互貸借及びその観覧を積極的に働きかけた。また、重要な考古資料については、その模造を製作することにより、相互貸借を行ううえでの有効活用を図った。</p>				

			<p>【実績】 文化財の保存状況を勘案しつつ、9件の機関との間で、当館が収蔵する考古資料93件を貸与し、相手機関が収蔵する39件を借用した。 各施設においてこれらの資料を陳列・公開に活用した結果、観覧者からはおおむね好評の声が寄せられ、より充実した内容の観覧を実施することができた。 また、東京国立博物館が収蔵する考古資料の中から2件について模造品を製作し、貸与に伴う陳列上の欠落を補い、観覧の便宜とした。各機関の積極的な連携により、目標以上の事業を展開することができた。</p> <p>【自己点検評価】 平成12年度までは文化庁事業であったものが独立行政法人化とおもに国立博物館に移管された事業である。その意味では初年度であったが全国への呼びかけから賃借の実施まで着実に実施でき、十分初期の目標は達成した。</p>		
<p>3 調査研究</p> <p>(1)-1 調査研究が収集・保管・修理・展示、教育普及その他の博物館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる各館の方針に従い、調査研究を積極的に実施する。</p> <p>(東京国立博物館) 日本の文化財及び日本の文化に影響を与えた東洋諸地域の文化財の調査研究を実施する。 法隆寺献納宝物に関する調査研究を実施する。長期的な修理計画を策定するためのX線、赤外線写真等光学的データのデジタル画像処理システムの開発を行い、将来的に文化財保存カルテ等作成に利用できるデータベースの構築を目指す。 館所蔵模写模本類による原品復元に関する調査研究を行う。</p> <p>(京都国立博物館) 京都文化を中心とした文化財の調査研究を計画的に実施する。 神と仏の思想的交流と造形に関する調査研究を実施する。 修復文化財に関する調査研究を実施する。</p> <p>(奈良国立博物館) 南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施する。 仏教美術写真収集及びその調査研究を行う。</p> <p>(1)-2 国内外の博物館・美術館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。</p> <p>(2) 調査研究の成果については、展覧会、文化財の収集等の博物館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネット等を活用して広く情報を発信し、博物館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。</p>	<p>調査研究の実施状況</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>【方針】 調査研究は博物館における収集、保管、修理、展示、教育普及等の活動の基盤となるものである。日本のみならず東洋部門を擁する東京国立博物館は、これをふまえて、日本と東洋諸地域の文化財について、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設及び研究機関とも積極的に連携・交流をはかり、常に国際的に高い研究水準の調査研究を目指す責務をもつ。また、調査研究にあたっては外部の研究助成金等を積極的かつ有効に活用し研究基盤の充実に努める。</p> <p>(1) - 1調査研究 収蔵品の調査研究</p> <p>【取り組み】 昨年度まで実施した列品存在確認（悉皆調査）の成果をふまえ、さらに詳細な調査研究を進める。本年度は、特に次の事項に重点をおいて実施する。 ア 沖縄民族資料については精査を実施し、次年度沖縄復帰30周年記念と相接して、その成果を「図版目録 琉球資料篇」として発表する。 イ 本年度から展示室において一般公開することになった旧資料部保管歴史資料については、従来、他の分野に比べて調査研究が充分進んでいない。新たな組織体制のもとで歴史資料の調査研究を集中的に実施し、その成果を展示に反映させ、報告書として順次公開する。 ウ 館の学際的研究の柱である法隆寺献納宝物特別調査を実施し、その成果を報告書として公開する。</p> <p>【実績】 ア 民俗資料調査 各課室にわたって保管されている琉球関係資料の精査を実施し、その成果を、来年度早々、沖縄復帰30周年記念の5月に、久しく待望されていた『図版目録 琉球資料編』として公開する準備を完了した。 イ 歴史資料調査 旧資料部保管の歴史資料については、本年度、学芸部に新設された資料課歴史資料室の所管として、新体制のもとで調査研究を集中的に実施した。 特に、近年内外において注目されている歴史資料であり、中期目標にかかげている館所蔵模写模本類による原品復元に関する調査研究対象の一つである幕末から明治にかけて撮影された写真資料について、外部の研究者も交えて調査研究を実施し、その成果を『幕末明治写真資料目録 3』として公開した。 その他、昨年度文化庁から管理換となった「宗家文書」（九州国立博物館分）について、その内容を確認して総目録を作成した。 また、旧資料部保管の歴史資料に関しては、科学研究費の研究成果公開促進費（データベース）を活用し、明治期の文化財調査報告書『宝物目録』に関する「宝物目録データベース」、明治から昭和初期に撮影された文化財を被写体としたガラス乾板に関する「貴重原版の文化財画像情報システム」、帝室博物館旧蔵書籍に関する「帝室博物館旧蔵書籍データベース」を実施し、それぞれ成果をあげている。 ウ 法隆寺献納宝物特別調査 法隆寺献納宝物特別調査を、本年度も、2月20日（水曜日）から2月22日（金曜日）まで、延べ21人の研究者によって実施した。 本年度は、法隆寺献納宝物中の塔鏡・脚付鏡・蓋鏡・八重鏡等響銅製供養具を調査対象として実施し、肉眼観察はもとより実体顕微鏡・ガンマ線写真撮影等科学的調査、実測図の作成により、その詳細かつ具体的な基礎データをとりまとめ、同宝物の制作技法に関する新知見を得ることができた。その成果を『法隆寺献納宝物特別調査概報XX 計量器』として公開した。</p>	<p>A</p> <p>収集・保管、公衆への観覧、教育普及の事業など博物館活動の推進を図るため、収蔵品に関する調査研究、特別展に関する調査研究、保存環境に関する調査研究等を実施するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。また、科学研究費補助金の獲得に努め、調査研究の充実を図った。 調査研究については、今後も幅広く外部研究者との交流を促進し、積極的に取り組むことが望ましい。 なお、研究成果については、図録等の刊行物のみならず、学会等においても幅広く積極的に発表することが望ましい。</p>		

【自己点検評価】

今年度は美術作品に止まらず、民族資料や歴史資料にも調査研究の範囲が広がり、収蔵品の学術的位置付けがこれまで以上の広がりを見せた。今後も引き続き歴史資料等の調査研究を進めていく。

特別展のプロジェクトによる調査研究

【取り組み】

特別展に関しては、館内に特別展ごとにプロジェクトチームをつくるほか、必要に応じて館外の研究者にも協力を求め、国内および国外の調査研究を実施する。

【実績】

本年度開催された特別展「国宝 醍醐寺展」、「天神さまの美術」、「美術の中のこどもたち」、「松永耳庵コレクション」、「時を超えて語るもの」、「横山大観展」、「雪舟展」、「韓国の名宝」、また海外で開催された特別展「長谷川等伯展」〔スイス・リートベルグ美術館〕、「はにわ展」〔フランス：パリ日本文化会館〕について、各特別展のプロジェクトチームの研究員が、それぞれ国内外の作品の調査研究を実施し、新資料の発見等の成果をあげ、その研究成果を展示とカタログに反映させた。その内容については、本評価フォーマットの「2. 公衆への観覧、特別展」に記述の通り。

【自己点検評価】

各展覧会とも研究成果を踏まえた展覧となり図録にもその成果を反映させることができた。科学研究費等による調査研究

【取り組み】

科学研究費などの研究助成金を有効に活用し、特定のより専門的で高度な研究課題に関する調査研究を積極的に実施する。

【実績】

ア 科学研究費による調査研究は以下の通りである。

1. 「法隆寺献納宝物と正倉院宝物の源流に関する調査研究 韓国所在の彫刻・工芸作品を中心に」は韓国の研究者との共同研究であり、韓国において国立中央博物館等の韓国所在の作品の調査研究を実施し国際学术交流の成果をあげることができた。
2. 「日本出土原始古代繊維製品の集成及び基礎的研究」は日本で初めて全国的な資料集成をめざしたもので、宮崎県の高塚出土の直刀や鉄剣などの鉄器付着繊維製品をはじめ、韓国の現地調査等を実施しており、この分野の研究の基礎を築く成果をあげた。

その他、次の6つのテーマについても研究計画に基づく成果をそれぞれ出している。

3. 「日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究」
4. 「中尊寺経軸端金具に関する基礎的調査研究」
5. 「埴輪工人の移動からみた古墳時代前半期における技術交流の政治史的研究」
6. 「春秋戦国時代の青銅器の研究」
7. 「中国の書画印・鑑蔵印・落款に関する諸資料のデータベースとその総合的研究」
8. 「博物館資料の保存環境としての木質空間の特性」

イ 当館の研究員が分担研究者として次の共同研究を実施した。

1. 「中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の宗教彫像に関する調査研究」
2. 「敦煌写本の書誌に関する調査研究～三井文庫所蔵本を中心として～」
3. 「漢字文化圏における古写本の変遷と初期の印刷物に関する調査研究」

ウ 科学研究費以外の研究助成金による調査研究として、「中国・シルクロードにおける舍利荘嚴の形式変遷に関する調査研究 隋唐時代の棺形舍利容器と埋葬儀礼の関わりを中心に」（財団法人なら・シルクロード博記念国際交流財団/シルクロード学術センター）を実施した。この研究は、中国・日本の外部研究者を加えた共同研究であり、中国・新疆ウイグル自治区及び陝西省で関連資料に関する現地調査を実施し成果をあげている。

【自己点検評価】

科学研究費やその他の外部補助金による研究は学際的な面、特に自然科学との共同研究の場に広がりをもちつつある。いずれも今後の研究の基盤となるものが多く着実に研究を進めたい。保存修理に関わる調査研究

【取り組み】

長期的な修理計画を策定するための基礎的な調査研究を実施し、文化財保存カルテ等作成のためのデータベースの構築をはかる。

【実績・自己点検評価】

ア 環境保存室と保存技術室からなる保存修復課を新設し、研究体制の整備充実を図り、新体制のもとで、収蔵品の本格修理・応急修理や他館への貸与等にもなっている作品状態の点検作業を実施し、文化財保存カルテを約500件作成し、ほぼ本年度の目標を達成した。

イ 中期目標に示した長期的な修理計画を策定するため、光学的調査によって得られた写真画像をデジタル化するシステムを開発することを目的とする研究の第一段階として、基礎的な文献資料の収集をおこなうとともに調査研究に必要な装置をポラ美術振興財団の研究助成により導入し、本年度の計画を完了し、来年度以降の調査研究に向けての成果をあげることができた。

			<p>九州国立博物館（仮称）設立準備にかかる調査研究</p> <p>【取り組み】 九州国立博物館（仮称）設立準備室の求めに応じ、九州国立博物館（仮称）の平常陳列に係わる作品の調査研究と展示環境等の問題について調査研究を実施し、助言をおこなう。</p> <p>【実績・自己点検評価】 九州国立博物館（仮称）の平常陳列の内容について、設立準備室のスタッフと意見交換をおこない、それに係わる当館保管の全ての分野にわたる作品について、分野ごとに個別に共同の調査研究を実施し、必要な助言をした。 この内、たとえば、琉球関係展示に関する進貢船模型については、日本海事史学会などの外部有識者の参加を求めて調査プロジェクトを設置し、展示の具体的計画を検討するなど、各分野ごとに成果をあげており、来年度以降の基礎的作業を完了した。 参照：事業報告書 9～11頁</p> <p>(1)-2客員研究員等の外部研究者の招聘</p> <p>【取り組み】 客員研究員等の外部研究者の招聘。調査研究にあたっては、当館研究員のみではなく国内外の博物館・美術館その他これに類する施設の研究者を、客員研究員、外国人招聘等の制度を有効に活用して充実をはかる。</p> <p>【実績・自己点検評価】 客員研究員の制度を有効に活用して次の各分野18の研究テーマについて実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 骨角貝器の研究（金子浩昌早稲田大学講師） 中国地方の古墳出土金属器・石製品の研究（渡辺貞幸島根大学教授） 瓦磚資料の研究（大脇潔近畿大学教授） 法隆寺宝物室保管『古今目録抄』の研究」（東野治之奈良大学教授） 金石拓本の研究（柴田光彦元早稲田大学教授） 本草書・博物書（江戸時代和書）の研究（磯野直秀元慶応大学教授） 鉄鏡に関する研究（押元信幸東京芸術大学講師） 浮世絵版画の研究（大久保純一国立歴史民俗博物館助教授） 近世漆工芸のデザインに関する研究（日高薫国立歴史民俗博物館助手） 近世小袖服飾及び芸能衣装の縫製染織技法に関する研究（水上嘉代子遠山記念館学芸員） 中国工芸品の研究（中野徹久保惣記念美術館長・黒川古文化研究所長） 中国北方系青銅器の研究（高浜秀金沢大学教授） 朝鮮半島出土瓦磚に関する研究（亀田修一岡山理科大学助教授） 東洋染織品に関する研究（小笠原小枝日本女子大学教授） 古代エジプトの神像及び関係作品に関する研究（鈴木まどか比治山大学教授） 当館保管の洋書及び関連資料の研究（松田清京都大学教授） 日本近代美術工芸資料の研究（横溝廣子東京芸術大学大学美術館講師） 石像彫刻の再修理と保存処置法に関する調査研究（宮城県美術館学芸課副主任研究員 藤原 徹） <p>これらの調査研究の内、骨角貝器の研究の成果は「東京国立博物館に収蔵する宮城県沼津貝塚出土の骨角製品について」（『MUSEUM』No.573、2001年8月）に公表された。また瓦磚資料の研究については、本年度刊行した考古列品修理の詳細な報告書である『学術調査報告書 瓦塔・鴟尾』に、その成果が反映されている。</p> <p>その他のテーマについても、それぞれ今後の博物館における収集、保管、修理、展示や個別の図版目録、研究図録、修理報告書などに反映させることができるだけの成果をあげることが出来た。</p> <p>客員研究員以外にも、当館の外国人招聘制度を活用し、中華人民共和国・湖北省博物館の李虹氏、台湾・国立故宮博物院（台北）の林柏亭氏、韓国・湖巖美術館附設文化財保存研究所の韓鐘哲氏、カンボジア共和国・アプサラ委員会理事のアン・チュリアン氏、ロシア連邦・国立民族学博物館のヴァレンティナ・ゴルバチエーヴァ氏、イギリス・大英博物館のロバート・ノックス氏を招聘し調査研究を実施した他、他の研究機関の招聘により来日した多くの外国研究者の調査研究に協力し、国際学術交流の成果をあげることが出来た。 参照：事業実績統計表 119・112頁，123～125頁</p> <p>(2)調査研究の成果の公表については、各調査研究の成果の中に記述した。 参照：事業実績統計表 131・132頁</p>	A			
	客員研究員 招聘人数	18人以上	13人以上 18人未満	13人未満	18人	A	

<p>4 教育普及</p> <p>(1)-1 美術史・考古学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館・美術館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。</p> <p>(3)-3 美術図書等の閲覧施設を研究者中心から一般へと利用の拡大を図り、生涯学習の場とする。</p> <p>(2)-1 次に掲げる各館の方針に従い、新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした文化財解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、文化財等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。</p> <p>また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。</p>	<p>資料の収集及び公開（閲覧）の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>【方針】</p> <p>文化財に関する図書資料及び写真資料を収集し、資料館において国民一般の利用に供するとともに、レファレンス機能も充実させる。</p> <p>【取り組み】</p> <p>館内で撮影された所蔵作品等の写真を日々整理・分類した。また、購入・寄贈・納本等により文化財に関する図書等を収集・分類・整理した。また、これらを資料館で一般に公開するとともに、来館、電話、FAXによる問い合わせにも適切に対応できる体制を整備した。</p> <p>【実績】</p> <p>館内で撮影された所蔵作品等の写真6,190枚を整理・分類した。また、購入・寄贈・納本等により文化財に関する図書等を4,732冊を収集・分類・整理した。また、これらを資料館で一般に公開するとともに、来館、電話、FAXによる問い合わせに適切に対応した。</p> <p>4,334人が資料館に来館し、また来館以外にも電話・FAXによる問い合わせに対し適切に対応し、文化財に関する調査研究や美術作品の普及・啓蒙に貢献した</p> <p>【自己点検評価】</p> <p>(1)-1, (3)-3は資料館の資料利用によって連動的に実施している。図書館ではないため、研究用図書を一般用に供しているため、十分な対応ができていたとは言えず、改善を検討していく。</p> <p>参照：事業実績報告書 137頁</p>	<p>A</p>	<p>新たに文化財に関する図書4,732冊及び写真資料等を収集し、資料館において一般に公開するなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>今後も、3館の資料を登録及び検索できる現代的システムの開発や広報の強化を図り、より一層、資料や資料館を活用することが望ましい。</p>
<p>（東京国立博物館）</p> <p>児童生徒を対象とした文化普及事業及び文化財とのふれあい事業を実施し、教育普及の推進を図る。</p> <p>中・高校生を対象とした総合学習としての職場体験学習及び大学等を対象としたインターンシップの受入れを実施する。</p> <p>（京都国立博物館）</p> <p>小中学生学習プログラム等について検討、実施する。</p> <p>（奈良国立博物館）</p> <p>親と子の文化財教室を実施し、児童生徒に対する教育普及の促進を図る。</p> <p>修学旅行生等を対象とした文化財の案内・説明資料等の作成、解説等について検討、実施する。</p>	<p>児童生徒を対象とした講座等の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>【方針】</p> <p>児童生徒の文化財に対する理解や学習意欲の向上を促進する一助となるよう、今年度においては児童生徒を対象としたこどもミュージアムやワークショップの充実を図るとともに、中学校・高校からの要望に応じて職場体験学習を実施する。</p> <p>また、大学3校程度からインターンシップを受け入れる</p> <p>【取り組み】</p> <p>特別展「天神さまの美術」に合わせて、鑑賞の手助けとなるようこどもミュージアム「天神さまってどんな人」を実施した。（7月20日～8月26日まで）期間中「絵巻を作ろう」「親子でさがそう！博物館たんけん」等のワークショップを併せて実施した。</p> <p>特別展「美術の中の子どもたち」に関連して、ワークショップ「昔の遊びをしてみよう」や子供向け美術学習映画の上映を実施した。</p> <p>さらに、学校からの要請に基づく中・高生の職場体験学習及び公募による大学生のインターンシップの受入れを実施した。</p> <p>【実績】</p> <p>（こどもミュージアム）</p> <p>こどもミュージアムにおいては、菅原道真の一生をパネル展示で解説し、関連する美術作品も展示した。来館者の反応としては子どもだけでなく大人にとっても鑑賞に役立つ内容であったとの声が多かった。</p> <p>（ワークショップ）</p> <p>ワークショップにおいては、常設のワークショップ会場には多くの子供たちが訪れた。申込制で実施した「絵巻をつくらう」「親子でさがそう！博物館たんけん」は、特別展以外の展示を鑑賞するための動機付け及び鑑賞のヒントを提供することを目的としたが、9日間でのべ73人が参加した。概ね子供及び引率の父兄からの評判も高く、東京国立博物館の新たな側面の発見として来館者に認識された。</p> <p>特別展「美術の中の子どもたち」では、美術作品に表現されている昔の遊びを体験するワークショップを実施し、9日間でのべ975人が参加し、上記同様の評価が得られた。また、来館した子供たちの美術学習の手助けとなる教育映画の上映も併せて実施した。</p> <p>（体験学習）</p> <p>平成14年度から実施される新学習指導要領を先取りする形で、全国の中学校・高校からの「総合的な学習の時間」の一環として当館において職場体験学習を実施したいとの要望に応えるため、インフォメーション業務を中心とした博物館業務を見学・体験するプログラムを実施した。現状では、このような職場体験学習を受け入れている機関が少ないため、生徒はもとより学校側からの評価も高い。</p> <p>（インターンシップ）</p> <p>大学生を対象としたインターンシップでは、公募により3校、計3名の学生を受け入れ、職員とともに教育普及事業に関する業務に5日間に渡り従事させた。参加者の満足度も高く、さらに学習意欲を向上させるものであった。</p>	<p>A</p>	<p>教育普及の取組みの充実や学校教育における博物館の活用の推進を図るため、限られた人員と予算で積極的にワークショップ等を実施し、平成12年度の参加者数以上の実績を上げるなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p>

					<p>【自己点検評価】 児童・生徒を対象とした事業と生徒・学生の受け入れの2つの方向で実施した。「こどもミュージアム」や「ワークショップ」は、特別展の主題を体験的に理解できるよう工夫をこらし、また博物館に親しんでもらえるものとした。今年度の新たな組織を立ち上げての試みであり、試行錯誤であったが十分に組み合わせたと考えている。 体験学習、インターンシップでは「求めに応じて」ということではあるがこれからの教育と博物館の連携という新たな試みであり今後は事業としてプログラムを検討していきたい。 参照：事業実績統計表 139～141頁</p>		
<p>(3)-1 文化財に関する情報について正しく後世に伝えるとともに、その理解を深めるような講演会、講座及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。 それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。</p>	<p>講演会等の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する</p>	<p>582人以上</p>	<p>407人以上 582人未満</p>	<p>1,048人</p> <p>【方針】 博物館における生涯学習の推進に寄与するため、今年度は特別展・共催展における記念講演会、月例講演会、列品解説、夏期講座を開催するとともに、月例講演会の一部を見直し、開催回数及び内容の充実を図る。</p> <p>【取り組み】 平成12年度は記念講演会及び月例講演会を月1回の割合で実施してきたが、今年度は可能な限り実施回数を増やすとともに、一つのテーマで連続した講演会を2～3回シリーズで実施した。また、特別展「美術の中のこどもたち」に関連して、夏期講座を3日間開催し、日本、西洋、東洋美術に表現される「こども」の姿について解説するとともに社会学の観点からも「こども」という存在について分析・解説した。 列品解説は原則毎週火曜日に当館研究員が実際の作品を前に解説を実施した。</p> <p>【実績】 (講演会) 今年度は、記念講演会12回、月例講演会11回(うちテーマ別が3テーマ、8回)を開催し、のべ5,179人(平均225人)が参加した。開催回数、参加者数が大幅に増加しただけでなく、単に当館研究員の専門分野に関する講演会を羅列することなく、テーマや内容に関連性を持たせ、講演会の意図するところを明確にし、目に見える形で、教育普及事業の充実を図った。また、アンケートを実施し、満足度調査を実施したが80%以上の方から満足したとの回答を得ている。さらに、講演会のテーマ・内容もアンケート結果に配慮した内容とした。</p> <p>(列品解説) 列品解説は講演会とは趣向を変え、研究員が作品を前にして、来館者の身近で解説するもので、来館者と館員の交流が可能であり、来館者の評判もよく、回を追うごとに参加者が増えている。今年度はのべ43回開催し、2,736人(平均64人)が参加した。</p> <p>(夏期講座) 夏期講座は7月11日～13日まで3日間開催した。参加者は135人と目標を下回ったが、内容的には、日本美術史の観点だけでなく、西洋美術、東洋美術にみられる子供たちの姿を解説するとともに、社会学の観点からも「こども」という存在を分析・解説し、その多彩な内容から参加者には充分満足できるものであった。</p> <p>【自己点検評価】 文化財に関する情報発信については、講演会、ギャラリートークである列品解説、特別展等開催時の記念講演会、特別展の事前学習講座である夏期講座を実施している。講演会等では各種情報機器を活用し、わかりやすいものとの工夫をしている。特に近年は列品解説が好評を博している。研究者自身が展示場で展示の趣旨を直接語ることの大切さを自覚し積極的に展開したい。</p> <p>参照：事業実績統計表 143～146頁</p>	<p>A</p>	<p>A A</p> <p>文化財等の理解促進を図るため、限られた人員と予算で積極的に月例講演会や列品解説を実施し、平成12年度以上の実績を上げるなど中期目標に向けて着実に成果を上げている。 また、講座等については、年齢・性別・学歴を問わず、幅広い国民各層を対象とするよう配慮し、その他の業務に支障を来さない程度に充実させることが望ましい。 友の会の活動については、その在り方を含めて再検討する必要がある。</p>

	講演会等の回数	月例講演会6回以上			11回	A
		8回以上	6回未満 8回未満	6回未満		
		列品解説			43回	A
		40回以上	28回以上 40回未満	28回未満		
		特別展・共催展記念講演会			12回	A
		4回以上	3回	3回未満		
		夏期講座			1講座3日間	A
		3日以上	2日	1日		
	講演会等の参加者数	月例講演会			1,546人 (平成12年度は1回のみ開催)	A
		165人以上	116人以上 165人未満	116人未満		
列品解説			2,736人	A		
2,648人以上		1,854人以上 2,648人未満	1,854未満			
特別展・共催展記念講演会			3,633人	A		
3,151人以上		2,206人以上 3,151人未満	2,206人未満			
	夏期講座			135人	C	
	337人以上	236人以上 337人未満	236人未満			
	講演会等に対するアンケート結果	80%	56%以上 80%未満	56%未満	82%	A
(3)-2 友の会活動を通じて、文化財に接する機会を増やし、より充実した学習の場を提供する。	友の会の活動状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			<p>【方針】 友の会活動を充実させるための一歩として、今年度は友の会対象の講演会を開催する。</p> <p>【取り組み】 友の会対象の講演会を2回開催した。</p> <p>【実績】 友の会対象の講演会は「文化財の収集と登録 博物館の中で行われていること」「博物館の展示をつくること―その裏側を語る―」の2回を開催した。一般の講演会とは異なり、当館の実情に一歩踏み込むテーマ及び内容とした。アンケートによる参加者の満足度は高く、友の会の存在価値を認識させるものであった。</p> <p>【自己点検評価】 友の会については、現在は当館から情報を発信するものだけであるが、博物館の応援団として双方向からの交流を目指していきたい。</p> <p>参照：事業実績統計表 141頁</p>	B

<p>(4)-1 博物館・美術館関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。</p> <p>(4)-2 全国の公私立博物館等の学芸担当職員（キュレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。</p> <p>(4)-3 公私立博物館・美術館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。</p> <p>(4)-4 公私立博物館・美術館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。</p>	研修の取組み状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>(4)-1は京都国立博物館において実施</p> <p>(4)-2</p> <p>【方針】 全国の公私立博物館等の学芸担当職員（キュレーター）の研修を2名程度受入れる。</p> <p>【取り組み】 各都道府県に対し、研修の実施及び参加者の募集を周知し、各都道府県からの推薦に基づき受講者を決定し、研修を実施する。</p> <p>【実績】 学芸担当職員の研修は、平成12年度まで文化庁事業であったものを独立行政法人化とともに国立博物館に移管して事業であり、初年度の取り組みであったが着実に実施できた。また公私立博物館への援助・助言も独立行政法人国立博物館になって正規に位置付けられたものであるが、25件の実績が上がり着実に成果を上げた。 今年度は推薦者が1名であったために、1名の受講を決定し、情報課において約6か月間下記の研修を実施した。 情報システム運用・管理 画像データ蓄積戦略 マルチメディアコンテンツ作成におけるテキストデータ管理 博物館業務用ネットワーク設計 Linux導入</p> <p>受講者の感想として「この研修で得られた知識と技術を所属の博物館での活動に反映させることにより、大きな成果となるものと思われる。」とのことであり、相当の成果を納めたと思われる。</p> <p>【自己点検評価】 学芸担当職員の研修は、平成12年度まで文化庁事業であったものを独立行政法人化とともに国立博物館に移管して事業であり、初年度の取り組みであったが着実に実施できた。また公私立博物館への援助・助言も独立行政法人国立博物館になって正規に位置付けられたものであるが、25件の実績が上がり着実に成果を上げた。 (4)-3, 4については求めに応じて実施した。</p> <p>参照：事業実績統計票153～157頁</p>			B	博物館関係者等の人材育成及び人的ネットワークの形成を図るため、公私立博物館等の学芸担当職員を受入れ6ヶ月間研修するなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。 今後も、受入可能な人数の範囲内で積極的に取組む必要がある。
	学芸担当職員の受入人数	2名以上	1名	0名	1名		B
<p>(4)-5 大学等と連携し、大学院生や大学生を受け入れ、文化財に関する実習等について検討、実施する。</p>	大学等との連携の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>【方針】 大学3校程度からインターンシップを受け入れる。（再掲）</p> <p>【取り組み】 大学3校から3人を受け入れ、教育普及事業に関するインターンシップを実施した。（再掲）</p> <p>【実績】 東京女子大学、大正大学、多摩美術大学から各1名ずつ3名を受け入れ、講演会の実施補助、「松永耳庵コレクション展」における事前解説、裏庭ツアーの実施補助業務等を5日間実施した。担当した教育サービス室がもっとも忙しい時期にあたり、3名も息つく暇もないほどであったが、感想としては皆一様に「貴重な職場体験となり、将来は博物館に勤務したいと考えている」とのことであり、今後の学習意欲の向上を喚起でき、有益なものであった。</p> <p>【自己点検評価】 インターンシップは博物館等に関心を寄せる学生が現場に触れる数少ない機会である。現在は求めに応じて実施をしているが、成果をよく検証し、今後の取り組みを検討したい。</p>			A	大学等と連携協力を図るため、博物館実習生を受入れ博物館の職場を体験する機会を提供するなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。 なお、大学等との連携は積極的に行われるべきであるが、博物館実習生の受入れについては、博物館側の負担にならないよう、受入れ状況を常に見直すことが望ましい。
	大学生等の受入人数	3校以上	2校	1校	3校（3名）		A

<p>(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、図版目録、展覧会目録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立博物館への理解の促進を図る。また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、3館共同による広報体制の在り方について検討を行う。</p>	<p>広報活動の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>【方針】 3館共同の広報体制として博物館ニュースを月刊から隔月刊とし、企画内容・デザインともにリニューアルして刊行する。各展覧会目録を作成するほか、調査研究の成果として、紀要、図版目録、法隆寺献納宝物特別調査概報、修理報告書、研究図録を刊行する。さらにホームページを充実し、アクセス件数を増やす。</p> <p>【取り組み】 既存の博物館ニュース（A4判、16ページ、オールカラー）を年6回刊行した。リニューアルした博物館ニュースについては、既存のタブロイド新聞判をA4判の冊子型に変更し、魅力的なカラービジュアルを多数盛り込んで、より親しみやすいかたちにした。3館の展示・催しに関するタイムリーな情報を掲載すると共に美術鑑賞の手引きとなるような読み物・博物館の日常や裏方を知ってもらうためのエッセイなども掲載して、美術および博物館の活動に対する理解を深めるようにした。 年間購読料2,080円（リニューアル初回号に関しては周知目的のため無料で配布、購読料は5冊分）、年間購読者数5,422人（12年度は月刊で2,050円、6,517人）。また、展覧会図録を6冊、紀要、法隆寺献納宝物特別調査概報、修理報告書2冊、研究図録を計画どおり刊行した。図版目録については、今年度中に原稿作成作業は終了したが年度内に刊行することができなかったため、14年度当初にすみやかに刊行する。</p> <p>【実績】 博物館ニュースは、従来の展示情報を中心とした毎月1回のタブロイド版1枚4面刷から、読んで楽しめるものを目指し、京都、奈良の情報も増やし、隔月A4版16頁にリニューアルを行った。しかし年間購読者数が減少したのでこの原因を分析し、より広報の実を上げるための方策を検討する。特別展の展覧会図録については6冊刊行し、合計94,788冊が購入された。それぞれの図録は展覧会を理解し、楽しむために有効であることはもちろんのこと、学術研究用資料としても国民に広く活用されうるものとの評価を得ている。 紀要、法隆寺献納宝物特別調査概報、修理報告書については計画どおり刊行されたが、図版目録については原稿作成中に、研究上の必要から予想外の時間を費やし印刷・刊行までには至らなかった。 しかしながら、それまでの調査研究についてはほぼ予定どおり進行している。 図版目録が印刷・刊行までに至らなかった理由としては、「琉球資料編」では、複数の収蔵担当室の作品を整理し直し、琉球資料の再編を行ったこと、調査研究の進展に伴って収載すべき資料が新たに発見され、写真撮影・整理に予定以上の時間がかかったことがあげられる。 なお、これについては14年度にすみやかに刊行する。</p> <p>【自己点検評価】 博物館ニュースの販売方法、購読料、周知方法等を検討し、購読者の増加を図るのが次年度以後の課題である。 14年度については、このようなケースに対処できるよう調査撮影日程を早期に設定するなど、速やかに作業を終えて、刊行するための改善を図る。 図録は学術研究の面ではその高さが知られているところではあるが、一方価格が高い、重すぎて持ち帰るのが大変との意見も多い。多くの観覧者が望んでいる図録とはどのようなものかを精査し、図録のあり方を検討する必要がある。</p>	<p>A</p>	<p>文化、文化財及び国立博物館について国民の理解促進を図るため、展覧会図録、紀要及び調査報告書等を発行するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 今後も、より一層、国民に博物館活動が理解されるよう内容を工夫し、積極的に実施することが望ましい。</p>
<p>(1)-2 収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。 (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。 (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、文化財情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。</p>	<p>収蔵品の情報デジタル化及びその活用状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>【方針】 画像1万2千枚、文字500万字をデジタル化する。ホームページを充実し、アクセス件数を増やす。日本文化の紹介のため、高精細画像による鑑賞システムを提供する。デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。</p> <p>【取り組み】 画像2万4千枚、文字547万字をデジタル化した。ホームページを用いて、講演会等の教育普及事業に関する広報を充実させた。館内に「国立博物館所蔵国宝高精細画像閲覧システム」を設置し、来館者が端末を操作して自由に利用できるようにした。企業と連携して、デジタル情報の有料提供を14年4月実施に向け検討した。</p> <p>【実績】 画像については目標の倍、文字についても目標を大きく上回る数量のデジタル化を達成し、収蔵品等の情報の蓄積が推進された。</p>	<p>A</p>	<p>文化、文化財及び国立博物館について国民の理解促進を図るため、目標を超える文化財情報のデジタル化を実施し、ホームページの充実を図るとともに、国立博物館の全ての国宝を館内及びインターネットで閲覧することができる「国立博物館所蔵国宝高精細画像閲覧システム」を構築するなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。 また、文化財の保存・修理等を含む文化財に係る情報のデータベース化にあたっては、標準化を検討するなど国民が簡便な方法でアクセス出来るシステムの開発を常</p>

			<p>講演会等教育普及事業については、博物館ニュース及び実際に来館した際の掲示等が広報の中心であったが、今年度は積極的にホームページを活用して広報した。また、実施したワークショップ等の様子もタイムリーに掲載し、より多くの来館者が参加してもらえるよう努力した。館内に「国立博物館所蔵国宝高精画像閲覧システム」を設置し、来館者が端末を操作して自由に利用できるようにしたことにより、展示室で常時見ることのできない国宝についても、来館者が身近に感じられることを可能とした。また、システムを利用して、国宝一覧を検索し、個別作品のページに進み、そのページで代表画像、基本データ、さらに大きな画像が見られるなど来館者の用途に応じた利用を可能とし、来館者の国立博物館所蔵の国宝に対する理解と関心を促進し、来館者の反応も好評であった。</p> <p>当館所蔵の文化財のデジタル画像（一部写真原板・焼付を含む）を、その目的に応じて広く一般に利用してもらうため、「TNM Image Archives」開設のための検討を行い、平成14年4月実施の予定となった。</p> <p>【自己点検評価】 デジタル情報の提供は、法隆寺宝物館において一般から研究者向けの情報を日本語、英語、仏語、中国語、韓国語の5か国語で提供し最新の研究成果等も速やかに取り込むなど着実に実施している。</p> <p>ホームページの更新や高性能画像による展示場での鑑賞システムの導入も行った。また、デジタル情報の有料提供の検討を含め、デジタル化のデジタル化の推進を積極的に図り13年度当初目標を達成した。今後はデジタル情報の多角的な活用の検討を進める。</p>		<p>に心懸けることが望ましい。</p> <p>文化財がコンテンツの素材として注目される中で、デジタル化に伴う著作権について慎重に取り組むことが望ましい。</p>
<p>(6)-1 ボランティア希望者に対し、そのニーズに応える研修を実施し、参加者の拡大を図る。ボランティアは登録を行い、連携協力して展覧会での解説など、国立博物館が提供するサービスの充実を図る。</p> <p>なお、ボランティアの受け入れについては、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の延人数の確保に努める。</p>	<p>ボランティアの活用状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>【方針】 ボランティアに対して特別展ごとに解説会や研修会を開催し、インフォメーション業務や教育普及業務を充実させる。 特に今年度はボランティアによる案内・解説を実施し、来館者に対するサービスの充実を図る。</p> <p>【取り組み】 ボランティアに対して、特別展ごとに解説会を実施するとともに、「松永耳庵コレクション展」においてボランティアによるガイドンズ及び裏庭見学ツアーの実施のための研修を実施した。また、こどもミュージアムにおいては、期間中、子供の指導・援助を行うためにボランティアを募集し、合計119人のボランティアを受け入れた。</p> <p>【実績】 今年度のボランティア事業については、インフォメーション、講演会、列品解説の実施補助等に加え、「松永耳庵コレクション展」においてボランティアによるガイドンズ及び裏庭見学ツアーや館内の樹木を紹介する樹木鑑賞ツアーを実施した。教育普及ボランティアが来館者と接する機会が拡大しボランティアの満足度や充実度も増している。 受け入れ人数も90名から119名に増加し、上記事業を実施するための研修も充実させた。平成14年度に向けてさらにボランティア事業を充実させるため、「生涯学習ボランティア」の新規募集を行い合計で156名のボランティアの受け入れを決定した。</p> <p>【自己点検評価】 平成12年度は通年のインフォメーション・サービスと教育普及にかかるボランティアを受け入れていたが、インフォメーション・サービスは機能していたが、教育普及ボランティアは十分生かされていなかった。この反省を踏まえ13年度はボランティアの自発性を尊重し活動のあり方を全く変え、また通年だけでなく期間限定のボランティアも導入した。それによりボランティアの目的意識が明確になり活動が活性化した。13年度の取り組みは正しい方向であったと考えている。</p> <p>参照：事業実績報告書 159・160頁</p>	<p>A</p>	<p>ボランティア等実施者の学習ニーズへの対応及びサービスの充実を図るため、ボランティアを積極的に受け入れインフォメーション、講演会、列品解説の実施補助を実施するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>ボランティアの活用については、解説ボランティアだけでなく、博物館業務の補助など幅広く検討することが望ましい。</p> <p>また、ボランティアの受け入れは職員の負担を伴うため、ボランティアに博物館業務の専門家を募るなど、ボランティアの自主的活動を促すような方法を検討することが望ましい。</p>

	ボランティア の受入件数	90人以上	63人以上 90人未満	63人未満	119人	A	
(6)-2 企業との連携等、国立博物館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討する。	渉外活動の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			【方針】 企業との連携を図る手段の一つとして、今年度はデジタル情報の有料提供についての方策を検討する。 【取り組み】 企業と連携して、デジタル情報の有料提供を14年4月実施に向け検討した。 【実績】 当館所蔵の文化財のデジタル画像（一部写真原板、焼付を含む）を、その目的に応じて広く一般に利用してもらうため、「TNM Image Archives」開設のための検討を行い、平成14年4月実施の予定となった。 【自己点検評価】 「TNM Image Archives」を広く宣伝し、文化財を普及啓蒙する一方策としてさらに推進していくこととする。	B	国立博物館の業務の充実を図るため、デジタル情報の有料提供を検討するなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。 今後も、引き続き検討する必要がある。
5 新たな博物館の運営に向けた取り組み 法人本部に九州国立博物館（仮称）設置準備室を設置し、展示の企画・設計、展示に必要な作品収集、調査研究等の機能の整備など、開設に支障のないよう準備を推進する。	開館への準備状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			九州国立博物館（仮称）設立準備室で実施。	-	(九州国立博物館(仮称)で評定。)
6 その他の入館者サービス (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、導線、施設設備の工夫、整備に努める。 (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。 (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。 (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。 (2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な博物館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる博物館となるよう努力する。 (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。	その他の入館者サービスの状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	(1)-1 バリアフリーの改善 【方針】 高齢者、身体障害者等の利用に配慮した環境の提供に努める。 【取り組み】 高齢者、車椅子利用者等への設備の充実を図った。 【実績】 身障者用トイレ 8か所（本館4、平成館2、東洋館1、法隆寺宝物館1） 身障者用エレベータ 7基（本館2、平成館1、東洋館3、法隆寺宝物館1） スロープ 1か所（本館） 車椅子 14台 【自己点検評価】 平成館・法隆寺宝物館は平成11年度に開館した建物で、バリアフリーに関しては「ハートビル法」を適用して建てられているのに対し、本館、東洋館、資料館におけるそれらの設備は後付けで、やや不便をきたしている。また展示についても高齢者・身体障害者等に配慮した導線や展示台の高さなど、さらに改善を図る必要がある。 (1)-2, (1)-3 観覧者、専門家の満足度調査等によるサービスの向上 【方針】 一般観覧者、専門家を対象に満足度調査を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させる他、必要なサービスの向上に努める。 【取り組み】 館内に意見箱を設置し入館者の意見を随時受付けたほか、ホームページ上においても当館あてのメールアドレスを設け意見を受付けた。 また各特別展においてアンケートによる満足度調査を実施した。 【実績】 ホームページ投書に寄せられた「メールによる展示情報配信」という要望に応え、7月より「東京国立博物館 電子メールサービス」を開始した。展示予定のチェックがしやすくなった、来館するのが楽しくなる等多くの好評を得ている。 また、「美術の中のこどもたち」「東京大学史料編纂所史料集発行100周年記念 時を超えて語るもの - 史料と美術の名宝 - 」「横山大観 その心と芸術」「松永耳庵コレクション」におけるアンケートの回答を集計した結果どれも80%以上の観覧者から満足であった旨の回答が得られた。その他、接遇等に関する観覧者からの指摘に対しては適宜対処している。 【自己点検評価】 アンケートやその他の媒体に寄せられる意見は、客件数の多寡もあり集約が課題である。また、これらの分析には客観性が求められ、それに関する技術を習得することにより意見を正確に把握し、観覧者のニーズに沿った改善方策を検討することとする。	A	入館者に対するサービスの向上を図るため高齢者、身体障害者のためのトイレ、エレベータ、スロープ等を設置し、電子メールサービス、音声ガイド、ハイビジョン解説、夜間開館を実施するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 今後も、アンケート結果の分析やモニター制度を検討するなど、的確に入館者のニーズを把握し、きめ細かなサービスを提供することが望ましい。		

(1) - 4展示解説の充実

【方針】

特別展・共催展において、音声ガイド、ハイビジョンによる解説を実施する。

【取り組み】

特別展において音声ガイドを制作した。またハイビジョンは「国宝醍醐寺展 山からおりた本尊」、「天神さまの美術」において実施した。

【実績】

音声ガイドを作成し、8.4人に1人の割合で使用され、特に「美術の中の子どもたち」展においては子供向けの音声ガイドも作成し好評を得た。

【自己点検評価】

音声ガイド・ハイビジョン解説は観覧に役立つとの好評を多く得ている。音声ガイドに関しては料金が低い、使用しない観覧者の妨げとなる等の意見も見られる。今後もより利用者の意見を踏まえて検討していく必要がある。

(2)夜間開館の実施等のサービス

【方針】

4月～9月の共催展・特別展の開催期間中の金曜日は20時まで開館する。

【取り組み】

20時まで開館するために職員、ボランティア、レストラン・ミュージアムショップ、外部委託業者との連携を密し実施した。

【実績】

会期中該当する金曜日は、14日あり、通常閉館時以降の入館者は8,265人であった。

【自己点検評価】

今後17時以降の入館者の増を図るために積極的な広報活動を行う必要がある。

(3)ミュージアムショップ等施設におけるサービス向上

【方針】

友の会会員を積極的に募集し、ミュージアムショップでの出版物、グッズの割引を行うことにより利用者サービスを図る。

【取り組み】

13年度申込期間を限定せず、随時受け入れる体制を整え会員数の増加を図った。

【実績】

友の会入会時にミュージアムショップの割引利用等の特典も記載された案内を手渡しているが、友の会会員数7,719人に対してミュージアムショップの利用率は17%であった。

【自己点検評価】

利用率向上を図るため会員への告知の徹底及び協力団体への魅力的な商品開発への提言を行う。

項目別評価（京都国立博物館）

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評定	
		A	B	C		段階的評定	定性的評定
<p>1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。</p> <p>(1) 各博物館の共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>(2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進</p> <p>(3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進</p> <p>(4) 外部委託の推進</p> <p>(5) 事務のO A化の推進</p>	<p>効率化の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>〔方針〕</p> <p>独立行政法人国立博物館としての業務運営は、法令及び業務方法書の定めにより、適正かつ確実な運営を実施し、貴重な国民的財産である有形文化財の保存及び活用を図ることが基本方針である。</p> <p>この基本方針の下に、京都国立博物館が果たすべき役割を十分に認識し、業務運営に当たることとした。事業の企画立案から実施に当たっては、独立行政法人化を踏まえ、収蔵品の安全性の確保を考慮しつつ、博物館活動の理解促進、広報活動の充実、自己収入の確保を図りながら、かつ業務の効率化を行うこととして、通常業務経費の1%効率化を目標に業務運営に取り組んだ。</p> <p>(1)</p> <p>〔取り組み〕</p> <p>共通的な事務の一元化による業務の効率化については、従前の各館で実施していた法人共通の業務を法人本部に一元化するとともに、自館内では展示、教育普及、文化財保存、情報の各分野を整備・充実するため、組織及び人員配置の見直しを実施した。</p> <p>〔実績〕</p> <p>法人共通の業務については、共済組合事務・予算要求事務・資金運用契約事務・損害保険契約事務等を一元化した。また、自館では学芸課に企画室及び文化財管理官を新設するとともに、従来の普及室を教育広報室に改編した。また、京都文化資料研究センターには情報分野の専門知識者1名（一般職）を新規に配置した。</p> <p>(2)</p> <p>〔取り組み〕</p> <p>省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進については、光熱水費の節約、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進を図ることとして管理部門を中心とした基幹的維持経費の削減に努め、1%以上の効率化を図った。</p> <p>〔実績〕</p> <p>光熱水費の対前年度比：電気経費98%、ガス経費81%、水道経費92% 廃棄物量の対前年度比：一般廃棄物94%、産業廃棄物86% リサイクル：ゴミの分別収集、コピー用紙・トナーカートリッジ・トイレトペーパー等の再生紙使用 ペーパーレス化：ミスコピー用紙の裏面使用、スケジュール管理や館内通知・連絡の情報化</p> <p>(3)</p> <p>〔取り組み〕</p> <p>施設の有効利用の推進については、展覧事業に関連した講座や解説での利用や外部の研修会等へ積極的に貸し付けし、有効な活用を図った。</p> <p>〔実績〕</p> <p>土曜講座：47回(延べ4,601人参加) 夏期講座：3日間(延べ99人参加) 外部研修会等：9回(延べ365人参加)</p> <p>(4)</p> <p>〔取り組み〕</p> <p>外部委託の推進については、文化財の保存並びに公開施設としての安全性の確保を考慮したうえで、職員が日常遂行している業務での人員及び仕様を見直し、外部委託への切り替えを検討のうえ、可能なものから実施した。また、館全職員によるクリーン作戦を実施し、職員の環境への意識改革を図るとともに、委託業務経費の節減に努めた。</p> <p>〔実績〕</p> <p>庭園整備業務：一部を外部委託実施(非常勤職員退職者2名相当範囲) 職員によるクリーン作戦：1回実施(次年度以降は回数を増やす方針)</p> <p>(5)</p> <p>〔取り組み〕</p> <p>事務のO A化の推進については、情報設備を活用した事務処理体制を構築し、業務の省力化・迅速化・効率化を図った。</p>	<p>B</p>	<p>業務運営の効率化を図るため共済組合事務、損害保険契約事務などの事務の一元化、ガス等の節約、リサイクル、O A化の推進、館職員による清掃及び一般競争入札の導入等を実施し、法人全体の運営費交付金の1.03%の効率化に積極的に貢献するなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>しかし、まだ改善可能な点があると思われるので、博物館本来の業務に支障のない程度に一般競争入札や外部委託を実施するなど、引き続き積極的に取り組む必要がある</p>		

(6) 積極的な一般競争入札を導入

2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

〔実績〕
スケジュール管理の情報化：日常業務のうち、行事予定・通知・連絡等の事務を汎用のソフトにより情報化した。
ファームバンキングの導入：日常の収入・支出金の経理方法に預金先銀行との情報オンラインを導入し、経理事務を省力化・迅速化・効率化するとともに、安全性の向上を図った。

(6) 〔取り組み〕
積極的な一般競争入札の導入については、広く競争への参加の機会を与えるとともに、経費の節減を図るため、従前の単独契約の仕様等を見直し、可能な限り一般競争契約の導入を推進した。

〔実績〕
清掃請負：一般競争入札を導入(契約価格は、前年度随意契約価格から535千円安価となった。)
少額物件調達：消耗品等の少額物件の調達においても、複数の業者から見積書を徴収し、競争原理を働かせるよう工夫し、経費節減に努めた。

〔自己点検評価〕
法人組織として共通の業務を一元化できたことは、事務の効率化及び人的資源の有効利用等が図られた。
また自館では、組織、人員配置を見直し独法国立博物館として活動を行う上での体制を整える一方、省エネ等の推進による基幹的維持経費の削減、施設の有効利用、外部委託、事務のOA化等を推進し、業務の1%効率化目標を十分達成できた。

〔方針〕
独立行政法人国立博物館は、国民のニーズを的確に捉えた事業を遂行することが必要なことから、事業運営には、外部有識者の意見聴取や館内での十分な意見交換を実施し、これら意見を適切に反映させることとした。また、独立行政法人組織としての職員の資質の向上を図るための各種研修等を積極的に実施することとした。

〔取り組み〕
外部有識者による評議員会を設け、意見の聴取を行うとともに館内運営会議を毎月2回開催し、活発な意見交換を行った。評議員から独法化後の博物館運営には、採算性のみに走らず国立博物館の本来の使命(文化財の収集・保管・展示と調査研究)を遂行しながら独法国立博物館として、事業の質の向上、サービスの向上等に取り組むことが必要であるとの意見が出された。また、館内運営会議では、アンケート等による入館者のニーズを随時に報告し、改善等の対応に意見を出し合い検討した。
この評議員並びに館内運営会議からの意見を積極的に業務へ反映すべく以下の事柄について改善等を実施した。

〔実績〕
柔軟な運営：入館状況に応じた開閉時間の変更を実施した。(開館時間を早め又は閉館時間を延長した。)
また、地元地域の各種団体等が行う事業に参画、協力し、開かれた博物館として事業運営に努めた。(京都着物協会のイベントと連携した観覧チケットの発売等)

展示案内：従来の館だより(日本語・英語年4回発行)、博物館ディクショナリー(小中学生向け 日本語 年4回発行)に加え、展示案内(日本語・英語)を新規作成、発行し、事業への理解促進とサービスの向上を図った。
次年度には、年間の催事案内を作成し、更なる充実を図る計画である。

広報活動：ポスター・チラシについて、従来の特別展のみ作成から特別展観、特別陳列についても作成し、広報場所についても、近畿圏内の交通機関の主要駅、市内ホテル、観光案内所、百貨店、タクシー等に新たな掲出場所を確保し、広報の拡大充実を努めた。

施設の整備：高齢者、身体障害者等に配慮し、バリアフリーの改善を実施した。(駐車場、トイレ、スロープ等)

〔自己点検評価〕
外部有識者や館内職員の意見を十分に踏まえ、開閉時間の変更、展示案内の充実、広報活動の拡大及び施設の整備等が実施でき、開かれた博物館として入館者側に立った事業運営の改善が推進できたと考える。

効率化の達成率	1.5%以上	1.0%以上 1.5%未満	1.0%未満	独立行政法人国立博物館全体の効率化実績 運営費交付金予算額 4,570,843,000円 効率化した額 47,501,889円 効率化 1.03%	B
---------	--------	------------------	--------	--	---

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評定	
		A	B	C		段階的評定	定性的評定
<p>1 収集・保管</p> <p>(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。</p> <p>(東京国立博物館) 日本を中心に広く東洋諸地域にわたる美術及び考古資料等を収集する。</p> <p>(京都国立博物館) 京都文化を中心とした美術及び考古資料等を収集する。</p> <p>(奈良国立博物館) 仏教美術を中心とした名品を収集する。</p> <p>(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている分野を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。</p>	<p>文化財の収集（購入・寄贈・寄託）の状況</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>				<p>〔方針〕</p> <p>収集については、京都文化に関する美術、考古資料の収集を基本方針としたうえで、収集計画を策定し、購入候補物件を館内鑑査会の議を経て外部有識者の意見(買取協議会)を聴取のうえ、計画的に購入することとした。今年度は、収蔵品の中で資料数の少ない分野を充実することとして、室町時代の水墨画、収蔵品にない桃山時代の京都の風俗が描いた洛中洛外図をはじめとする近世障屏画、さらに能面等の仮面、友禅、桃山陶磁、館蔵品の坂本龍馬資料と関連する幕末関係資料を重点的に購入することとした。</p> <p>〔取り組み〕</p> <p>収集計画に則し、研究等の調査に基づいた購入候補物件を館内鑑査会の議を経て外部有識者の意見(買取協議会)を聴取のうえ計画的な購入に努めた。</p> <p>〔実績〕</p> <p>館内鑑査会：3回開催 外部有識者の意見(買取協議会)：2回開催 収集数：34件購入</p> <p>〔自己点検評価〕</p> <p>購入品の中でも、特に室町水墨画として狩野元信筆「真山水図」、近世障壁画として「洛中洛外図屏風」など、京都所在の博物館として、ともに欠かすことができない絵画の優品が購入でき、このほか絵画、古文書、仏具、陶磁器等を加えた多岐にわたる文化財の収集ができた。特に洛中洛外図は、かつて当館敷地内で実施した発掘調査によって遺跡の現存が確認された、桃山時代の方広寺(大仏殿)南大門へ通じる古道を描いた希少な絵画資料であり、これを当館の収蔵品として加えたことは、単に近世障屏画の収集という以上の意義深いことである。</p> <p>〔参照〕</p> <p>事業実績統計表1頁、28頁～39頁</p> <p>〔方針〕</p> <p>寄贈・寄託においては、収蔵品の不足している分野、資料の補完を図ることとして、日常的な調査研究活動を通して、寄贈・寄託可能な作品を選定し、館内鑑査会の議を経て、積極的な寄贈・寄託を働きかけ、収蔵品の充実に努めることとした。</p> <p>〔取り組み〕</p> <p>日常的な調査及び研究活動を通して、新たに知られるようになった作品や寄贈・寄託可能な作品について、所蔵者に寄贈・寄託公開の効用を説明するなど積極的に働きかけ、収蔵作品の充実に努めた。</p> <p>〔実績〕</p> <p>寄贈・寄託のための鑑査会：11回開催 寄贈・寄託件数：寄贈 6件 今年度は、従来から寄託を受けていた所蔵者の好意により褐釉銚子一個の寄贈を得た。また当館恒例の「人形」特別陳列を縁に御所人形、加茂人形の寄贈を受けるなど、全体で6件の寄贈を得ることができた。 寄託 88件 特に寄託品には、重要文化財9件、重要美術品1件を含む充実した内容となった。 寄託総件数：6,135件(目標6,000件を上回った。)</p> <p>〔自己点検評価〕</p> <p>今年度収集できた文化財(購入・寄贈・寄託)は、いずれも京都文化に関する資料として評価の高いものであり、初期の目標は達成できたものと考えている。また、これら今年度の収集文化財は来年度に新収品展として公衆に展覧するとともに、調査研究を続け、その結果等を随時に発表することにより研究者又は関係研究機関への学術的な貢献を果たすべく努めたいと考えている。</p> <p>〔参照〕</p> <p>事業実績統計表45頁・47頁</p>	<p>A</p> <p>京都国立博物館の収集方針に基づき、狩野元信筆「真山水図」など質の高い文化財を34件購入し、新たに寄贈6件、重要文化財9件及び重要美術品1件を含む寄託88件を受入れるなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。京都という地の利を生かし、寄贈・寄託の受入れをより一層推進することが望ましい。 寄附・寄贈は有効な収集方法の1つであるため文化庁と連携協力し税制問題を含めたその推進方を検討することが望ましい。 京都国立博物館の収集件数の約50%を占める寄託品は、長年の実績により培われた寄託者等との信頼関係の賜物であり、引き続き良好な関係を保つよう努力することが望ましい。 文化財の散逸や海外流出について、文化庁、国立美術館等との連携を図り情報収集など迅速に対応することが望ましい。</p>	
		寄託件数	6,000件以上	4,200件以上 6,000件未満			4,200件未満

<p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く後世へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。</p> <p>(2)-2 収蔵品の保存カルテ作成、保存環境の調査等を実施し、収蔵品の保存環境の向上を図る。</p>	<p>保管の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>〔方 針〕</p> <p>収蔵品の保存体制では、現状の展示・収蔵施設の老朽化への対応として、新たな施設「百年記念館」(仮称)の建設設計を推進する。今年度には、建設設計の第1段として建設期間中(5～6年)の収蔵品の収蔵庫(2,018㎡)を完成させる。</p> <p>また、日常の保存管理においては、新たに設置した文化財管理官を中心に適正な温湿度管理を行うとともに、各分野の作品の性質に応じた陳列期間を設定したうえで定期的な陳列替えを行い、作品の保存管理に努めることとした。</p> <p>〔取り組み〕</p> <p>計画的な整備を進めることとして13年度末までに収蔵庫を完成させた。</p> <p>また、既存収蔵庫では適正な保管管理を行うため、文化財管理官の指揮のもと適正な温湿度の維持、定期的な陳列替を実施した。</p> <p>〔実績〕</p> <p>新収蔵庫の完成：新収蔵庫が14年3月末に完成した。</p> <p>この新収蔵庫は屋外環境条件に影響を受けないよう外壁、内壁に断熱材を十分に用い、また空調は各室の収蔵品ごとに適切な温湿度を保てる設備とし、最適の環境下で文化財を管理、保存できる体制が整った。</p> <p>既存収蔵庫の保存環境：温度22(±2)、相対湿度60%を維持して保存した。</p> <p>陳列替え数：63回実施し、光による褐色等の劣化の防止に努めた。</p> <p>〔自己点検評価〕</p> <p>長期の計画となる「百年記念館」建設期間中の仮設収蔵庫を完成できたことは、その近代設備化も含め、収蔵品の管理・保存体制を万全のものとする事ができた。</p> <p>また、仮収蔵庫への移転が完了するまでの既存収蔵庫での保存・管理においても、新たに設置した文化財管理官の指揮により、適正な温湿度の維持に努めるとともに、63回の陳列替を実施したことは、作品の保護に配慮しながら、より多くの文化財を公衆に観覧するという国立博物館の使命を果たせたと評価できる。</p> <p>(2)-2 保存カルテの作成は、東京国立博物館と奈良国立博物館の年度計画であり、両館で実施した。</p>	<p>A</p>	<p>収蔵品の保存及び管理環境の維持充実を図るため文化財の種類、保管場所等の違いにより、温湿度や照明等を適正に管理し、また、百年記念館(仮称)の建設の関連事業として、新たに東収蔵庫を建設するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。今後も、年間を通して、適正な温湿度の管理をすることが望ましい。</p> <p>また、保存カルテを作成するとともに、長期的に保存環境を整備することが望ましい。</p> <p>なお、新館取壊し前に行う収蔵品の移転にあわせて、文化財の保存場所、取扱い等を再検討することが望ましい。</p>
<p>(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。</p> <p>緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。</p> <p>長期寄託品等の修理を実施する。</p> <p>伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。</p> <p>文化財修理・保存処理関係のデータベース化とその公開を実施。</p> <p>(3)-2 国内外の博物館等の修理、保存処理の充実に寄与する。</p>	<p>修理の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>〔方 針〕</p> <p>収蔵品の修理では、修理を要するものについて、展示の充実や有効利用を図る観点から計画的な修理計画を策定し、緊急度の高いものから、鑑査会での議を経て、順次修理を実施することとした。</p> <p>〔取り組み〕</p> <p>修理を要する文化財を抽出し、緊急度の高いものから見積書を徴収し、鑑査会での検討・議決を経て、予算の範囲内で修理を実行した。</p> <p>今年度は、昨年度に寄贈を受けた損傷の甚だしい文化財1件を修理計画に優先的に加え修理することとした。</p> <p>〔実績〕</p> <p>修理件数：12件(目標の8件を上回り実施できた。)</p> <p>修理技術者教育：染織品の修理においては、材料選定へ指導、綿密な調査を行い修理方法への助言、修理内容についての報告書作成への指導等、修理技術者の育成に尽力できた。</p> <p>修理後の活用：次年度常設展にて公開及び他館への貸し出し等、積極的な活用を図る。</p> <p>〔自己点検評価〕</p> <p>今年度の修理のうち、特に染織においては、修理に用いる製地や染織技法を作品制作当時のものに合わせるための技術選定について指導し、また、脆弱となった部分の補強の縫の位置や密度について、綿密な調査に基づいた助言を行うなど、精緻な修理が実施でき、報告書も整ったことと同時にこれらが技術者の育成に繋がったことが評価できる。</p> <p>〔参 照〕</p> <p>事業実績統計表51頁、77頁～80頁</p> <p>〔方 針〕</p> <p>文化財保存修理に係る資料の保存活用のために、資料のデータベース化を推進することとし、今年度のデータベース化目標を200件に設定する。</p> <p>〔取り組み〕</p> <p>入力システムの一斉(効率的な入力を行うためハードの更新とソフトの改良)を図り効率的な作業ができるよう環境を整え、より多くのデータベース化に努めた。</p> <p>〔実績〕</p> <p>入力件数：266件(新規分166件、遡及分100件)</p> <p>〔自己点検評価〕</p> <p>入力件数は新システムによる遡及入力分100件を実施したため新規分としては166件と目標200件を下回る事となったが、活用を図るうえでの資料のデータベース化としての入力は266件が実施でき、目標を上回る事ができたと考えられる。</p> <p>入力データについては、今後公開のためのガイドラインを策定し、情報として公開を検討するとともに、一部の情報については、「文化財修理報告書」に収め、広く資料の提供に努めることとする。</p> <p>〔参 照〕</p> <p>事業実績統計表83頁</p> <p>〔方 針〕</p> <p>国内外の博物館等の修理、保存処理の充実への寄与では、館内の文化財修理所の施設及び設備の整備を図り、修理作業がより安全な環境で行える体制を構築し、修理・保存依頼に応えることとした。</p>	<p>A</p>	<p>傷みの著しい染織などの収蔵品12件を修理業者を指導しながら修理し、修理報告書を作成するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>特に、修理報告書を作成しデータベース化することは、文化財を再修理する際の貴重な記録となるため、今後も積極的に取り組み、その公開についても検討することが望ましい。</p> <p>また、多くの文化財が修理を必要とする中で、中・長期的な修理計画を立てることが望ましい。</p>

				<p>〔取り組み〕 館内の文化財保存修理所の屋上防水及び窓枠の取り替えを実施し施設の整備を図るとともに、環境モニターを増設し、管理設備の改善を図った。これら施設及び設備の整備・改善のもと、指定文化財等を受け入れ修理等を実施した。</p> <p>〔実績〕 文化財修理件数：国内161件（5,047点） 国外5件（5点）</p> <p>〔自己点検評価〕 国内のみならず、国外の博物館等の修理を実施できたこと、また、文化財修理所の施設の整備等を実施し、安全な環境での修理・保存依頼に応じられる体制を構築できたことは評価できる。</p>		
<p>2 公衆への観覧</p> <p>(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ各館において魅力ある質の高い常設展・特別展等を実施する。</p> <p>(1)-2 常設展においては、東京・京都・奈良の国立博物館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本の文化や歴史の理解の促進に寄与する展示を実施する。</p> <p>(1)-3 特別展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 なお、実施にあたっては、国内外の博物館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。 （東京国立博物館） 年3～5回程度 （京都国立博物館） 年2～3回程度 （奈良国立博物館） 年2～3回程度</p>	<p>展覧会の状況</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>			<p>公衆への観覧事業においては、国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、かつ京都国立博物館としての特色を十分に発揮した、魅力ある質の高い展示を念頭に展示事業を展開することとし、学芸研究員の不断の調査研究の成果を十分に発揮した展示活動により、日本文化や歴史の理解の促進に寄与できるよう、館内での展示活動以外にも国内外の博物館・美術館等と積極的に交流事業を実施することとする。</p> <p>特別展では、継続的に実施している文化財調査や日常的な研究成果の蓄積を基に国内外の博物館、美術館等と連携協力を図りながら学術的な水準の高い、時宜に応じた魅力的な展覧事業を推進することとし、新聞社との共催展を2展、当館独自の展覧会を1展、海外との交流展を2展、地方公立博物館等と共催での巡回展を1展の計6展を下記のとおり実施した。</p> <p>当館内で実施した新聞社との共催展及び館独自の展覧会では、トータル20万人を越す入館者を得ることができ、これは目標とした14万人を大きく上回る実績を上げることができ、国民のニーズを的確に捉えた展示企画ができたこと、更には学術水準の向上、地方での文化財の観覧機会の提供、国際文化交流の推進等に貢献できたものと考え。</p> <p>〔参照〕事業実績統計表98頁、99頁</p>	<p>B</p> <p>A</p>	<p>広く国民に優れた文化財・美術作品を鑑賞する機会を提供するため、国民の関心に応えたものや学術的意義の高いものなどバランスに配慮しながら、常設展、特別展・共催展3回、海外交流展2回、地方巡回展2回を開催し、目標入館者数以上の実績を上げるなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>入館者に対するアンケート調査の結果では、概ね8割の肯定的な回答を得ており、展覧会に対する満足度は非常に高かった。</p> <p>なお、広報活動については、さらに充実を図ることが望ましい。</p> <p>海外交流展については、中期的な展望のもと企画・実施することが望ましい。</p>
<p>(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。</p> <p>(1)-5 海外交流展については、海外の博物館等と連携を図りながら、国内外の優れた文化財を広く国民に観覧する機会を提供するとともに、日本の文化を海外に紹介し、日本への理解の増進に資する展覧会を実施する。（年1回程度）</p> <p>(1)-6 各館の連携による共同企画展等の実施について検討し推進する。</p> <p>(1)-7 収蔵品の効果的活用、地方における観覧機会の充実を図る観点から、全国の公立博物館等と共催で、地方巡回展を実施する。（年1～2か所程度） なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。</p> <p>(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。</p>	<p>常設展</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>			<p>〔方針〕 常設展示では、日常的な調査研究に基づき、日本、東洋の美術、歴史の理解に寄与する質の高い展示を目指すこととし、展示企画に当たっては、作品の保護を考慮した定期的な陳列替えと時期に応じた季節感の表出や特定のテーマによる展示（特別展観や特別陳列）により変化のある展示、又は観覧者からのニーズを意識した展示を心掛けることとした。</p> <p>〔取り組み〕 常設展示においては、63回の陳列替を実施し、作品の保護を考慮しながら、可能な限り数多くの文化財の公衆への観覧を図った。また、調査研究の成果を公表する機会として、陳列に努め特別展観を1展、特別陳列を6展実施した。</p> <p>〔実績〕 陳列替を63回実施のうえ、総陳列件数は2,144件となった。</p> <p>〔参照〕 事業実績統計表97頁</p> <p>〔自己点検評価〕 全般的に、季節感の表出、特定のテーマによる展示及び作品ごとの解説に入館者から好評を得るとともに、最新の研究成果を基にした数多くの陳列に対しては、学術的な側面から研究者又は研究機関からの評価を得た。</p> <p>今年度の常設展示には、年間14万人の入館者を得た。この入館者数は、目標の16万人を下回ることとなったが、これは特別展の開催日数を増やしたことに影響を受けたものであり、特別展チケットでの常設展示場入館者（特別展入館者の40%）を考慮すれば実質的には目標数以上の入館者数を得たと考える。また、展示の企画内容では、当初の方針どおり作品の保護を考慮しながら、可能な限りより多くの文化財の展覧機会を提供し、その中で特定のテーマでの企画展を数多く行い、国民のニーズや学術研究の分野の期待に応えることができたことと考える。</p> <p>特定のテーマによる展示（企画展）として、特別展観及び特別陳列を延べ7回実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新たに収集した文化財を公開する特別陳列として、「新収品展」及び「新収品展」の2展を実施。 <p>〔自己点検評価〕 新たに12年度収集した文化財525件を公開したものであるが、この新収品展、 によって研究者や市民の調査研究や国内外の博物館・美術館での公開等、有効な活用の契機となったと考える。特に新収品展においては、須磨末千秋氏より寄贈（一部購入）を受けた文化財を須磨コレクションとして公開したものであり、我が国における中国近代美術の最大のコレクションを、京都文化の近代的展開や国際的広がりを示す資料として公開できたことに、中国博物館関係者から賞賛を得た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎年継続し京都国立博物館の企画展の顔として定着している特別陳列として、「坂本龍馬」、「獅子・狛犬」及び「雛まつりとお人形」の3展を実施。 	<p>A</p>	<p>京都国立博物館では、新館において年間を通して63回の陳列替えをし、2,144件の文化財を公開した。また、「坂本龍馬」等の特別陳列を開催するなど目標入館者数に届かなかったが、魅力ある常設展とするため積極的に取り組んだ。</p>

				<p>〔自己点検評価〕 この継続の特別陳列は、いずれにおいても、毎年異なる視点から展示を行う等、観覧者に興味を持たせるよう陳列の工夫に努めている。これにより近年ではリピーターを呼ぶまでに定着し、好評を得ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特定の分野を題材にした特別陳列として、「奈良朝写経」を実施。 <p>〔自己点検評価〕 国宝4件、重文15件、重美4件を含めた30件の陳列内容で、非常に密度の濃い企画展となり、観覧者には目録を兼ねたリーフレットの配布、会期中の土曜講座での解説等を行った。これによって、一般の観覧者に加えて書跡及び仏教史関係の研究者からも高い評価を得た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化財総合調査の成果を基にした特別展として、「智積院の名宝」を実施。 <p>〔自己点検評価〕 当館に隣接している「智積院」の文化財総合調査（昭和63年実施）の成果を踏まえ同院所蔵の文化財を展示した。陳列品には、国宝の障壁画や当館の指導で保存修理が完成した文化財、新出の文化財を加え、同院の全体像を明確に提示できた意義の深い企画展が実施できた。</p>		
	入館者数	160,000人以上	112,000人以上 160,000人未満	112,000人未満	140,001人	B
ヒューマン・イメージ	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>「ヒューマン・イメージ展」(館独自展)</p> <p>〔方針〕 10月23日～11月25日 かつて実施した特別展覧会「花鳥」「山水」に引き続き、日本の美術において重要な主題である「人」を採り上げ、単なる人のかたちだけでなく、その精神性にも注目して、人間存在のあり方を総合的に照射する。 目標入館者 3万人</p> <p>〔取り組み〕 10のテーマを設定し、全体として三部に構成する。前半に人生の光の部分に関わる「人のきずな」「恋と愛」「なりわい」「遊び」「祝祭の時」を、ついで陰の部分に関わる「旅・隠逸」「夢」「異貌に込めたもの」「あらぶる心」をそして最後に光と陰を統合する「調和へ」を構成した。展示品の選定に当たっては、外国の美術館に所蔵される文化財も加えた。広報に関して、朝日新聞社の協力を得た。また、館独自の展覧会として初めて前売り券を導入し利用者のサービスに努めた。</p> <p>〔実績〕 入館者数：27,210人(目標入館者数：3万人) 陳列件数：123件(うち指定品58件)</p> <p>〔自己点検評価〕 日本の美術において重要な主題である「人」を採り上げ、単なる人のかたちだけでなく、その精神性にも注目して、人間存在の在り方を総合的に照射するという斬新な企画で実施し、展示品には外国美術館所蔵の文化財も加え、指定品58件を含む123件で構成した。観覧者からは、名品の多さ、テーマの斬新さ、ユニークな解説等から個性的な展覧会として評価を得た。この展覧会は、斬新な展覧会名や美術を一つのテーマで総合的に見つめるという視点からの企画を実現したものであり、今後の展覧会のあり方について、違った一つの道筋を教示できたことに大きな意義があったと考える。また、館独自の展覧会として初めて前売り券を導入し利用者から好評を得た。</p>			B	<p>「人」をテーマにしたことは興味深いですが、タイトルを「ヒューマン・イメージ」にしたことは、かえって観覧者を混乱させてしまったように思われる。</p> <p>また、美術史における今日的な問題を取り上げたことは評価するが、諸外国における同種の企画がもつ鋭い問題提起も必要だったかもしれない</p>
	入館者数	30,000人以上	21,000人以上 30,000人未満	21,000人未満	27,210人	B
北野天満宮神宝展	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>「北野天満宮神宝展」(京都新聞社との共催展)</p> <p>〔方針〕 4月10日～5月13日 本年が祭神菅原道真の1100年祭に当たるのを記念し、当館が平成9年度に実施した北野天満宮所蔵文化財の総合調査の成果をふまえ、同社の神宝を総合的に紹介する。 目標入館者 5万人</p> <p>〔取り組み〕 北野天満宮所蔵の文化財を中心に、一部他からの借用品を加え、全132件の文化財で展示を構成。「道真公ゆかりの品々」「天神画像の諸相」「天神縁起の世界」「奉納の品々」という小テーマを設定し、わかりやすい展示とし、神殿内部の復元的しつらいを設けて、神鏡がどのように用いられたかを具体的、視覚的に示した。</p> <p>〔実績〕 入館者数：31,273人(目標入館者数：5万人) 陳列件数：132件(うち指定品17件)</p> <p>〔自己点検評価〕 当館が平成9年度に実施した北野天満宮所蔵文化財総合調査の成果を踏まえ、同社の神宝を総合的に観覧した。展示品は、指定品17件を含む132件に上り、展示は4のテーマに区分し分かりやすい展示に心掛けた。ただ、入館者数においては、京都にある神社であったためか、目標入館者数にとどかなかったが、入館者からは、展示方法、解説などの企画・展示内容について満足しているとの評価を得た。</p>			B	<p>目標入館者数には届かなかったが、京都文化を中心とした京都国立博物館ならではの展覧会として、その企画の趣旨や内容など意味のあるものであった。</p> <p>また、広報については、広範囲に積極的に行う必要がある。</p>

	入館者数	50,000人以上	35,000人以上 50,000人未満	35,000人未満	31,273人	C	
雪舟	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	「雪舟展」(毎日新聞社との共催展) 〔方針〕 3月12日～31日(～4月7日) 日本を代表する画家として広く知られる雪舟を、没後500年を機にその作品を網羅的に収集してあらためて見直す。 目標入館者 6万人 〔取り組み〕 国内外に所蔵される雪舟の代表作はもちろん、雪舟の生まれてくる状況を示すために、雪舟の師やライバルの作品、また雪舟の影響を示すために弟子の作品を加え、流れを意識した展示構成を創出した。 〔実績〕 入館者数：142,427人(目標入館者数：6万人) 陳列件数：152件(うち指定品37件) 〔自己点検評価〕 日本を代表する画家として知られる雪舟の作品を半世紀ぶりに大々的に紹介するとともに、雪舟の代表作のみに捕らわれず、雪舟の師やライバルの作品、また、雪舟の影響を示すために弟子の作品を加え、より深く雪舟を理解できる展示構成とした。 展覧会の評価は、入館者数が示すとおり非常に高いものであったが、これは単に知名度だけによるものでなく、陳列品は、指定品37件を含む152件という密度の濃い陳列であったこと、並びに前述のように展示構成を工夫したことにも評価を得たものと考え。一方、1日1万人を超える入館者に対しては、開館時間を早め(最大45分)、閉館時間を延長する(最大2時間)等の柔軟な対応を図り、最大限のサービスに努めたが、なお会場内の混雑や入場制限での待ち時間の解消までには至らなかった。この点では、運営面での大きな課題として、今後の展覧事業への貴重な教訓を得ることができた。			A	国民のニーズを捉え、なおかつ学術的にも意義のある企画・内容であり、大変充実した展覧会であった。また、入館者数については、約14万人の実績を上げた。 しかし、当展覧会では、入場制限や柔軟な開館時間の設定を行ったが、展示場に入場者が多すぎて鑑賞しにくい状況が一時みられた。今後とも、展覧会場の広さに応じた入場者数とするため、柔軟な開館時間の設定等の工夫を検討し、より良い観覧環境を確保するよう一層努力することが望ましい。	
	入館者数	60,000人以上	42,000人以上 60,000人未満	42,000人未満	142,427人	A	
海外交流展 「長谷川等伯展」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	「長谷川等伯展」(海外展)(リートベルグ美術館・東京国立博物館・国際交流基金との共催) 〔方針〕 6月17日～7月29日 スイス連邦チューリヒ市のリートベルグ美術館と連携し、同館に於いて桃山時代の巨匠長谷川等伯の主要作品を紹介する。 〔取り組み〕 日本が初めてヨーロッパと交流をもった桃山時代の美術について、彼地では関心が高いが、そのなかでこれまで全体的に紹介される機会のなかった長谷川等伯について、その代表作である「松林図」をはじめとする作品によって、画業を体系的に紹介することによって、桃山美術の多面性を理解できるように努めるとともに、東洋美術への関心を高めることを図った。 〔実績〕 会場：スイス・リートベルグ美術館 入館者数：30,812人 陳列件数：31件(うち指定品18件) 〔自己点検評価〕 日本文化を含めた東洋美術に対する理解を深めることを目的に、スイス共和国国立美術館チューリッヒ市のリートベルグ美術館と連携し、同館に於いて日本が初めてヨーロッパと交流をもった桃山時代美術について巨匠長谷川等伯の主要作品を紹介した。1万人以上の入館者を得て、広くスイス国での日本文化に対する関心の高まりに貢献できた。			A	日本の優れた文化財を海外へ紹介するものであった。今後とも継続して取り組むことが望ましい。 また、国立博物館が海外交流展を実施していることは日本国内においてあまり知られていないため、積極的に公表することが望ましい。	
「ブラハからの美のたより展」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	「ブラハからの美のたより展」(海外交流展) 〔方針〕 1月12日～2月17日 チェコ共和国国立美術館・ナールステク博物館ほかと提携し、当館を会場として、同館に所蔵される日本美術のうち、浮世絵を中心とする近世絵画と陶磁器に絞って紹介する。 〔取り組み〕 現地における作品調査の成果を踏まえ、国立美術館の絵画、版画とナールステク博物館の陶磁器のコレクションによって、19～20世紀におけるチェコでの日本文化への関心のあり方を示すように配慮した。 〔実績〕 入館者数：19,546人			A	海外の優れた美術品を日本に紹介するものであった。今後とも継続して取り組むことが望ましい。 また、国立博物館が海外交流展を実施していることは日本国内においてあまり知られていないため、積極的に公表することが望ましい。	

			<p>陳列件数：144件（うち指定品0件） 〔自己点検評価〕 海外での日本文化への関心のあり方を示すとともに、海外に流出した優れた日本の文化財を広く我が国の国民に観覧する機会を提供することを目的に、チェコ共和国国立美術館・ナールステク博物館等と連携し、今年度は、当館でチェコの両館に所蔵されている日本美術のうち、浮世絵を中心とする近代絵画と陶磁器を「里帰りの日本美術」として紹介した。1万9千人の入館者があり、日本美術が収集された時代の日本趣味（ジャポニズム）のことや、文化財の海外流出の問題を考える機会となった等の意見が得られた。なお、次年度はこの交流展の一環として、チェコで日本美術を紹介することとして、「京都からの美のたより（仮称）」と題して展覧会を実施する計画であり、日本文化や日本への理解の増進に資することとしている。</p>				
	<p>地方巡回展 「かざりとかたち展」</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>「かざりとかたち展」(地方巡回展)(京都国立近代美術館・鹿児島県歴史資料センター黎明館・沖縄県立博物館との共催) 〔方針〕 収蔵品の効果的活用と地方における観覧機会の提供のため、公私立博物館等と共催で地方巡回展を開催する。 今年度は鹿児島県歴史資料センター黎明館（10月6日～11月4日開催）と沖縄県立博物館（11月13日～12月9日開催）の2館に巡回して展覧することとし、人々の生活を豊かなものにする装飾の諸相 - 空間や身体の飾り、祈りの飾り - を、古代から近代までの美術作品によって紹介する。 〔取り組み〕 基本的には国立博物館、国立美術館の所蔵品によって「かざりの美」「かざりとかたち」のテーマにしたがって展示を構成した。また、会場館との協議によって、会場の特殊性を考慮に入れ、会場館の所蔵品によって「南海のかたち」のテーマを加えて、豊かな構成に努めた。 〔実績〕 入館者数：12,652人 陳列件数：164件（うち指定品19件） 〔自己点検評価〕 国宝・重要文化財を含む名品の鑑賞の機会が少ない地域での開催は、大きな期待をもって受け入れられ、入館者数においても、両館共に通常の平均入館者を上回り、好評であった。また、開催館からの出品・学芸員の参画を得て、共同作業で展示を作り上げた意義は非常に大きかった。</p>	<p>A</p>	<p>公立博物館等と連携協力を図り、地方において優れた美術作品を観覧する機会を提供するものであった。今後も、開催館の要望にできるだけ応え外部研究者と協力して学術的意義のある質の高い展覧会を開催することが望ましい。 また、国立美術館と共催することの意義について、今後、検討する必要がある。</p>		
	<p>地方巡回展の入館者数</p>	<p>11,206人以上</p>	<p>7,844人以上 11,206人未満</p>	<p>7,844人未満</p>	<p>12,652人</p>	<p>A</p>	
<p>(2)-1 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。 (2)-2 国立博物館及び公私立博物館が所蔵する考古資料を相互に貸借し、歴史的・考古学的に体系的・通史的な展覧会を実施する。（年間5件程度）</p>	<p>貸与・特別観覧の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>〔方針〕 収蔵品の活用を図ることについては、展覧会等での展示以外にも保存状況を勘案しながら国内外の博物館・美術館等への貸与及び特別観覧を推進することとした。 〔取り組み〕 国内外の博物館・美術館への貸与では200件を目標に、また特別観覧では500件を目標に設定し、収蔵品の積極的な活用を行った。 〔実績〕 貸与件数 268件（昨年271件） 特別観覧件数 795件（昨年637件） 〔自己点検評価〕 貸与では、指定文化財の件数が貸与件数の約4割（113件）を占めることとなり、公私立博物館・美術館の展示、内容の充実寄与したと考える。また、特別観覧では、観覧件数が昨年より大幅に伸び、特にカラー原版を充実したことは出版物関係への掲載に係るニーズに応える資料の集積が図れつつある結果と評価できる。</p>	<p>A</p>	<p>文化財の効率的活用を図るとともに、他館との相互活用を促進するため、貸与268件、特別観覧795件を行うなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 今後も、貸与等の要望が増えると思われるが、収蔵品の保存状態に留意し、展覧会の趣旨を考慮しながら、幅広くその要望に答えることが望ましい。</p>		
	<p>貸与件数</p>	<p>200件以上</p>	<p>140件以上 200件未満</p>	<p>140件未満</p>	<p>268件</p>	<p>A</p>	
	<p>特別観覧の件数</p>	<p>500件以上</p>	<p>350件以上 500件未満</p>	<p>350件未満</p>	<p>795件</p>	<p>A</p>	
<p>3 調査研究 (1)-1 調査研究が収集・保管・修理・展示、教育普及その他の博物館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる各館の方針に従い、調査研究を積極的に実施する。</p>	<p>調査研究の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(1) 〔方針〕 調査研究が、収集、展示、教育等博物館事業の基本であることを踏まえ、国内外の博物館・美術館及び研究機関と連携を図り、京都文化を中心とした文化財の調査、研究を計画的に実施することを基本方針として、今年度は以下の調査研究を実施した。 〔取り組み〕 来年度開催の特別展覧会「建仁寺」に関する社寺調査を完了し、継続して調査研究している「神と仏の思想的交流と造形」に関する第2年次の調査研究を実施した。また、科学研究費補助金による6件の研究を実施した。 また、これら調査研究には、外部から4名の研究者を招聘し研究交流の促進を図るとともに、調査研究の成果は、シンポジウムの開催又は、刊行物として、広く公開した。 〔実績〕 近畿の社寺を中心に京都文化に関する文化財の調査という計画に基づき、建仁寺及びその塔頭の所蔵文化財を調査した。</p>	<p>A</p>	<p>収集・保管、公衆への観覧、教育普及の事業など博物館活動の推進を図るため、近畿地区社寺を中心とした文化財の総合調査研究、特別展に関する調査研究及び神と仏の思想的交流と造形に関する調査研究等を実施するなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。また、科学研究費補助金の獲得に努め、調査研究の充実を図った。 調査研究については、今後も幅広く外部研究者との交流を促進し、積極的に取り組むことが望ましい。 なお、研究成果については、図録等の刊行物のみならず、学会等においても幅広く積極的に発表することが望ましい。</p>		

(東京国立博物館)

日本の文化財及び日本の文化に影響を与えた東洋諸地域の文化財の調査研究を実施する。

法隆寺献納宝物に関する調査研究を実施する。長期的な修理計画を策定するためのX線、赤外線写真等光学的データのデジタル画像処理システムの開発を行い、将来的に文化財保存カルテ等作成に利用できるデータベースの構築を目指す。

館所蔵模写模本類による原品復元に関する調査研究を行う。

(京都国立博物館)

京都文化を中心にした文化財の調査研究を計画的に実施する。

神と仏の思想的交流と造形に関する調査研究を実施する。

修復文化財に関する調査研究を実施する。

(奈良国立博物館)

南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施する。

仏教美術写真収集及びその調査研究を行う。

(1)-2 国内外の博物館・美術館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。

(2) 調査研究の成果については、展覧会、文化財の収集等の博物館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネット等を活用して広く情報を発信し、博物館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

〔自己点検評価〕

従来知られる文化財のほか、新出資料がみられた。中でも金有聲など朝鮮時代の絵画、柿本人麻呂像などの中世詩画軸、仁阿弥道八の京焼などの新出資料が目目される。また、寺院経済や壇越との関係を示す文書群も今回初めて本格的に調査した。本調査は各分野の担当者が同時に参加することによって、相互に関連する文化財をより正確に学術的に位置づけることを可能にしている点で評価される。

〔実績〕

特別展の出品候補作品の選定と学術的位置づけのための調査として、建仁寺に係る所蔵文化財の調査を実施した。

〔自己点検評価〕

14年度春の特別展覧会「建仁寺」展に対する調査として、学芸員延べ40人が参加し、新たなデータ約300点、写真約400カットを収集でき学術的に大きな成果が上がり、充実した展覧会に反映できると期待される。

〔実績〕

神と仏の思想的交流と造形に関する調査研究を実施した。

〔自己点検評価〕

本調査研究は、仏教美術をテーマとする基本的な研究資料の蒐集と研究会の開催を行うこととして、平成12年度より6ヵ年計画で継続して実施している。今年度は、その第2年目として「院政期の作善と美術」をテーマに研究発表と座談会を実施した。本調査研究の成果として、報告書と図像蒐成「」を刊行した。この刊行物は、研究者や関係研究機関に広く閲覧し、この研究分野の進展に大きく寄与するものと評価される。

〔実績〕

科学研究費の助成による調査研究を実施した。

ア．平安後期の装飾経の調査

〔自己点検評価〕

中尊寺経に関する經典の撮影と実測等を実施し、600カットに及ぶ写真や新出資料の発見等、データの蓄積に大きな成果を上げた。

イ．加茂岩倉遺跡出土品を中心とした同范銅鐸の研究

〔自己点検評価〕

同范銅鐸に関する制作状況の経年的変化や制作技法の解明、総制作数の推定による銅鐸の保有数や分布密度の量的把握が可能となった。

ウ．伝船中湧現観音像の図像および教学的背景に関する研究

〔自己点検評価〕

電光寺所蔵の伝船中湧現観音像について熟覧及び赤外線撮影などの現地調査と、本作品と同じ図像を収載する建仁寺本「図像群」、MOA美術館本「諸尊図像」を調査し、その図像・尊名について分析を加え、教学的背景を明らかにした。

エ．漢字文化圏における古写本の変遷と初期の印刷物に関する調査研究

〔自己点検評価〕

2週間の海外調査を実施し、5世紀から8世紀にかけての敦煌写本の形式字体の変遷をほぼ把握できた。

オ．敦煌写本の書誌に関する調査研究

〔自己点検評価〕

三井文庫において2回の調査を実施し、一紙ごとの法量・界巾・行数などのデータを採録でき、字体の書風の観察を行い、意見交換会も実施した。近々に、この調査研究の報告書を作成するべく準備を進めてところであるが、世界の敦煌学研究者からも待望されている。

カ．年代記載資料を伴う内外伝世品の調査分析を基礎にした近代蒔絵史の研究

〔自己点検評価〕

17世紀から18世紀に海外に伝世した日本製蒔絵と日本国内に伝世する同時期の作品を調査・比較分析するため、ヨーロッパやアメリカでの実見調査を行い、今後の研究展開のための資料の収集ができた。

(1)-2

〔実績〕

他の博物館・美術館職員との研究交流を積極的に推進した。

絵画・彫刻・染織及び情報の各専門分野における研究交流を行うこととして、国内外の博物館・美術館・大学等から4名の研究者を招聘し、展示の企画・実施、調査研究活動を協同して行った。

〔自己点検評価〕

ア．展示関係：特別展「ヒューマン・イメージ」において、絵画、彫刻の分野で作品の選定や展示構成について、専門的見地からの意見を得た。

イ．調査研究関係：調査研究において、専門的見地から助言並びに収集活動に資する情報の提供を得た。

ウ．文化財情報関係：文化財情報関係システムの新OS移行にあたっての合理的なシステム構築に指導助言を得た。

〔参照〕

事業実績統計表121頁

(2)

〔実績〕

調査研究の成果を広く公開することとして、以下の事業を実施した。

ア．仏教美術に関するシンポジウムの開催と報告書の刊行

〔自己点検評価〕

64名の参加者を得て、活発な討論ができた。報告書の刊行は、研究者等に貴重な研究資料の提供となった。

イ．特別展覧会「ヒューマン・イメージ」に関する国際シンポジウムの開催

〔自己点検評価〕

国内外からの専門者による講演、研究発表を実施し、229名の参加者を得た。

			<p>日本文化の研究発展に貴重な機会を提供できた。</p> <p>ウ．前年度実施の特別展覧会「若冲」に関する研究図書の刊行 〔自己点検評価〕 展覧会が好評であったことから大変な反響があり、展覧会後に多くの若冲ではないかと思われる作品の問い合わせがあり、その調査に時間を要しているため編集作業が若干遅れているが、次年度早期に刊行する。</p> <p>エ．館職員・客員研究員の研究成果（学叢）の刊行 〔自己点検評価〕 本書は毎年刊行しているものであり、研究者や関係研究機関には貴重な研究資料として期待されている。なお、現在、編集作業中のため、5月中旬に刊行できる。</p> <p>オ．社寺調査の成果報告 〔自己点検評価〕 12年度に実施した建仁寺・靈洞院の調査報告書を刊行し、京都の文化財に関する研究資料を提供する。なお同報告書の刊行は補足調査の実施等の関係から、編集作業が若干遅れているがデータの入力作業は進行しており、次年度早期に刊行する。</p> <p>カ．文化財修理報告書の刊行 〔自己点検評価〕 活用等の状況：最終に完了した修理分が年度末であったため、修理資料の入手が遅れ現在編集作業中であるが、次年度早期に刊行し、関係分野の研究資料として提供する。</p> <p>〔調査研究全体自己点検評価〕 今年度の調査研究は、外部から招聘した研究者との研究交流を進めながら、次年度開催の特別展覧会の準備調査、従来より継続している図像調査、科学研究補助金による6本の調査研究を実施し、充実した展覧会企画又は調査研究が展開できたと考える。 また、これら調査研究の成果発表として、国内シンポジウム、国際シンポジウムをそれぞれ1回実施し、12年度特別展覧会図録、研究紀要等を編集・刊行する一方、これら調査研究成果を随時ホームページに掲載し、広く情報の発信に努めた。以上のとおり今年度の調査研究は、展覧会や文化財の収集等の博物館業務に確実に反映できたとともに研究者や研究機関への貴重な研究資料の提供ができ、博物館に関連する研究の振興に寄与できたと考える。 なお、計画していた一部刊行物で編集作業の遅れから年度末までに刊行できなかったものがあったが（次年度早期に刊行した。）この点については、編集時期の見直し等の改善を行い、次年度以降は計画のとおり刊行できるよう万全を期することとした。 〔参 照〕 事業実績統計表132頁・133頁・135頁</p>				
	客員研究員招聘人数	4人以上	3人	3人未満	4人	A	
<p>4 教育普及</p> <p>(1)-1 美術史・考古学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館・美術館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。</p> <p>(3)-3 美術図書等の閲覧施設を研究者中心から一般へと利用の拡大を図り、生涯学習の場とする。</p>	資料の収集及び公開（閲覧）の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>〔方針〕 独立行政法人国立博物館は、文化財を通し、文化の向上・発展に努めることが重要な業務であることを認識し、人材養成・研修、国際交流や文化発信の拠点としての機能を十分に発揮すべく、教育普及業務に取り組むこととした。</p> <p>〔取り組み〕 文化財に関する基礎資料（図書、写真）及び関連情報について、広く収集し、蓄積を図るとともに、これら資料・情報を多くの国民が容易に利用できるようレファレンス機能の充実を努めた。</p> <p>〔実績〕 今年度には、図書1,720冊、写真（原版）5,000枚を収集。</p> <p>〔自己点検評価〕 今年度末での総蓄積数は図書資料56,028冊、写真資料204,419枚となり、基礎資料の充実を図るとともに、これら保有する資料は、一般の利用に供せるようホームページ上で公開している。特に、図書刊行物については、館内ミュージアムショップホームページと自館ホームページをリンクさせ、利用者の利便性に配慮する等、レファレンス機能の充実ができたと考えた。 なお、次年度には常設展示場ロビーに図書閲覧コーナーを設け、学習の場や資料提供の機会の充実を図ることとする。 〔参 照〕 事業実績統計表137頁</p>	A	<p>新たに文化財に関する図書1,720冊及び写真原版5,000枚を収集し、また、レストランに図書閲覧コーナーを新たに設けるなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。 今後も、3館の資料を登録及び検索できる現代的システムの開発や広報の強化を図り、より一層、資料を活用することが望ましい。</p>		
<p>(2)-1 次に掲げる各館の方針に従い、新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした文化財解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、文化財等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。 また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。</p>	児童生徒を対象とした講座等の実施状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>〔方針〕 児童生徒を対象とした事業については、文化財への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を展開する。</p> <p>〔取り組み〕 小中学生の理解の促進を図ることとして、博物館ディクショナリ（陳列品の平易な解説に写真を添えた子供向けリーフレット）を提供した。また、館内での配布以外にもホームページに順次転載し、広く教育普及に努めた。</p> <p>〔実績〕 発行実績：7回 1回1,500枚発行（総発行数 10,500枚）</p> <p>〔自己点検評価〕 毎回発行後短期間で全て配布となり、既発行分の再版や冊子化の希望が多く寄せられている状況であり、好評を得た。今年度の状況から次年度には、年12回発行するとともに、既発行分の冊子化についても検討し、児童生徒のニーズに十分に答えられるよう改善を実施することとしている。</p>	A	<p>教育普及の取り組みの充実や学校教育における博物館の活用の推進を図るため、限られた人員と予算で博物館ディクショナリを館内及びホームページにおいて提供するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p>		

<p>(東京国立博物館) 児童生徒を対象とした文化普及事業及び文化財とのふれあい事業を実施し、教育普及の推進を図る。 中・高校生を対象とした総合学習としての職場体験学習及び大学等を対象としたインターンシップの受け入れを実施する。</p> <p>(京都国立博物館) 小中学生学習プログラム等について検討、実施する。</p> <p>(奈良国立博物館) 親と子の文化財教室を実施し、児童生徒に対する教育普及の促進を図る。 修学旅行生等を対象とした文化財の案内・説明資料等の作成、解説等について検討、実施する。</p>		児童生徒を対象した事業の参加者数	7,500部以上	5,250部以上 7,500部未満	5,250部未満	10,500部	A	
<p>(3)-1 文化財に関する情報について正しく後世に伝えるとともに、その理解を深めるような講演会、講座及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。 それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。 また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。</p>	講演会等の実施状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	〔方針〕 観覧者等が文化財をより深く理解(学習)できるよう講座を開講する。 〔取り組み〕 定期講座として土曜講座を、また集中講座として夏期講座を実施した。 〔実績〕 土曜講座実績：毎土曜日 47回実施 延べ聴講者4,061名 〔自己点検評価〕 来館者を対象に展示品・展覧会に関連したテーマで実施し、講座資料を作成・配布、講師はテーマによって外部から専門家を招聘して実施した。1回あたり聴講者数は最高275名、平均100名であり、好評な講座として定着していると言える。これは講座の企画(講師、テーマ)が毎回優れている結果と評価できる。 〔実績〕 夏期講座実績：7月25・26・27日の3日間に実施、延べ聴講者99名 〔自己点検評価〕 日本東洋美術のみならず西洋美術にまで範囲を広げた中で、特定のテーマを設け、文化財の理解を促進することとして実施している。聴講者の募集は、チラシ、京都国立博物館だより、ホームページ、国立博物館ニュースにより広く募集に努めた。 今年度は「祈りの造形」をテーマに実施した。本講座は、講義室のみでの講義だけでなく、テーマに即した現地見学(現地解説)を含めた講座として毎回実施している。この現地見学(解説)は、見学場所の選定、見学方法の交渉等に大きな負担が伴うものであるが、当館の特徴ある事業の一つとして継続して実施しているものであり、聴講者からは好評を得ている。 〔参照〕 事業実績統計表149頁・150頁	〔方 針〕 観覧者等が文化財をより深く理解(学習)できるよう講座を開講する。 〔取り組み〕 定期講座として土曜講座を、また集中講座として夏期講座を実施した。 〔実績〕 土曜講座実績：毎土曜日 47回実施 延べ聴講者4,061名 〔自己点検評価〕 来館者を対象に展示品・展覧会に関連したテーマで実施し、講座資料を作成・配布、講師はテーマによって外部から専門家を招聘して実施した。1回あたり聴講者数は最高275名、平均100名であり、好評な講座として定着していると言える。これは講座の企画(講師、テーマ)が毎回優れている結果と評価できる。 〔実績〕 夏期講座実績：7月25・26・27日の3日間に実施、延べ聴講者99名 〔自己点検評価〕 日本東洋美術のみならず西洋美術にまで範囲を広げた中で、特定のテーマを設け、文化財の理解を促進することとして実施している。聴講者の募集は、チラシ、京都国立博物館だより、ホームページ、国立博物館ニュースにより広く募集に努めた。 今年度は「祈りの造形」をテーマに実施した。本講座は、講義室のみでの講義だけでなく、テーマに即した現地見学(現地解説)を含めた講座として毎回実施している。この現地見学(解説)は、見学場所の選定、見学方法の交渉等に大きな負担が伴うものであるが、当館の特徴ある事業の一つとして継続して実施しているものであり、聴講者からは好評を得ている。 〔参 照〕 事業実績統計表149頁・150頁	A	A	文化財等の理解促進を図るため、限られた人員と予算で積極的に土曜講座や夏期講座を実施し、平成12年度以上の実績を上げるなど中期目標に向けて着実に成果を上げている。 また、講座等については、年齢・性別・学歴を問わず、幅広い国民各層を対象とするよう配慮し、その他の業務に支障を来さない程度に充実させることが望ましい。 友の会の活動については、その在り方を含めて再検討する必要がある。	
<p>(3)-2 友の会活動を通じて、文化財に接する機会を増やし、より充実した学習の場を提供する。</p>	友の会の活動状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	〔方 針〕 より多くの人達に文化財への理解を促進するため、友の会会員への利便性の向上を図る。 〔取り組み〕 友の会会員の入会方法の改善を実施した。 〔実績〕 改善内容：従前の年1回(3日間)限定入会受付から随時入会受付方法に変更した。 今年度会員数：1,761名 〔自己点検評価〕 今年度の入会会員数は例年に比して微減の状況となったが、これは制度の改変等によるものであると考えられ、入会者からは好評を得ていることもあり、今後、広報が浸透すれば増加すると考える。	〔方 針〕 より多くの人達に文化財への理解を促進するため、友の会会員への利便性の向上を図る。 〔取り組み〕 友の会会員の入会方法の改善を実施した。 〔実績〕 改善内容：従前の年1回(3日間)限定入会受付から随時入会受付方法に変更した。 今年度会員数：1,761名 〔自己点検評価〕 今年度の入会会員数は例年に比して微減の状況となったが、これは制度の改変等によるものであると考えられ、入会者からは好評を得ていることもあり、今後、広報が浸透すれば増加すると考える。	B			

<p>(4)-1 博物館・美術館関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。</p> <p>(4)-2 全国の公私立博物館等の学芸担当職員（キュレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。</p> <p>(4)-3 公私立博物館・美術館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。</p> <p>(4)-4 公私立博物館・美術館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。</p>	<p>研修の取組み状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>〔方針〕 修理技術の向上に貢献するため、修理技術関係者等の研修に当館の施設や文化財資料の提供及び修理技術の専門的知識を供与し、修理技術者の育成等に貢献する。</p> <p>〔取り組み〕 国宝修理装こう師連盟定期研修会に協力した。</p> <p>〔実績〕 国宝修理装こう師連盟定期研修会に施設や文化財資料の提供、技術的指導等を実施した。</p> <p>〔自己点検評価〕 国宝の修理技術者という我が国文化財にとって重要な分野に対して、技術指導等で重要な役割を担えたと考ええる。</p> <p>〔方針〕 公私立博物館・美術館の展覧会の充実のために援助・助言を行うこととして、当館の調査研究資料や学芸員の専門知識の教示を積極的に実施する。</p> <p>〔取り組み〕 当館が平成11・12年度に調査を実施した鉄舟寺（静岡県清水市）の所蔵文化財の特別展覧会「鉄舟寺展」を清水港湾博物館（フェルケール博物館）が開催するに際して、展示計画やカタログの制作、搬出入に関して当館研究員が指導・助言を実施した。</p> <p>〔実績〕 清水港湾博物館開催の「鉄舟寺展」に対し、展覧会カタログに掲載する出品物の写真、調書の提供、解説に係る執筆、講座に係る講師、作品の集荷・展示・撤収作業に対する助言等の協力を行った。</p> <p>〔自己点検評価〕 当館研究員が調査研究資料の提供から展覧会の実施（企画から集荷、展示、撤収に至るまで）更には解説の執筆及び講座の講師として全面的な協力を実施したことにより、清水港湾博物館としては過去最大規模の5千人を超える入館者を得ることができ、当館の関与が大きく評価された。</p> <p>〔参照〕 事業実績統計表155頁、156頁</p> <p>〔方針〕 公私立博物館・美術館の人材養成に貢献するため、各種研修に協力を行うこととして、当館の調査研究資料の提供及び学芸員の専門知識の教示を積極的に実施する。</p> <p>〔取り組み〕 文化庁が行う指定文化財企画展セミナー協力した。</p> <p>〔実績〕 文化庁主催「指定文化財企画展セミナー」に講師の派遣、資料の提供等の協力を行った。</p> <p>〔自己点検評価〕 セミナーには、当館学芸員を講師に派遣し、文化財に係る知識の教示並びに資料の提供を行い、公私立博物館への支援ができたことは、情報交換、人的ネットワークの形成につながったと考える。</p>	<p>B</p>	<p>博物館関係者等の人材育成及び人的ネットワークの形成を図るため、公私立博物館関係者が多数参加する文化庁主催の「指定文化財企画展示セミナー」に講師を派遣し、清水港湾博物館へ指導・助言するなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>特に国宝修理装こう師連盟定期研修会において技術的指導等を実施したことを評価する。</p> <p>今後も、受入可能な人数の範囲内で積極的に取り組む必要がある。</p>	
<p>(4)-5 大学等と連携し、大学院生や大学生を受け入れ、文化財に関する実習等について検討、実施する。</p>	<p>大学等との連携の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>〔方針〕 博物館活動をより充実・発展させるために人材養成は重要な課題であり、国立博物館が積極的に人材養成の役割を担わなければならないとの認識の下に、大学での教育への参画、博物館実習生の受け入れ等、積極的に実施する。</p> <p>〔取り組み〕 文化財の実物を用いた教育が可能という博物館の特性を生かし、京都大学大学院と連携し、美術史学・考古学という基本学だけでなく、文化財の取扱、調査、保存、展示を含めた文化財に関する高度で総合的な教育を実施することとして、同大学大学院人間・環境学研究科の客員講座において、「中世・近世芸術比較分析論」、「宗教美術調査法論」、「生活造形分析論」、「文化財保存・展示技術論」の講義、演習等を実施した。また、博物館関係者の人材確保等から各大学からの博物館実習の要望に応えた。</p> <p>〔実績〕 京都大学大学院との連携：人間・環境学研究科の客員講座に当館学芸員が担当教官として6名就任 所属学生3名（所属学生以外の院生も受講）</p> <p>〔自己点検評価〕 講義においては、原則として館内で展示品・収蔵品を前に行うこととし、実物に接する機会に乏しかった従来型の大学院での美術史・歴史教育の欠陥を補って、文化財の取扱、調査保存、展示を含めた文化財に関する高度で総合的な教育を実施できたことは評価できると考える。</p> <p>〔実績〕 博物館実習生の受け入れ：21大学・44名の実習生受け入れ</p> <p>〔自己点検評価〕 実習生の受け入れは、短期的に見れば博物館の普及に資するものであり、また将来的に見れば後継者の育成としての意味を持つと考え、博物館の重要な事業の一つと認識し、学芸員等の人材確保に寄与するため、各大学からの実習依頼に積極的に応えられたことは、評価できると考える。</p> <p>〔参照〕 事業実績統計表159頁</p>	<p>A</p>	<p>大学等と連携協力を図るため、京都大学大学院携講座を担うとともに、博物館実習生を受入れ博物館の職場を体験する機会を提供するなど、中期目標に向けて着実に成果を上げている。</p> <p>なお、大学等との連携は積極的に行われるべきであるが、博物館実習生の受け入れについては、博物館側の負担にならないよう、受け入れ状況を常に見直すことが望ましい。</p>	
<p>大学生等の受入人数</p>	<p>35人以上</p>	<p>25人以上 35人未満</p>	<p>25人未満</p>	<p>21大学44人</p>	<p>A</p>	

<p>(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、図版目録、展覧会目録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立博物館への理解の促進を図る。 また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、3館共同による広報体制の在り方について検討を行う。</p>	<p>広報活動の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>〔方針〕 博物館への理解の促進を図るために、来館者を始め広く国民一般に情報を提供することとして、事業内容を紹介した各種刊行物の発行及び情報機器による情報の提供等を推進する。 〔取り組み〕 博物館概要、年報、図版目録、展覧会目録、学叢、その他展示案内パンフレット等の様々な刊行物を発行するとともに、収蔵品カタログを順次ホームページに転載し、より多くの情報提供を実施した。 〔実績〕 刊行物の発行：「博物館概要」 「年報（12年度研究成果発表）」を年1回刊行 「展覧会目録」6冊刊行（特別展4冊、特別陳列1冊、特別展観1冊） 「学叢」研究紀要として年1回刊行 「京都国立博物館だより」年4回刊行（1回10,000部） 「ニューズレター」年4回刊行（1回3,000部、京都国立博物館だよりの英語版） 「展示案内リーフレット」日本語版（10万部）英語版（3万部）刊行 収蔵品カタログの情報提供：今年度853件を転載し、13年度未現在5,303件（日本語英語）をインターネットで提供 〔自己点検評価〕 これら刊行物は、博物館を理解してもらうために有効である一方、学術研究的資料の提供という意味で大きな役割を担い、年報及び学叢は逐次ホームページに転載し、広く研究分野への資料の提供に努めたことは、国立博物館への理解の促進が図れたと考える。</p>	<p>A</p>	<p>文化、文化財及び国立博物館について国民の理解促進を図るため、展覧会図録や紀要等を発行するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。また、これらの資料を逐次ホームページで広く国民に公開した。 今後も、より一層、国民に博物館活動が理解されるよう内容を工夫し、積極的に実施することが望ましい。</p>
<p>(1)-2 収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。 (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。 (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、文化財情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。 また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。</p>	<p>収蔵品の情報デジタル化及びその活用状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>〔方針〕 収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報については、長く後世に記録を残し、かつ国内外に広く情報提供を図るためにデジタル化を推進するとともに、ホームページの改良・工夫を行い、国内外に広く、かつ多様な用途に活用できるよう、情報機能の改善等を実施する。 〔取り組み〕 ホームページへのアクセス件数が12年度の24万8千件を上回るようコンテンツの工夫と充実を図ることとして、特別展覧会、特別陳列の事前案内をより豊富に行い、デジタル画像の活用を心がけた。また、広い階層の人々を対象とした「読み物」や、小中学生及び外国人を対象とする「ディクショナリー」のホームページへのアップを目指した。 〔実績〕 アクセス件数：34万5696件（目標24万8千件） デジタル化の状況：文化財情報具備の画像について、249件を入力した。また、単純情報のみ付属の画像デジタル化終了件数1,280件、科学研究費による研究成果としての画像デジタル化件数3,000件を加えることができた。 〔自己点検評価〕 アクセス件数が前年度の件数を大幅に上回ったことは、コンテンツの工夫やデジタル画像の活用に効果があったものと評価でき、収蔵品のデジタル化件数も目標を上回り入力できたことは、広く公開できる体制が順調に構築されていると評価できる。更に今後には新規収蔵品の効率的なデジタル化とともに、高精細画像形式へのデジタル化も考慮し、制度の高い記録保存を視野に入れることも考える。 (5)-3 デジタル情報の有料化は今後の検討課題とした。</p>	<p>A</p>	<p>文化、文化財及び国立博物館について国民の理解促進を図るため、目標を超える文化財情報のデジタル化を実施し、ホームページの充実を図るとともに、国立博物館の全ての国宝を館内及びインターネットで閲覧することができる「国立博物館所蔵国宝高精細画像閲覧システム」を構築するなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。 また、文化財の保存・修理等を含む文化財に係る情報のデータベース化にあたっては、標準化を検討するなど国民が簡便な方法でアクセス出来るシステムの開発を常に心懸けることが望ましい。 文化財がコンテンツの素材として注目される中で、著作権について慎重に取り組むことが望ましい。</p>
<p>(6)-1 ボランティア希望者に対し、そのニーズに応える研修を実施し、参加者の拡大を図る。ボランティアは登録を行い、連携協力して展覧会での解説など、国立博物館が提供するサービスの充実を図る。 なお、ボランティアの受け入れについては、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の延人数の確保に努める。</p>	<p>ボランティアの活用状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>〔方針〕 ボランティアによる国立博物館が提供するサービスの充実を図るため、ボランティアの育成事業を推進することとして、大学との学術交流を通して、学生ボランティアの育成に努める。また公益法人等のボランティア関係に関する教育研修に協力する。 〔取り組み〕 京都橘女子大学との学術交流と教育提携による解説ボランティアを実施することとして、希望する学生に当館学芸課担当研究員が事前の講習を行い、秋の特別展開催期間中に常設展示のボランティア解説を体験学習させた。また、京都市のボランティア関係法人の研修に協力した。〔実績〕 京都橘女子大学と学術交流及び教育提携による解説ボランティアを実施 参加学生数：16名 実施時期：10月23日から11月23日の1ヶ月間で、毎週火・水・金曜日実施 京都市博物館施設連絡協議会主催の「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座」に施設・文化財資料の提供や学芸員の講演等を実施した。 受講生：8名 実施時期：平成14年3月19日</p>	<p>A</p>	<p>ボランティア等実施者の学習ニーズへの対応及サービスの充実を図るため、大学等との連携を図りながら解説ボランティアを実施するなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。 ボランティアの活用については、解説ボランティアだけでなく、博物館業務の補助など幅広く検討することが望ましい。 また、ボランティアの受入は職員の負担を伴うため、ボランティアに博物館業務の専門家を募るなど、ボランティアの自主的活動を促すような方法を検討することが望ましい。</p>

					〔自己点検評価〕 当館学芸員の事前講習のうえ、常設展示でボランティア解説を体験学習させたが、聴講者は平均して10人前後でおおむね好評であった。参加した学生からも、博物館の業務の難しさと楽しさを実感でき、非常に有意義であったこと、また繰り返し解説しているうちに、自分自身、文化財に対する興味や時代についての理解が深まった等の感想が寄せられ、教育面でも大きな貢献を果たせたと思う。また、法人等が行ったボランティア養成事業等に当館の豊富な資料と知識を提供したことは、ボランティア育成面で大きな貢献を果たしていると思う。		
	ボランティアの受入件数	16人以上	11人以上 16人未満	11人未満	16人	A	
(6)-2 企業との連携等、国立博物館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討する。	渉外活動の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			〔方針〕 博物館の事業をより有効に展開するため、企業との連携を深め、支援体制を充実することが不可欠であると考え、広く企業に博物館への理解の促進を図り、共催や後援を始めとする協力を得られるよう、渉外活動に努める。 〔取り組み〕 交通機関、ホテル、観光案内所等へのポスター・チラシの掲出を依頼し、企業等の効果的な広報力の活用を図った。また、京都国立博物館支援法人「(社)清風会」が行う文化財の鑑賞会・見学会等に協力し、文化財及び博物館事業への理解促進を図った。 〔実績〕 渉外活動実績：固定的なポスター・チラシの掲出場所の確保 JR京都駅、京阪電鉄大阪主要駅に広報板設置 随時のポスター・チラシの配布協力の確保 市内ホテル、観光案内所等（特にJR京都駅、東京駅） 企業等との連携実績：京都国立博物館支援法人「(社)清風会」との連携 法人が行う文化財の鑑賞会・見学会に当館学芸員が解説・案内等の役割を担い、また土曜講座等教育機会を提供 〔自己点検評価〕 企業等の広報力を効果的に活用できたことは、入館者の増等に大きな成果が上がり、また法人と当館が密接に連携できたことは、文化財及び博物館への理解の促進に効果が合ったと評価できる。	B	国立博物館の業務の充実を図るため、広報面においてJR、ホテル、観光案内所等との連携を図るなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。 今後も、引き続き検討する必要がある。
5 新たな博物館の運営に向けた取り組み 法人本部に九州国立博物館（仮称）設置準備室を設置し、展示の企画・設計、展示に必要な作品収集、調査研究等の機能の整備など、開設に支障のないよう準備を推進する。	開館への準備状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			九州国立博物館（仮称）設置準備室で実施。		（九州国立博物館（仮称）で評定。）
6 その他の入館者サービス (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。 (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。 (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。 (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。	その他の入館者サービスの状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			〔方針〕 独立行政法人国立博物館として、事業を展開していくうえで、入館者サービスの向上・充実が不可欠なものと認識し、外部有識者や入館者等の意見を踏まえ、改善に努めることとした。 〔取り組み〕 高齢者、身障者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、入館者のニーズを調査しながら観覧環境の改善を心掛けることとして、今年度は以下の改善を図った。 〔実績〕 改善内容：バリアフリーの改善 身体障害者用優先駐車場新設（3台分）、身体障害者用及び乳幼児同伴用トイレ新設（1カ所）、身体障害者用通路の改修 〔参照〕 事業実績統計表161頁 〔取り組み〕 入館者サービスの充実の一環として観覧環境の整備を行った。 〔実績〕 整備内容：館内サインを見やすく丁寧な案内標示板に一新 常設展示場ロビーの椅子の増設、特別展での会場内休憩所の設置 〔取り組み〕 入館者のニーズを的確に捉え、改善に反映するため、アンケートの配布及びアンケート内容の見直し等を実施するとともに、外部の専門家からの意見を聴取し、入館者サービスの向上に努めた。 〔実績〕 アンケートの改善：記述方式を少なくし、選択方式項目を増やし、回答者の増に努めた。 外部の専門家の意見の聴取：特別展において、企画段階から当館調査員等から意見を聴取し、展示に反映した。 〔参照〕 事業実績統計表209頁・217頁 〔取り組み〕 入館者サービスの向上を目指すうえで、展示解説の見やすさは不可欠な要素であることから、入館者のニーズに可能な限り適応した解説の作成に努めるとともに、ハイビジョンの上映や音声ガイドの導入を図り、サービスの向上を図った。	A	入館者に対するサービスの向上を図るため高齢者、身体障害者のためのトイレ、スロープ等を設置し、案内標示版の変更、ハイビジョン上映、音声ガイド、夜間開館、タクシー乗務員の入館料無料措置、ミュージアムショップの拡張、レストランの開店を実施するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 今後も、アンケート結果の分析やモニター制度を検討するなど、的確に入館者のニーズを把握し、きめ細かなサービスを提供することが望ましい。

(2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な博物館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる博物館となるよう努力する。

(3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。

〔実績〕

解説改善内容：作品の名称、年代等の形式的な記述から、作品が生まれた背景等、観覧者がより深く作品を楽しめるように工夫した。

ハイビジョンによる鑑賞：常設展示場1階のハイビジョン・シアター（35人収容）において、一般の方に文化財をわかりやすく、より深く鑑賞してもらうため、当館のオリジナルソフトによる90インチのハイビジョンスクリーンで、当館の名品を初めとして、国宝・重要文化財など常に展示することができない名品を毎日上映し、鑑賞の機会を提供した。

音声ガイドの導入：全ての特別展、特別陳列の一部に音声ガイドを導入した。特に「雪舟」展では8人に1人が利用し、好評を得た。

〔参照〕

事業実績統計表162頁・163頁

〔取り組み〕

法人化となった国立博物館には、各種のサービスを向上させ、柔軟な運営のもと気軽に、親しまれる博物館が社会から求められていると確認し、これらのニーズに応えるべく運営に努めた。

〔実績〕

実施内容：夜間開館の実施等柔軟な開館時間の実施

特別展開催期間中においては、より多くの鑑賞の機会を提供することとして、開館時間の延長を実施し、開館時間を通常の17時閉館から18時に延長するとともに、毎週金曜日は夜間開館日として、20時までの開館を実施した。

また、「雪舟」展では、入館状況に応じて、開館時間の繰り上げ（最大45分早める）や閉館時間の延長（最大2時間延長）を実施した。この開閉時間の変更は入館者から大変好評で、柔軟な運営が出来たと評価される。

観光案内を兼ねたタクシー等乗務員の無料入館措置を導入

昨今の修学旅行生の観光方法の変化（団体行動からタクシー利用による小グループ行動）に対応して、修学旅行生を案内してきたタクシー乗務員（観光バス等の乗務員を含む）には無料で入館できるよう改善し、サービスの改善を図った。

〔参照〕

事業実績統計表170頁・171頁

〔取り組み〕

入館者にとっては、展示場のみならず、レストラン等の付属施設においても文化施設の一部であると認識し、博物館全体が快適な空間となるよう、入館者からのアンケート等をもとに、施設の充実に努めた。

〔実績〕

ミュージアムショップの改善：売場面積を拡大し、専門図書から修学旅行生等低学年層が求めやすいグッズ等、販売品の拡幅に協力を得た。

レストランのオープン：新設した南門施設内のレストランを10月からオープンするとともに、オープン後も、随時に利用者のニーズを調査し、メニューの充実や、館刊の図書が飲食しながら閲覧できるよう図書コーナーを設置する等、より快適な環境となるよう工夫に努めた。

その他の改善：特別展等入館者が増える時期には、庭園内に臨時飲物自動販売機を設置した。

〔自己点検評価〕

独立行政法人国立博物館としての初年度の事業運営に当たり、入館者サービスの向上・充実を最も重要な課題の一つとして取り組み、大きな成果を上げることができたと評価している。特に予算的に制約のある中でバリアフリーやサインの改善を実施したこと、アンケート結果による改善、音声ガイドの導入、開閉時間の柔軟な対応等は、多くの入館者から好評を得ることとなり、開かれた博物館としてのイメージアップに全職員が取り組んだ成果であると考えている。

項目別評価（奈良国立博物館）
業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中 期 計 画	指標又は評価項目	評定基準			指標又は評価項目に係る実績	評 定																																																							
		A	B	C		段階的評定	定性的評定																																																						
<p>1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。</p> <p>(1) 各博物館の共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>(2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進</p> <p>(3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進</p> <p>(4) 外部委託の推進</p> <p>(5) 事務のO A化の推進</p> <p>(6) 積極的な一般競争入札を導入</p> <p>2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。</p>	<p>効率化の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(1)</p> <p>(目的)</p> <p>共済組合事業、予算要求、資金運用及び損害保険その他共通的な契約等の事務を一元化し、業務の効率化を図る。</p> <p>(効果)</p> <p>給与計算事務の本部への一元化を検討し、本部と同じ仕様の給与事務ソフトを導入した。また、観覧者保険・自動車任意保険・寄託品保険の3種類の保険契約を本部で行った。</p> <p>(自己点検評価)</p> <p>業務の効率化を図ることができた。</p> <p>(2)</p> <p>(目的)</p> <p>光熱水量の使用状況を把握し、管理部門を中心に節減に努める。</p> <p>また、廃棄物の分別収集を徹底し、リサイクルを推進する。</p> <p>(効果)</p> <p>管理部門及び共通部門において20%の節電（蛍光灯の間引き）並びに所要箇所に節水・節電等協力の掲示を行い、以下のとおりとなった。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">光熱水料の状況（館全体の使用料対前年度比）</th> </tr> <tr> <th></th> <th>平成13年度</th> <th>平成12年度</th> <th>対前年比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>電気料金</td> <td>7,428万円</td> <td>7,728万円</td> <td>96%</td> </tr> <tr> <td>ガス料金</td> <td>3,371万円</td> <td>3,228万円</td> <td>104%</td> </tr> <tr> <td>水道料金</td> <td>659万円</td> <td>675万円</td> <td>97%</td> </tr> <tr> <td>重油</td> <td>451万円</td> <td>468万円</td> <td>96%</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>11,909万円</td> <td>12,099万円</td> <td>98%</td> </tr> </tbody> </table> <p>ガス使用料は増加したが、全体の金額ベースでは1.57%減の190万円が節約され、1%の効率化は達成された。</p> <p>また、ゴミの分別収集、ミスコピー回収箱の設置、再生紙の使用、パソコン配信活用によるペーパーレス化の推進、会議資料の両面コピーを行い、管理部門において複写機・FAXの使用実績が前年度に比べ18.92%減少した。しかし、広報活動の充実により、全体としては17.46%増加した。</p> <p>(自己点検評価)</p> <p>光熱水料については、引き続き節減に努める。</p> <p>リサイクルについては、ペーパーレスの推進と広報活動充実との両立について、今後検討を行う。</p> <p>(3)</p> <p>(目的)</p> <p>公開講座等を開催し、施設の有効利用を推進する。</p> <p>(効果)</p> <p>講堂等の利用案内を関係団体、学校等に対し積極的に行い、当館各施設において、今年度は以下の利用があった。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">< 講 堂 ></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>親と子の文化財教室</td> <td>6回</td> <td>美術史学会西支部例会</td> <td>1日間</td> </tr> <tr> <td>公開講座</td> <td>11回</td> <td>ボランティア解説</td> <td>99回</td> </tr> <tr> <td>特別展作品解説</td> <td>5回</td> <td>ボランティア研修</td> <td>23回</td> </tr> <tr> <td>夏期講座</td> <td>2日間</td> <td>学芸員による解説</td> <td>2回</td> </tr> <tr> <td>研究集会</td> <td>1日間</td> <td>職員研修（健康教室、接客マナー及び応手当講習）</td> <td></td> </tr> <tr> <td colspan="4">その他（放送大学面接授業（4回）、九博を支援する会、博物館学実習、奈良市主催観光接客講座）</td> </tr> </tbody> </table> <p>< 茶 室 > 正倉院展期間中を中心にお茶会を13回実施した。</p> <p>< 地下回廊 > 奈良県及び民間2団体の利用があった。</p> <p>< そ の 他 > 本館（正倉院展期間中）及び仏教美術資料研究センター（重要文化財旧奈良県物産陳列所）においてそれぞれコンサートを開催した。</p> <p>(自己点検評価)</p> <p>施設の有効利用を進めることが出来た。</p> <p>(4)</p> <p>(目的)</p> <p>看視業務等の業務内容を見直し、可能なものから外部委託を実施する。</p> <p>(効果)</p> <p>業務内容について内部で検討した結果、長期的に検討を続けることとし、当面は特別展の看視業務においてアルバイトを導入した。</p> <p>(自己点検評価)</p> <p>引き続き業務内容の検討を行う。</p> <p>(5)</p> <p>(目的)</p> <p>館内LANを活用し、ペーパーレス化を推進する。</p> <p>た、事務のO A化の推進のため、グループワークソフトの導入、職員研修を実施する。</p> <p>(効果)</p>	光熱水料の状況（館全体の使用料対前年度比）					平成13年度	平成12年度	対前年比	電気料金	7,428万円	7,728万円	96%	ガス料金	3,371万円	3,228万円	104%	水道料金	659万円	675万円	97%	重油	451万円	468万円	96%	計	11,909万円	12,099万円	98%	< 講 堂 >				親と子の文化財教室	6回	美術史学会西支部例会	1日間	公開講座	11回	ボランティア解説	99回	特別展作品解説	5回	ボランティア研修	23回	夏期講座	2日間	学芸員による解説	2回	研究集会	1日間	職員研修（健康教室、接客マナー及び応手当講習）		その他（放送大学面接授業（4回）、九博を支援する会、博物館学実習、奈良市主催観光接客講座）				<p>B</p>	<p>業務運営の効率化を図るため共済組合事務、損害保険契約事務などの事務の一元化、電気等の節約、O A化の推進及び一般競争入札の導入等を実施し、法人全体の運営費交付金の1.03%の効率化に積極的に貢献するなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>しかし、まだ改善可能な点があると思われるので、博物館本来の業務に支障のない程度に一般競争入札や外部委託を実施するなど、引き続き積極的に取り組む必要がある。</p>
光熱水料の状況（館全体の使用料対前年度比）																																																													
	平成13年度	平成12年度	対前年比																																																										
電気料金	7,428万円	7,728万円	96%																																																										
ガス料金	3,371万円	3,228万円	104%																																																										
水道料金	659万円	675万円	97%																																																										
重油	451万円	468万円	96%																																																										
計	11,909万円	12,099万円	98%																																																										
< 講 堂 >																																																													
親と子の文化財教室	6回	美術史学会西支部例会	1日間																																																										
公開講座	11回	ボランティア解説	99回																																																										
特別展作品解説	5回	ボランティア研修	23回																																																										
夏期講座	2日間	学芸員による解説	2回																																																										
研究集会	1日間	職員研修（健康教室、接客マナー及び応手当講習）																																																											
その他（放送大学面接授業（4回）、九博を支援する会、博物館学実習、奈良市主催観光接客講座）																																																													

					<p>ほぼ職員1人に1台ネットワークで結んだパソコンを配置し、各種通知等に電子メールを活用するようにしたほか、入館者数等のデータを共有ファイルとし、職員全員が利用できるようにした。また、グループワークソフトの導入検討、職員研修の実施を図った結果、給与システムを導入したが、グループワークソフトについては、コスト・性能の観点から現有ソフトで対応することとした。</p> <p>(自己点検評価) 電子メールを活用した各種通知等は職員の間に着用しており、ペーパーレス化が推進できた。</p> <p>(6) (目的) 物品調達や役務事務などの一般競争入札を推進する。 (効果) 発注に占める一般競争の件数は3件で、全体契約数に対しての比率は1%未満となった。 (自己点検評価) 会計基準の変更による随意契約金額の上限の上昇、及び補正予算等の予算措置のなかった状況においては、一般競争推進の立場に変化はなかった。</p> <p>2(目的) 運営委員会、評議員会、外部評価委員会を開催し、年度を通じての事業評価を行い、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。 また、各種研修・講習会を通じて、職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図るとともに、職員を外部の研修に派遣し、その資質の向上を図る。 (効果) 特別展、特別陳列及び親子のギャラリーについて反省会を実施し、展示照明、題箋及び解説パネルの改善を行った。 また、年度事業終了時に評議員会を開催し、事業等について評価を実施し、次年度事業計画の参考とした。研修については、以下のとおり外部研修への参加及び内部研修を実施し、資質向上に役立った。</p> <p>外部研修 <table border="0"> <tr> <td>企業会計研修</td> <td>延べ15名</td> </tr> <tr> <td>平成13年度目録システム地域講習会(図書コース)</td> <td>2名</td> </tr> <tr> <td>平成13年度目録システム地域講習会(雑誌コース)</td> <td>1名</td> </tr> <tr> <td>給与実務担当者研修</td> <td>1名</td> </tr> <tr> <td>平成13年度近畿地区国立学校等係長研修</td> <td>1名</td> </tr> <tr> <td>平成13年度長期給付実務研修会</td> <td>1名</td> </tr> <tr> <td>ビジネス対応マナーブラッシュアップ研修</td> <td>1名</td> </tr> </table> <p>館内研修 接客マナー及び応急手当について 健康教室「インフルエンザについて」</p> <p>(自己点検評価) 反省会及び評議員会を開催し、評価を行うことで、今後の事業の参考とすることができた。また、館内外の各種研修等への職員の参加により、理解促進、意識や資質の向上に役立った。</p> </p>	企業会計研修	延べ15名	平成13年度目録システム地域講習会(図書コース)	2名	平成13年度目録システム地域講習会(雑誌コース)	1名	給与実務担当者研修	1名	平成13年度近畿地区国立学校等係長研修	1名	平成13年度長期給付実務研修会	1名	ビジネス対応マナーブラッシュアップ研修	1名	
企業会計研修	延べ15名																			
平成13年度目録システム地域講習会(図書コース)	2名																			
平成13年度目録システム地域講習会(雑誌コース)	1名																			
給与実務担当者研修	1名																			
平成13年度近畿地区国立学校等係長研修	1名																			
平成13年度長期給付実務研修会	1名																			
ビジネス対応マナーブラッシュアップ研修	1名																			
	効率化の達成率	1.5%以上	1.0%以上 1.5%未満	1.0%未満	<p>独立行政法人国立博物館全体の効率化実績 <table border="0"> <tr> <td>運営費交付金予算額</td> <td>4,570,843,000円</td> </tr> <tr> <td>効率化した額</td> <td>47,501,889円</td> </tr> <tr> <td>効率化</td> <td>1.03%</td> </tr> </table> </p>	運営費交付金予算額	4,570,843,000円	効率化した額	47,501,889円	効率化	1.03%	B								
運営費交付金予算額	4,570,843,000円																			
効率化した額	47,501,889円																			
効率化	1.03%																			

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評定基準			指標又は評価項目に係る実績	評定	
		A	B	C		段階的評定	定性的評定
<p>1 収集・保管</p> <p>(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。</p> <p>(東京国立博物館) 日本を中心にして広く東洋諸地域にわたる美術及び考古資料等を収集する。</p> <p>(京都国立博物館) 京都文化を中心とした美術及び考古資料等を収集する。</p> <p>(奈良国立博物館) 仏教美術を中心とした名品を収集する。</p> <p>(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている分野を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかける。</p>	文化財の収集(購入・寄贈・寄託)の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	(1)-1 (目的) 仏画、仏像、経典・仏教関係書跡等、仏教工芸、仏教考古資料の中から重点的に購入する。購入については、彫刻、絵画、工芸、考古の各部門の文化財調査に従いリストアップした文化財について、鑑査会、買取協議会、買取評価会を経て、収集の検討を行った。 (効果) 彫刻1件、絵画2件、工芸2件、書跡3件の合計8件を購入した。まず、平成14年度に新収品展で活用し、その後、常設展で活用する (自己点検評価) 「絹本着色釈迦霊鷲山說法図」「銅造大威徳明王騎牛像」「悉曇蔵」「獅子座火焰宝珠形舍利容器」など、いずれも文化財としてきわめて価値の高いものばかりで、当館の今後の常設展示が質量ともに充実したものになると考えられる。 〔参照〕事業実績統計表 1頁、40頁～42頁	(1)-2 寄託について (目的) 仏教美術を中心とした当館の収集方針に従い、収集計画を立て、平常陳列に必要な文化財の継続的寄託及び新規寄託の受け入れに努力し、寄託品数1,730件を目標とした。当館に既に寄託品のある奈良・京都を中心とする社寺に働きかけ、一定の成果を上げる。そのためには、当館における文化財の保存環境を整え、併せて寄託文化財の文化史的・美術史的な位置づけのための調査研究活動の整備が肝要である。	A	奈良国立博物館の収集方針に基づき、「絹本着色釈迦霊鷲山說法図」など質の高い文化財を8件購入し、新たに重要文化財5件を含む44件の寄託を受入れるなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。奈良という地の利を生かし、寄贈・寄託の受け入れをより一層推進することが望ましい。 寄附・寄贈は有効な収集方法の一つであるため、文化庁と連携協力し税制問題を含めたその推進方を検討することが望ましい。 奈良国立博物館の収案件数の約58%を占める寄託品は、長年の実績により培われた寄託者等との信頼関係の賜物であり、引き続き良好な関係を保つよう努力することが望ましい。 文化財の散逸や海外流出について、文化庁、国立美術館等との連携を図り情報収集など迅速に対応することが望ましい。	

					<p>(自己点検評価) 寄託品の内容は質量ともに当館にふさわしいコレクションとなった。 〔参照〕事業実績統計表 45頁、47頁 寄贈について (目的) 平常陳列に必要な文化財の寄贈に努力する。 (効果) 個人コレクターから中国古代青銅器356件について寄贈の申し出があり、鑑査会において受託を決定した。 (自己点検評価) 今後の平常展示における新たな分野及び仏教法具の技法に係る調査研究の展開が可能となった。 借用について (目的) 収蔵品の収集費用の不足を補い、当館の陳列品に大きな厚みを出すため、文化財の借用を行う。 (効果) 文化庁が購入した文化財「絹本着色熊野曼陀羅」について、14年度に貸与を受け、陳列に活用する。 (自己点検評価) 借用による収集は、独立行政法人化後の新たな方法として位置付けられる。</p>		
<p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く後世へ伝えるとともに、展示等の博物館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。 (2)-2 収蔵品の保存カルテ作成、保存環境の調査等を実施し、収蔵品の保存環境の向上を図る。</p>	<p>保管の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>1,730件以上</p>	<p>1,211件以上 1,730件未満</p>	<p>(2)-1 (目的) 文化財の積極的保存を図る。また、収蔵品を理想的な環境で保存維持するため、保存環境の向上を図る。 従来から行っている文化財収蔵庫及び展示室における温湿度等の観察を行い、年間を通じて温度22～25、相対湿度60%に設定し、24時間空調を行うこととする。 (効果) ・平成14年3月から文化財保存修理所を開所した。 ・収蔵庫の空調を24時間行き、温度・湿度を適切に保つとともに、より確実な設備での運用のため、当館西新館の空調設備の取り替え工事に着手した。 ・展示場において、展示品の環境管理に配慮した。 ・特に展示替えの際及び特別展等に際しては、照度の検査・調整及び自記温湿度計の設置と毎日の点検を実施し、文化財の保存管理につとめた。 (自己点検評価) ・文化財保存修理所の開設により、文化財の積極的保存のための環境が整った。 ・収蔵庫の温湿度管理については、既存の博物館のモデルとなり得るものであり、今後も現今の方法で実施する。 (2)-2 (目的) 文化財の向後の保存管理の資料とするため、約100件の保存状況等を調査する。日常的な収蔵品の点検整理に際して、保存状況について特に注意し記述を残すなど、積極的な観察及び記録に努める。 (効果) 絵画部門35件及び彫刻部門35件について、計70件の調査を実施し基礎資料を作成した。 (自己点検評価) 保存状況は良好であり、温湿度による劣化や虫損の被害は観察できなかった。今後は実施時期を決めて、集中的に調査する方法を確立したい。</p>	<p>A</p>	<p>収蔵品の保存及び管理環境の維持充実を図るため文化財の種類、保管場所等の違いにより、温湿度や照明等を適正に管理している。また、文化財70件の保存状態を調査し、新たに文化財保存修理所を開所するなど、文化財の保管及び保管環境の強化が図られており、中期目標に向かって着実に成果を上げている。今後も、年間を通して、適正な温湿度の管理をすることが望ましい。 また、引き続き保存カルテを作成するとともに、長期的に保存環境を整備することが望ましい。</p>
<p>(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。 緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。 長期寄託品等の修理を実施する。 伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。 文化財修理・保存処理関係のデータベース化とその公開を実施。 (3)-2 国内外の博物館等の修理、保存処理の充実に寄与する。</p>	<p>修理の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>100件以上</p>	<p>70件以上 100件未満</p>	<p>(3)-1 (目的) ・修理を必要とする収蔵品のうち、破損が著しいものから計画を立て、約6件について修理を実施する。 当館の常設展に展示する作品を確保する為に収蔵品の保存状況を調査し、破損が著しいものから計画的に修理することとする。 各部門から上がった修理候補物件は修理指導室がとりまとめた後、館内における鑑査会を開き、修理内容を検討した上で、修理を実施する。 長期寄託品については、民間財団の助成を得て毎年1件程度の修理を実施する。 (効果) ・館蔵品のうち、書跡3件、彫刻2件、工芸1件、考古資料2件の計8件の修理を実施した。 書跡：虫蝕等による本紙の欠失、破損、損傷等を補修。 彫刻：桧材による像の安定、彩色の剥落箇所の樹脂による剥落止め。 工芸：刀剣の刀身の歪みの補正、刃取り研磨、錆の除去。 考古：鉄製品・土器・銅製経筒の石膏製雄型の作製・嵌入、保管箱の作製、シリコン樹脂による支持台の作製。 13年度は彫刻1件を修理した。</p>	<p>A</p>	<p>傷みの著しい書跡、彫刻、工芸及び考古資料などの収蔵品8件を修理するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 修理報告書を作成しデータベース化することは、文化財を再修理する際の貴重な記録となるため、今後、積極的に取り組み、その公開についても検討することが望ましい。 また、多くの文化財が修理を必要とする中で、中・長期的な修理計画を立てることが望ましい。</p>

				<p>(自己点検評価)</p> <p>目標とした修理件数を上回った。また、修理を実施したものについては、常設展及び特別展で活用することとした。 館藏品と同じく常設展において活用することとした。 東京国立博物館、京都国立博物館で実施。 〔参照〕事業実績統計表 81頁</p> <p>(3)-2 (目的) 文化財保存修理所を運営する国立博物館として指導的役割を果たす。 公私立の博物館及び寺社等の文化財所有者からの申し出に応じて文化財保存修理及び管理等のアドバイス等、指導助言を行う。</p> <p>(効果) 文化財保存修理所の運用を14年3月から開始し、国宝東大寺文書の修理を実施した。</p> <p>(自己点検評価) 文化財の管理等につき指導助言し、修理の実施に寄与した。</p>		
<p>2 公衆への観覧</p> <p>(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ各館において魅力ある質の高い常設展・特別展等を実施する。</p> <p>(1)-2 常設展においては、東京・京都・奈良の国立博物館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究 成果を基に、日本の文化や歴史の理解の促進に寄与する展示を実施する。</p> <p>(1)-3 特別展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の博物館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。</p> <p>(東京国立博物館) 年3～5回程度</p> <p>(京都国立博物館) 年2～3回程度</p> <p>(奈良国立博物館) 年2～3回程度</p> <p>(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。</p> <p>(1)-5 海外交流展については、海外の博物館等と連携を図りながら、国内外の優れた文化財を広く国民に観覧する機会を提供するとともに、日本の文化を海外に紹介し、日本への理解の増進に資する展覧会を実施する。(年1回程度)</p> <p>(1)-6 各館の連携による共同企画展等の実施について検討し推進する。</p> <p>(1)-7 収蔵品の効果的活用、地方における観覧機会の充実を図る観点から、全国の公私立博物館等と共催で、地方巡回展を実施する。(年1～2か所程度) なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。</p> <p>(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。</p>	<p>展覧会の状況</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>6件以上</p> <p>4件以上 6件未満</p> <p>4件未満</p>	<p>8件</p>	<p>(1)-1 (目的) 研究員の不断の調査研究を基礎にした、斬新な魅力ある質の高い展覧会を実施する。 研究員の資質の向上のために、科学研究費による調査研究、その他の助成金による調査研究を積極的に実施する。外部が計画し実施する調査研究に当館研究員の参加を促す。 また、積極的な海外交流を計画し、研究員の活発な研究意欲を養うこととする。</p> <p>(効果) 科学研究費による調査研究は、定期的に構成員が当館に集合し、具体的な成果(我が国奈良朝の仏像荘嚴の研究及び聖林寺十一面観音像の光背の復元案の作成)を上げつつある。研究成果は当館の常設展示に反映させつつある。 また、外部の科研に参画した研究員も多く、交流の成果が期待される。海外交流では当館は中国、韓国、ドイツと具体的な交流があり、海外研究員との交流を通して、当館研究員の積極的な研究態度の育成に有効に働いており、併せて近い将来の交換展や特別展における作品交流に結実させるよう努力している。</p> <p>(自己点検評価) 展覧会開催の照明、展示デザイン等の技術面において、更に研究すべき点が多く、民間の技術者やデザイナーの活用を検討したい。</p> <p>(1)-4 (目的) 外部からのニーズや、満足度に注意を払い、より魅力ある展覧会を開催する。</p> <p>(効果) 平成14年度開催の「東大寺のすべて」展の企画に際して、濱田隆(元奈良国立博物館長・東京国立文化財研究所長)、西川杏太郎(同)、鈴木嘉吉(元奈良国立文化財研究所長)の3氏を特別顧問として、展覧会出品の文化財の選定の可否、特に法華堂所在の塑像の輸送・展示の可否等について意見を伺った。 また別に、展示企画委員を委嘱し、展示の具体的方法についてアドバイスを得た。 入館者に対するアンケートは常設展、特別展毎に実施した。</p> <p>(自己点検評価) 特別顧問の協議により、「東大寺のすべて」に法華堂所在の塑像、戒壇院所在の塑像が出陳の方向になったことで、本取り組みは良い作用をもたらした。</p> <p>(1)-5 (目的) 展覧会を通して海外の博物館との連携を図り、互いの文化の理解につとめる。</p> <p>(効果) ・15・16年度に計画している韓国国立慶州博物館との交流展の準備のために、当館と慶州博物館の研究員を各2名1ヶ月程度、先方に派遣し、先方からも2名の研究員を受け入れた。 ・15年度企画のジャパンソサエティーの「日韓古代仏教文化交流展」の開催準備のためのシンポジウム及び事務打ち合わせのために、当館から先方に研究員1名を短期派遣した。 ・中国北京歴史博物館との交流展の実現のために、学術交流協定の締結の準備を進めた。 ・米国サンフランシスコ・アジア美術館からは、先方の展覧会への協力を要請されており、日本国内における、出品交渉や文化財の集荷・梱包・輸出・展示などを担当すべき協定を結んだ。</p> <p>(自己点検評価) 13年度には海外交流展の企画は無かったものの、今後の交流展の準備を進めることができた。</p> <p>(3) (目的) 展覧会に際して、適正な入館者数を設定し、その達成につとめる。</p> <p>(効果) 広報普及に力を入れ、ポスター・チラシの製作・配布数を再考し、効率的な活用を図った。 また展覧会によっては、新聞社等の協力を得て、紙面での広報等を行った。</p> <p>(自己点検評価) 「仏舎利と宝珠」展と「正倉院展」では、両方とも新聞社の協力を得ながら、前者は予想入場者数を大きく下回り、後者は大幅に上回った。 一般の観覧者にとって、本質的には展覧会の内容を如何に明快にするかが課題と思われる。</p>	<p>A</p>	<p>広く国民に優れた文化財・美術作品を鑑賞する機会を提供するため、国民の関心に応えたものや学術的意義の高いものなどバランスに配慮しながら、常設展、特別展・共催展2回、地方巡回展2回を開催し、目標入館者数以上の実績を上げるなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。 入館者に対するアンケート調査の結果では、概ね8割の肯定的な回答を得ており、展覧会に対する満足度は非常に高かった。 なお、広報活動については、さらに充実を図ることが望ましい。 海外交流展については、中期的な展望のもと企画・実施することが望ましい。</p>

<p>常設展</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(1)-2 全体 (目的) 魅力ある質の高い常設展を実施する。 定期的に陳列替えを行い、常に新鮮な視点から常設展を構成する。 奈良国立博物館は、国内における随一の仏教美術を中心とする博物館であり、きわめて質の高い文化財を収蔵している。こうした文化財を活用するために、特に常設展を重要視し、考古、絵画、書跡、工芸部門でそれぞれ年8回程度、彫刻部門で年6回程度の定期的な陳列替えを行う。 (効果) 常設展では、仏教美術を中心に、延べ約500件の文化財を展示した。 特に本館における彫刻部門の展示は、インド・西域・中国・韓国の仏像及び、飛鳥時代より鎌倉・室町時代にいたる我が国の仏教彫刻の様式的変遷を質の高い文化財で表現した。 (自己点検評価) 仏教の東漸を基に多くの文化が融合しながら伝播した仏教美術の展開を、質の高い展示で示すことができた。 入館者総数は特別陳列を含め、目標の12万人を上回る133,048人を記録した。 親と子のギャラリー「絵巻にしたしむ」 (目的) 主として小学生の児童およびその保護者を対象として、美術品に対する親しみを増してもらう。 毎年1回開催する。 (効果) 今回は絵巻物を対象とした企画であり、展示品は絵画、経典等計20件(うち国宝9件、重要文化財8件)とした。特に展示とカタログの作成に留意し、解説をやさしくわかりやすくするように努めた。 また、会期中2回のギャラリートークを行った。入場者総数は32,773人であった。 (自己点検評価) 外部有識者に観覧していただき、批評を当館機関紙寄りに稿願い、出陳品の質の高さ、絵巻の比較的長い場面を出した展示方法、分かりやすい解説や関連資料の多さなどにおいて高い評価を得た。 特別陳列「岡寺の歴史と美術」 (目的) 近年、五百数十年の時を経て再建された三重塔の壁画完成を契機として、奈良時代以来の法灯を現在に伝える明日香・岡寺の寺宝及び関連文化財を一堂に会し、岡寺の歴史と美術を広く一般に示す。 (効果) 絵画・彫刻・工芸・書跡・考古・歴史資料の計35件(うち国宝1件、重要文化財6件)を展示した。 また、会期中に当館学芸課長によるギャリートークを実施し、カタログも作成した。 入場者総数は12,116人であった。 (自己点検評価) 古代から近世・現代に至るまでの文化財を一堂に展示し、内容の多様さにおいて意欲的な取り組みであったと考えている。 特別陳列「西大寺 興正菩薩叡尊 1201-91 - 民衆を救った生き仏 - 」 (目的) 奈良・西大寺を中興した興正菩薩叡尊の生誕800年を記念して開催し、信仰と貧民救済活動を主要テーマとし、叡尊の活動を解明する。 (効果) 特に叡尊の生涯に焦点を当てて、舍利信仰、釈迦信仰、貧民救済など活動の特色を浮彫りにした。西大寺本尊である木造釈迦如来立像(重要文化財)や木造叡尊像(重要文化財)も借用し、展示することができ、内容的にはきわめて高度のものとなった。 なお、新聞社の後援を得て展覧会カタログを作成し、地元企業の協賛を得て展覧会ポスターを作成した。入場者総数は8,348人であった。 (自己点検評価) 叡尊の多彩な人物像が鮮やかになり、その高度な内容に高い評価を得た。 特別陳列「大和の神々と美術 - 手向山八幡宮と手掻会 - 」 (目的) 東大寺の鎮守である手向山八幡宮をとりあげ、特に当社の成立の歴史を反映する「手掻会」の祭礼を復元的に解明し、手向山八幡宮の持つ歴史的役割を明らかにする。 (効果) 長い伝統を持った手掻会を形成する文化財を一堂に展覧した。併せて鎌倉時代の貴重な神輿も出品され、充実した内容となった。 なお、新聞社の後援を得て、展覧会カタログを作成した。入場者総数は7,769人であった。 (自己点検評価) 外部有識者に観覧後の批評を寄稿いただき、出陳品が事前の詳細な調査研究により選択配置され、手掻会という民俗行事の中に含まれる歴史的背景が明らかにされている点が評価された。 特別陳列「お水取り」 (目的) 奈良・東大寺の毎年恒例の行事であるお水取りにちなんで開催する。今回で6回目となる。 (効果) 今年は五体板を展示、また、大導師部屋を再現し、更に写真パネルも多数活用して、観覧者がより身近にお水取りを感じられるようにした。 入場者総数は13,950人であった。 (自己点検評価) お水取りを多面的に紹介し、好評を博した。 〔参照〕事業実績統計表 101頁</p>	<p>A</p>	<p>奈良国立博物館では、本館・西新館において年間を通して14回の陳列替えをし、500件の文化財を公開した。また、「お水取り」等の特別陳列を開催するなど魅力ある常設展とするため積極的に取組んだ。 また、仏教美術を様々な角度から紹介し、研究・教育にも活用できる優れた内容であった。ただし、展示効果をあげるため展示手法等を工夫することが望ましい。</p>
------------	--	--	----------	---

	入館者数	1 20,000人 以上	84,000人 以上 120,000人 未満	84,000人 未満	133,048人	A	
仏舎利と宝珠	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評を決定する。	(1)-3 特別展「仏舎利と宝珠 釈迦を慕う心」 (目的) 我が国で受容された仏舎利に対する信仰の変遷をたどり、それに伴って造像された仏教工芸に焦点を当てる。上代以来の舎利に対する信仰に加えて、真言密教請来と共に宝珠に対する信仰が盛行するにいたる過程と、その造形を追う。 目標入場館数4万人。 展示品は工芸品を中心とし、一部絵画・彫刻・書跡・考古を含めた総数142件、うち国宝19件、重要文化財51件。また英国(大英博物館、同ピクトリア・アンド・アルバート美術館)・韓国(国立中央博物館)より5件の作品を借用し、その学術的意義の紹介につとめる。 会期中の普及活動として、外部講師4名、館内講師1名による都合5回の公開講座を実施、さらに5回の特別展作品解説をおこない、展示会の企画および展示作品に関する理解をはかる試みを行う。この他、初めての試みとして、オーディオガイドを導入し、会場内での観覧の便を図る。展示会の広報を図るために、マスコミとの共催とするとともに、帝塚山大学の協賛と日本航空の協力を得る。 (効果) これまで、舎利信仰は釈迦信仰という側面からのみ理解されてきたが、舎利信仰が様々なホトケと関連することを指摘し、その視点から舎利容器の分類を試み、舎利信仰の変遷に着目し、造形の方面にまで関連させて考察するという当館学芸スタッフの調査研究の成果を世に問うというものであった。 展示品は工芸品を中心とし、一部絵画・彫刻・書跡・考古を含めた総数142件(うち国宝19件、重要文化財51件)で、期間中、公開講座、作品解説に加え、初のオーディオガイドを導入した。また、新聞社をはじめ、多くの協賛・協力を得て、広報面での充実を図った。 (自己点検評価) 外部有識者に観覧後の批評を寄稿願ひ、学問的研究の質の高さ、出品作品の新しい意義付けに見られる出品作品の多様さ、インド・中国・韓国・日本に至る出品作品の多様さなどが評価を得たが、新しい研究テーマで、テーマの意義付けが学術上のレベルに止まったためか、一般の観覧者には多少難解であるとの指摘もあり、総入館者数は25,000人となった。 また、広報を充実させたが、効果が十分でなかった面もあった。 〔参照〕事業実績統計表 102頁、103頁			A	目標入館者数には届かなかったが、仏教美術を中心とした奈良国立博物館ならではのものであり、出品作品の質や学術的意義が高い展覧会であった。入館者数の多少の問題もあるが、今後もこのような展覧会を継続することが望ましい。	
	入館者数	40,000人 以上	28,000人 以上 40,000人 未満	28,000人 未満	25,000人	C	
第53回正倉院展	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	(1)-3 特別展「第53回正倉院展」 (目的) 毎年恒例の特別展であり、我が国奈良時代の優れた文化財を鑑賞するまたとない機会であり、古代文化や歴史への理解を深める。目標入館者数12万人。 13年度の「正倉院展」は、鳥毛貼成文書屏風2扇や、紫檀木画挟軾1基をはじめ、全部で75件(うち初公開22件)の作品を展示する。 展示は、東新館及び西新館を使用し、十分に広い空間の中で、観客の鑑賞の便を図ってゆったりとした陳列を心がける。 特に13年度からは、前売り券を販売し、観客が券売所で列を作ることなく入館できるように配慮する。 また、開館時間も午前9時から午後6時まで(金曜日は午後7時まで)として、平常展に比較して1日あたり1時間半の開館時間の拡張を図り、観客サービスに努めるほか、オーディオガイドも導入する。目録は英文を充実させることに努める。 (効果) 今回は75件(内初公開22件)を公開した。鈴鐸類10点など初出陳の宝物が例年に比して多かったこと、及び開館・閉館時間を拡大し、より多くの人が観覧できるようにした。 また、会期中に、当館茶室で茶会を開催したり、本館においてバロックコンサートを開催するなど、憩いの場と話題の提供に努めた。 (自己点検評価) 13年度の「正倉院展」では、初出陳の宝物が例年に比して多かったこと、また、開館・閉館時間を拡大し、より多くの人に観覧いただけるよう工夫したことが、リピーターの多い「正倉院展」愛好家の好評を博した。このことは、恒例化し、人気の定着した正倉院展であるが、宝物調査と調査研究の進展が新たな鈴鐸類の出品に至った。地道な研究が活性化に繋がったものと考えている。 また、ここ数年間、入館者数が漸減傾向にあったが、独立行政法人化の機会に、新聞社の協力を得て、広報宣伝と話題の提供に努めた結果、166,002人という昨年度より4万人上回る多数の入館者に鑑賞の機会を提供することができた。 〔参照〕事業実績統計表 102頁、103頁			A	平成13年度で53回を迎える奈良国立博物館恒例の展覧会である。同じテーマでありながら毎回質の高い展覧会を開催し、多くの人々の関心を捉えた。 また、前売券販売、コンサート及びお茶会など、入館者のための柔軟なサービスが実施された。	
	入館者数	120,000人 以上	84,000人 以上 120,000人 未満	84,000人 未満	166,002人	A	

	<p>地方巡回展 信仰と美術</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>			<p>(1)-7 (目的) 「信仰と美術」をテーマに、独立行政法人国立美術館国立国際美術館と共同で巡回展を実施する和歌山県立博物館（平成14年1月12日～2月11日）徳島県立博物館（平成14年2月19日～3月21日） (効果) 「古代の信仰と美術」及び「近代美術と信仰」の二部構成とし、当館の土偶1個、牛皮華鬘2をはじめ全て68件（うち当館からは絵画5件、彫刻13件、工芸5件、考古8件の計31件、国宝件、重要文化財は14件）を出品した。展覧会カタログも制作・発行した。また会期中に各会場で1回ずつ講演会を開催した。 (自己点検評価) 内容的には充実したものであるとの評価が多かったにも関わらず、和歌山が3,668人、徳島が4,303人と入場者数は比較的少なかったことから、広報等についての助言も行っていきたい。</p>	<p>B</p>	<p>公立博物館等と連携協力を図り、地方において優れた美術作品を観覧する機会を提供した。今後も、開催館の要望にできるだけ応え、外部研究者と協力して学術的意義のある質の高い展覧会を開催する必要がある。 また、国立美術館と共催することの意義について、今後、検討する必要がある。</p>
<p>(2)-1 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。 (2)-2 国立博物館及び公私立博物館が所蔵する考古資料を相互に貸借し、歴史的・考古学的に体系的・通史的な展覧会を実施する。（年間5件程度）</p>	<p>貸与・特別観覧の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>			<p>(2)-1 貸与について (目的) 国内外の博物館・美術館に収蔵品の貸与をし、広く我が国の文化財についての理解を深める。 目標とする貸与件数：約100件 (効果) 文化財保護の観点から、適度な期間と回数を図りつつ、増加の一途をたどる借用申請に対応した。 (自己点検評価) 貸与件数は103件となり、公私立美術館・博物館の展示に貢献できた。また、文化庁海外展大英博物館「神道展」に館蔵品・寄託品から合わせて7件を貸与した。 特別観覧について (目的) 特別観覧を通じ、広く文化財の理解を深める。 目標とする特別観覧件数：約300件 (効果) 文化財への理解を深めるために出来る限り対応した。 (自己点検評価) 特別観覧件数は354件となり、文化財の理解を深めることに貢献できた。 〔参照〕事業実績統計表 105頁、107頁 (2)-2 東京国立博物館で実施した。</p>	<p>A</p>	<p>文化財の効率的活用を図るとともに、他館との相互活用を促進するため、文化財の貸与121件、特別観覧354件を行うなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 今後も、貸与等の要望が増えると思われるが、収蔵品の保存状態に留意し、展覧会の趣旨を考慮しながら、幅広くその要望に答えることが望ましい。</p>
<p>3 調査研究 (1)-1 調査研究が収集・保管・修理・展示、教育普及その他の博物館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる各館の方針に従い、調査研究を積極的に実施する。 （東京国立博物館） 日本の文化財及び日本の文化に影響を与えた東洋諸地域の文化財の調査研究を実施する。 法隆寺献納宝物に関する調査研究を実施する。長期的な修理計画を策定するためのX線、赤外線写真等光学的データのデジタル画像処理システムの開発を行い、将来的に文化財保存カルテ等作成に利用できるデータベースの構築を目指す。 館所蔵模写模本類による原品復元に関する調査研究を行う。 （京都国立博物館） 京都文化を中心とした文化財の調査研究を計画的に実施する。 神と仏の思想的交流と造形に関する調査研究を実施する。 修復文化財に関する調査研究を実施する。</p>	<p>調査研究の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>			<p>(1)-1 「南都諸社寺等に関する計画的な調査研究」 (目的) 南都諸社寺等について計画的に調査研究を行う。 (効果) 13年度は特別陳列「手向山八幡宮と手搔会」の準備のために、手向山八幡宮における文化財調査を実施した。 (自己点検評価) 手向山八幡宮における文化財調査の成果は、当該特別陳列「手向山八幡宮と手搔会」に反映された。 「海外所在日本文化財を対象とする調査研究」 (目的) ドイツ・リンデン美術館における日本美術品について調査研究を行う。 (効果) 3年計画で行う漆工品を中心とした調査の最終年度にあたり、彫刻、工芸等の調査を一通り終え、成果を取りまとめ、調査報告書として刊行した。 (自己点検評価) 同館所蔵の日本美術品についての初の総カタログであり、今後の活用が期待される。 「大和古代寺院出土遺物の研究」 (目的) 斑鳩地方の古代寺院に調査対象を絞り、調査する。 (効果) 帝塚山学院大学考古学研究所と共同研究であり、13年度は、特に中宮寺旧跡出土の古瓦を調査し、既に一部資料等を大学に移し、実測図を制作している。</p>	<p>A</p>	<p>収集・保管、公衆への観覧、教育普及の事業など博物館活動の推進を図るため、南都諸社寺等に関する計画的な調査研究、海外所在日本文化財を対象とする調査研究及び大和古代寺院出土遺物の調査研究等を実施するなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。また、科学研究費補助金の獲得に努め、調査研究の充実を図った。 調査研究については、今後も幅広く外部研究者との交流を促進し、積極的に取り組むことが望ましい。 なお、研究成果については、図録等の刊行物のみならず、学会等においても幅広く積極的に発表することが望ましい。</p>

(奈良国立博物館)

南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施する。

仏教美術写真収集及びその調査研究を行う。

(1)-2 国内外の博物館・美術館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。

(2) 調査研究の成果については、展覧会、文化財の収集等の博物館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネット等を利用して広く情報を発信し、博物館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

(自己点検評価)

13年度から5か年計画で進める研究の第1年目であり、順調に進んでいる。

「平成14年度開催の『東大寺展』の事前調査」

(目的)

平成14年度開催予定の特別展「大仏開眼1250年東大寺のすべて」のための準備調査を行う。

(効果)

出展候補作品の保存状況の点検及び未調査作品の調査・写真撮影を行った。

(自己点検評価)

「東大寺のすべて」展に反映できるよう成果を上げることができた。

「仏教美術写真収集及びその調査研究」

(目的)

常時仏教美術資料の写真資料の収集に努め、データの収集を行う。

(効果)

特に特別展「仏舎利と宝珠」展において借用した文化財を中心に写真撮影を実施し、約2,700件以上の写真撮影及び4,000件以上のデータ収集を行った。

(自己点検評価)

広範で内容的にも貴重な資料が収集できた。

「日本上代における仏像の荘厳に関する研究」

(目的)

聖林寺十一面観音像光背復元図を提示する。

(効果)

構成員は、数度当館に集話し検討会を開催した。

また、東大寺二月堂観音像光背の表裏の図様の描起こし図を作成した。

更に、上代仏像荘厳にかかわる研究発表と討論会を開催し、国内外から約40人の第一線の研究者が集まった。北京大学馬世長教授、青山学院大学浅井和春教授、東京国立博物館加島勝金工室長、神戸大学黒田龍二助教授の発表を得た。

(自己点検評価)

上記の討論会では、我が国飛鳥・奈良時代における中国唐の思想の影響について活発な意見交換があり、研究は順調に進んでいる。

「X線透過撮影法による中国請来木彫仏像の調査研究」(科学研究費補助金)

(目的)

中国請来木彫仏の構造、製作技法等を明らかにする為にX線透過撮影を利用して調査を行い、資料の収集蓄積を図る。

(効果)

中国請来仏と関係の深い、日本禅宗彫刻を集中的に調査した。石川県永光寺に蔵される木彫11体につき、X線撮影を実施した。また、兵庫県中山寺の十一面観音像の調査も実施した。

(自己点検評価)

調査は順調に進み、また、十一面観音像からは納入品を新たに発見することができた。

「古代鉛釉陶器の日韓比較研究」(科学研究費補助金)

(目的)

日本と朝鮮半島の7～11世紀の鉛釉陶器の比較研究を通じて、日本における鉛釉陶器の成立を究明する。

(効果)

韓国の国立慶州博物館、国立公州博物館、国立全州博物館に所蔵される鉛釉陶器関係資料を実査した。

(自己点検評価)

その結果、従来知られていた新羅系の鉛釉陶器に加えて百済系の鉛釉陶器の大枠を把握することができた。即ち、日本における三彩陶器の成立過程を論究することが可能となる基礎資料の集成ができたことは、今年度の成果である。

韓国国立慶州博物館、中国上海博物館等との学術交流

ア．国立慶州博物館との学術交流

(目的)

国立慶州博物館とは一昨年度に学術交流の協定を結び、今年度からは相互に研究者を長期に派遣するなど、研究者の交流をより活発にする。

(効果)

先方からは2名の研究員を各1ヶ月招へいした。

また、当館からは2名の研究員をほぼ同期間派遣した。

(自己点検評価)

韓国国立慶州博物館との間で、海外交換展を計画しており、そのためにも相互の研究員の交換研究は有効である。特に、招へいした研究員は、先方の中堅研究員であり、今後の相互の協力発展のためにきわめて有効な役割を果たすと期待される。当館から派遣した研究員も相当の成果を上げており、今後の専門の研究に際して有意義な効果をもたらすものと期待される。

イ．上海博物館との研究交流

(目的)

仏教美術に関する調査研究や、相互の研究員の資質向上、友好関係の強化を図る。

(効果)

平成5年度より交流を続けており、これまでに先方では洛陽龍門石窟や法門寺において調査研究を実施し、研究員の知見を飛躍的に深めた。13年度は3名の研究員を派遣した。

(自己点検評価)

双方の研究員の学術情報の交換や資料調査など、研究基盤の充実がなされた。こうした交流は館員の資質向上のためにきわめて意義深い。今後は上海博物館とも展覧会を視野に入れた交流を模索したい。

					<p>(1)-2 海外との研究交流実績</p> <p>ア. (目的) 外部との研究者と広く意見交換を行い、互いの切磋琢磨を通して新たな研究進展を図る。</p> <p>(効果) 平成13年12月には、文化庁の「外国人芸術家・文化財専門家招へい事業」で中国・北京歴史博物館館長の朱鳳翰氏を招へいした。 なお、平成14年3月には再度招聘した。</p> <p>(自己点検評価) 朱鳳翰氏は、特に現在当館が預かっている356件の中国青銅器について、実物調査を行い明快な学問的評価を与えられ、きわめて有益であった。また、北京歴史博物館と当館との学术交流及び展覧会交流の話題が真剣に検討された。近い将来にこうした交流が実現することになると思われる。 なお、平成14年3月には、朱鳳翰館長を再度招へいした。当館が受贈を検討している、中国青銅器コレクションについての調査及び意見交換を図った。</p> <p>イ. (目的) 外部との研究者と広く意見交換を行い、互いの切磋琢磨を通して新たな研究進展を図る。</p> <p>(効果) 平成14年1月から3月の3ヶ月間、文化庁の「海外の博物館美術館の学芸員の招へい事業」で、米国・ハーバード大学サックラー美術館のアンローズ・北川氏を招へいした。</p> <p>(自己点検評価) 北川氏は東京、京都の両国立博物館でも研究交流を進め、今後の日米の学术交流の担い手として期待されており、特に若手研究員の視野を広げる上で効果があった。</p> <p>客員研究員による調査研究 (目的) 客員研究員を招へいし、研究者の交流を推進する。</p> <p>(効果) 松本包夫氏(元宮内庁正倉院事務所保存課長・工芸史専攻)は、収蔵品のうち、染織品の保存状況の調査研究を実施した。中野玄三氏(元嵯峨美術短期大学長・仏教絵画専攻)は、仏教絵画の保存状況の調査研究を実施した。森郁夫氏(帝塚山大学教授・考古学専攻)は、収蔵品の中の古瓦、就中斑鳩地区出土の古瓦について調査研究を実施した。</p> <p>(自己点検評価) 研究結果は、当館の常設展の為の基礎資料として活用を図る。</p> <p>(2) (目的) 調査研究の成果を展覧会等を通じて発表する。 また、印刷物やインターネットを活用して調査研究方法を公開し、広く斯界の学術的発展に資する。</p> <p>(効果) 13年度は以下の刊行を実施した。 研究紀要『鹿園雑集』第4号の刊行 論文1本、研究ノート2本、資料紹介2本、修理報告1本。 ドイツ・リンデン美術館所蔵日本美術調査報告書の刊行 国際的な講演・研究集会の開催 昨年度に引き続き、平成14年2月23日に中国及び韓国から専門の研究者を招へいし、国内からも第一線級の研究者を招いて約40人規模で開催した。上代仏像荘嚴の研究に関係の深い中国の事情についての情報を得、活発な意見交換があり、有意義な集会となった。 文化財修理報告書刊行のための資料整理等 館蔵品図版目録仏教絵画篇を刊行した。 館蔵品の絵画を110件収録し、更に名文等の参考資料を付している</p> <p>(自己点検評価) 当館で販布するほか、交換図書等で交流を図り、関係分野の学問的発展に寄与する。 調査結果は、将来の保存修理及び公開等の基礎資料として活用を図る。 討議録等の取りまとめを図り、広く関連分野の研究者の利用に供したい。 刊行に向けた資料整理を引き続き行う。 当館で販布するほか、交換図書等で交流を図り、関連分野の学問的発展に寄与する。更には当館所蔵品の最新のデータを明らかにすることにより、公私立博物館・美術館への利用を促す。 【参照】事業実績統計表 133～135頁</p>	A	
	客員研究員招聘人数	3人以上	2人	1人	3人		

<p>4 教育普及</p> <p>(1)-1 美術史・考古学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館・美術館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。</p> <p>(3)-3 美術図書等の閲覧施設を研究者中心から一般へと利用の拡大を図り、生涯学習の場とする。</p>	<p>資料の収集及び公開（閲覧）の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(1)-1 (目的) 美術史・考古学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館・美術館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図る。 (効果) 購入・交換により、関連資料の受入を行った(1,545件)。また、図書管理システムを導入して、国立情報学研究所との接続を行い、それによる整理業務を開始した。館内各所から目録情報の検索が可能となった。 (自己点検評価) 資料の整理及び検索業務を大きく進めることができた。 〔参照〕事業実績統計表 137頁</p> <p>(3)-3 (目的) 一般への利用拡大を図り、学習環境を充実させる。 (効果) 仏教美術資料研究センターでのサービスを継続して行った(年間利用者数349人)。また、西新館一階に、美術書等を設置した一般向けの図書コーナーを設け(資料数311冊)、サービスを開始した。 図書コーナーには利用者への案内のため、ボランティアガイドを配置した。 (自己点検評価) 入館者には大変好評を博した。</p>	<p>A</p>	<p>新たに文化財に関する図書1,545件を収集し、仏教美術資料研究センター及び西新館の図書コーナーにおいて一般に公開するなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。 今後、3館の資料を登録及び検索できる現代的システムの開発や広報の強化を図り、より一層、資料を活用することが望ましい。</p>
<p>(2)-1 次に掲げる各館の方針に従い、新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした文化財解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、文化財等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。 また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。 (東京国立博物館) 児童生徒を対象とした文化普及事業及び文化財とのふれあい事業を実施し、教育普及の推進を図る。 中・高校生を対象とした総合学習としての職場体験学習及び大学等を対象としたインターンシップの受入れを実施する。 (京都国立博物館) 小中学生学習プログラム等について検討、実施する。 (奈良国立博物館) 親と子の文化財教室を実施し、児童生徒に対する教育普及の促進を図る。 修学旅行生等を対象とした文化財の案内・説明資料等の作成、解説等について検討、実施する。</p>	<p>児童生徒を対象とした講座等の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(2)-1 (目的) 「親と子の文化財教室」は、平成5年度から実施しており、飛鳥時代から鎌倉時代までの歴史と文化について、時代順に学習してきた。学校週5日制を踏まえた事業であり、本年度は「飛鳥時代の歴史と文化」を取り上げ、教室への参加者数の増加を図る。 また、わかりやすい内容と作業・体験的な要素を加味することにより、楽しく学習できる文化財教室になるよう工夫する。 情報提供システムを使って、修学旅行生、団体、小・中・高校生等の入館者が奈良県の社寺についての基礎知識をもち、見学の参考となる事業を実施する。 また、仏像に関する興味・関心や基礎知識をもち、展示品に対する理解を深めるために作品解説・文化財の案内や有効な学習資料の作成を行う。 (効果) 募集形態を改め、前期・後期の2回に分けて募集したところ、申込者数は後期には130名を越え、前年度(約90名)を大きく上まわり、各回の参加者数も前年度より20~70%増加した。 現地見学会や復元作業・体験的な学習内容により、受講者は楽しく学習できた。 修学旅行・校外学習等の団体及びグループに対して、解説ボランティアが展示作品の解説や課題学習等の質問に、適切に対応することができた。「奈良の社寺」や「仏像のやさしい見分け方」の学校・学級・グループ単位の解説申し込みは前年度より減少した。 また、特別展、特別陳列ごとに両面印刷1~2枚の小・中・高校生向けのわかりやすいクイズ形式のワークシートを作成した。 (自己点検評価) アンケート結果によると、受講者の満足度は極めて高かった(8割以上)。アンケートの結果を踏まえて、運営上の工夫改善を図ったため、よい評価が得られたものと思われる。 解説ボランティアが展示作品の解説や課題学習等の質問に、適切に対応することができたことは、館職員の行う研修成果の表れと考えられる。丁寧にわかりやすく解説してもらえたとの評価を得た。 また、特別展、特別陳列ごとに両面印刷したクイズ形式の資料は、児童生徒たちには大変好評で、鑑賞の際の手がかりになると喜ばれた。</p>	<p>A</p>	<p>教育普及の取組みの充実や学校教育における博物館の活用の推進を図るため、限られた人員と予算で積極的に「親と子の文化財教室」を実施し、平成12年度の参加者数以上の実績を上げるなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p>
<p>児童生徒を対象とした事業の参加者数</p>	<p>95人以上</p>	<p>67人以上 95人未満</p>	<p>67人未満</p>	<p>130人</p>	<p>A</p>
<p>(3)-1 文化財に関する情報について正しく後世に伝えるとともに、その理解を深めるような講演会、講座及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。 それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。 また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。 (3)-2 友の会活動を通じて、文化財に接する機会を増やし、より充実した学習の場を提供する。</p>	<p>講演会等の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(3)-1 (目的) ギャラリートーク・夏期講座・公開講座等について、参加者の希望やニーズをできるだけ取り入れ、展示内容と関連付け、分かり易く興味深い講座を計画する。 (効果) ギャラリートークは、通常毎月第2水曜日に実施するが、今年度は展示会の回数から年間20回を数えた。特別展では展示会場ではなく講堂で行った。年間を通じての参加者数は、1,100名となった。 夏期講座は3日間で5講座、展示見学、現地見学会を行ったが、参加者数は昨年度より10%減少した。 公開講座は、主要な普及活動として定着しているが、参加者の減少傾向が見られるので、有効な広報活動を展開しなければならない。参加者数は1,050名と昨年度より増加した。 (自己点検評価) 内容については、いずれも展示会に関連したテーマを設定し、その趣旨にふさわしい講師の招へいを行った結果、参加者数は増加した。夏期講座については、設定時期について検討する必要がある。 アンケート結果は、ほぼ80%以上の満足度が得られており、講演内容の高さと分かりやすさが好評であったと言える。 〔参照〕事業実績統計表 147・148頁</p>	<p>A A</p>	<p>文化財等の理解促進を図るため、限られた人員と予算で積極的にギャラリートーク、夏期講座、公開講座を実施し、平成12年度以上の実績を上げるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 また、講座等については、年齢・性別・学歴を問わず、幅広い国民各層を対象とするよう配慮し、その他の業務に支障を来さない程度に充実させることが望ましい。 友の会の活動については、その在り方を含めて再検討する必要がある。</p>

講演会等の回数	ギャラリー トーク 12回以上	8回以上 12回未満	8回未満	17回	A
	夏期講座 3日以上	2日	1日	3日	B
	講座 6回以上	4回以上 6回未満	4回未満	11回	A
講演会等の参加者数	ギャラリー トーク 500人以上	350人以上 500人未満	350人未満	1,105人	A
	夏期講座 120人以上	84人以上 120人未満	84人未満	110人	B
	講座 1,000人以上	700人以上 1,000人未満	700人未満	1,045人	A
講演会等に対するアンケート結果	80%以上	56%以上 80%未満	56%未満	82%	A

友の会の活動状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	(3)-2 (目的) 友の会活動を通じて、博物館の事業の一層の普及を図る。 (効果) 年間を通して、券売の窓口で友の会入会の勧誘につとめ、会員数は2,709名となり、昨年までの会員数を上回った。 また、友の会会員を中心とした第30回夏期講座を7月に3日間実施し、97名の参加を得て、大変好評であった。 (自己点検評価) 今後も会員数の増加を図るとともに、活発な活動を行う。 〔参照〕事業実績統計表 141頁	B
----------	---	---	---

(4)-1 博物館・美術館関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
(4)-2 全国の公私立博物館等の学芸担当職員(キュレーター)の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
(4)-3 公私立博物館・美術館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
(4)-4 公私立博物館・美術館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。

研修の取組み状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	(4)-1 京都国立博物館で実施。 (4)-2 (目的) 公私立博物館の学芸員を対象に、国立博物館がその機能を活かし、実務研修を実施することにより、学芸員の専門的知識及び技術の向上を通じ、公私立博物館の機能の高度化と相互の連携に資する。 (効果) 今年度は、広島県熊野町「筆の里工房」より1名の学芸員を、10月～12月までの約2か月間受け入れた。研修期間中、研修日誌の記入と反省会を毎日設定し、充実した研修となるよう学芸課全体で指導にあたった。 (自己点検評価) 博物館運営の方法、学芸員の資質の向上、文化財の取扱方法、教育・広報のあり方について熱心に学習し、多大な成果をあげている。 〔参照〕事業実績統計表 151頁 (4)-3 (目的) 新聞社及びテレビ放送が主催又は共催し公私立博物館・美術館が開催する展覧会に協力し、学術面から協力をを行い、文化財の学術的な普及と安全な活用とを図る。こうした関係を通じてより活発な博物館活動を展開する。 (効果) 「法隆寺展」(名古屋市松坂屋美術館)、「国宝唐招提寺展」(長野県信濃美術館、名古屋市博物館)、「聖徳太子展」(東京都美術館、大阪市立美術館、名古屋市博物館)等の展覧会に協力し、展覧会カタログの執筆、出品作品の点検、梱包・展示・返還等の指導を行った。 (自己点検評価) 各展示会とも、安全な文化財管理を通じて、好評の内に無事完了した。 〔参照〕事業実績統計表 156・157頁	B
----------	---	--	---

博物館関係者等の人材育成及び人的ネットワークの形成を図るため、公私立博物館等の学芸担当職員に約2ヶ月間の研修を実施した。また、他の博物館等が主催する展覧会の図録の執筆及び出品作品の点検・梱包・展示等の指導を行うなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。
今後も、受入可能な人数の範囲内で積極的に取り組む必要がある。

(4)-5 大学等と連携し、大学院生や大学生を受け入れ、文化財に関する実習等について検討、実施する。	大学等との連携の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			(4)-5 (目的) 大学等の要請により、博物館学芸員を志望する学生を対象として、博物館学実習を実施する。放送大学の面接授業を年2回実施する。奈良女子大学との連携講座を実施する。 (効果) 大学からの実習希望の申し出を受けて、実習生の人数が確定するが、近年実習希望生が増加している。本年度は12月に4日間、17大学45名を受け入れ、昨年度より2大学5名増加した。当館講堂において面接授業を4回実施した。受講学生数150名。大学院生対象の連携講座を担当した。受講大学院生数3名。 (自己点検評価) 実習時の状況は非常に充実しており、学生からの評価も高い。毎回多くの参加者を得て好評であった。十分な教育成果を挙げることができた。	A	大学等と連携協力を図るため、博物館実習生を受け入れ博物館の職場を体験する機会を提供するなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。なお、大学等との連携は積極的に行われるべきであるが、博物館実習生の受け入れについては、博物館側の負担にならないよう、受け入れ状況を常に見直すことが望ましい。
	大学生等の受入人数	50人以上	35人以上 50人未満	35人未満	17大学45人	B	
(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、図版目録、展覧会目録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立博物館への理解の促進を図る。 また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、3館共同による広報体制の在り方について検討を行う。	広報活動の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			(5)-1 (目的) 従前より取り組んでいる概要や図版目録、調査報告、展覧会図録、紀要「鹿苑雑集」の他に、来館者等を対象とした「博物館だより」を発行することにより、博物館の事業内容や展覧会案内等の情報を発信し、広報普及に役立てることをねらいとする。 (効果) 「博物館だより」を年4回(4、7、10、1月)発行し、展示内容、展示品一覧、行事、エッセイなどを掲載した。基本的には、来館者を対象に無料配布するほか、郵送希望者の申し込みにも対応した。 (自己点検評価) 従前からの研究に係る報告書は、逐次、その成果を刊行している。新たに取り組んだ紙面構成の工夫や紙面サイズ、白黒刷りなど、様式上の改善が求められており、14年度からは紙面をリニューアルする予定である 【参照】事業実績統計表 127・129・130頁	A	文化、文化財及び国立博物館について国民の理解促進を図るため、図版目録、調査報告、展覧会図録、紀要、「博物館だより」等を発行するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。今後も、より一層、国民に博物館活動が理解されるよう内容を工夫し、積極的に実施することが望ましい。
	「博物館だより」の発行回数	4回以上	3回	3回未満	4回	A	
(1)-2 収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。 (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。 (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、文化財情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。 また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。	収蔵品の情報デジタル化及びその活用状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			(1)-2 (目的) 収蔵品等の文化財についてデジタル化を行い、文化財情報システムの充実を図る。 (効果) 館蔵品及び館内で調査・撮影を行った文化財についてデジタルデータを作成し、文化財情報システムへ蓄積を行い、データ件数は文化財情報約910件、写真情報約8,500件、画像データ2,000件の計11,410件となった。 (自己点検評価) デジタル化作業を大きく進めることができた。 (5)-2 (目的) ホームページを作成し、展覧会等、博物館の各種活動の広報を行う。 (効果) ホームページをリニューアルし、広報の充実を図った結果、13年度アクセス件数は約35万件となり、昨年度のアクセス件数約18万件を大きく上回った。また、紀要の公開に向けて準備を行った。 (自己点検評価) ホームページのリニューアルに係る情報量の増加、特に展覧会情報の充実をはじめ、奈良市観光課やアサヒコム等、他のホームページとリンクを張ったこと、展覧会毎のポスターやチラシに当館ホームページのURLを明記したことがアクセス件数増加の大きな理由と考えられる。 (5)-3 (目的) デジタル化した収蔵品等の情報を、文化財情報システム等によって広く公開する。 (効果) 奈良博文化財情報システムへのデジタルデータの蓄積を継続し、作成件数は文化財情報約910件、写真情報約8,500件、画像データ2,000件の計11,410件となった。 (自己点検評価) 今後は、引き続きインターネットで公開を図る。	A	文化、文化財及び国立博物館について国民の理解促進を図るため、目標を超える文化財情報のデジタル化を実施し、ホームページのリニューアルを図るとともに、国立博物館の全ての国宝を館内及びインターネットで閲覧することができる「国立博物館所蔵国宝高精細画像閲覧システム」を構築するなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。 また、文化財の保存・修理等を含む文化財に係る情報のデータベース化にあたっては、標準化を検討するなど国民が簡便な方法でアクセス出来るシステムの開発を常に心懸けることが望ましい。文化財がコンテンツの素材として注目される中で、著作権について慎重に取り組むことが望ましい。
	収蔵品等のデジタル化件数	3,000枚以上	2,100枚以上 3,000枚未満	2,100枚未満	8,549件	A	
	ホームページのアクセス件数	180,000件以上	126,000件以上 180,000件未満	126,000件未満	355,751件	A	

<p>(6)-1 ボランティア希望者に対し、そのニーズに応える研修を実施し、参加者の拡大を図る。ボランティアは登録を行い、連携協力して展覧会での解説など、国立博物館が提供するサービスの充実を図る。 なお、ボランティアの受け入れについては、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の延人数の確保に努める。</p>	<p>ボランティアの活用状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(6)-1 (目的) 開かれた親しみやすい博物館づくり、学校週5日制、生涯学習社会に対応するため、また古都良の文化財に関する学習の拠点となる博物館づくりのために、奈良博解説ボランティア活動の実と発展を目指す。 (効果) 解説の力量を高めるために、研修計画として年間に基礎研修、専門研修等、15回程度実施した学芸員が展覧会の内容の解説を行い、教育室が全体の統括と指導を行った。 なお、13年度は約90名のボランティアのうち、英語の解説が可能なボランティアが18名程在籍しており、自主的な研修を行っている。ボランティアの活動としては、作品解説 会場インフォメーション 図書・国宝端末コンピュータの支援 各種講座・文化財教室の支援(受付及び機補助) 展覧会のモニター 広報活動の協力など多岐にわたった。 (自己点検評価) ボランティア活動も6年目を迎え、益々活動内容も充実したものとなっており、来館者からも謝の声が多く届けられている。 アンケートの結果でも、わかりやすい解説と親切的な対応に評判もよい。参加者確保については、間経過とともに辞退者もやや増えているが、本年度は募集せず、14年度に第5期として募集する。</p>	<p>A</p>	<p>ボランティア等実施者の学習ニーズへの対応及びサービスの充実を図るため、ボランティアを積極的に受入れ、しっかりとした教育を施し、ボランティアによる自主的な活動を促すなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。 ボランティアの活用については、解説ボランティアだけでなく、博物館業務の補助など幅広く検討することが望ましい。 また、ボランティアの受入は職員の負担を伴うため、ボランティアに博物館業務の専門家を募るなど、さらにボランティアの自主的活動を促すような方法を検討することが望ましい。</p>
<p>(6)-2 企業との連携等、国立博物館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討する。</p>	<p>渉外活動の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(6)-2 (目的) 企業等との連携による支援体制の整備を図る。 (効果) 特別陳列「西大寺興正菩薩観尊」では、企業の協賛を直接に得て、ポスターを制作配布した。また、同展では新聞社の後援を得た。 特別陳列「手向山八幡宮と手掻会」では、新聞社の後援を得、各々展覧会カタログの製作費の一部に充てた。 (自己点検評価) 今後は、効果的な普及のために、さらに支援体制の充実を図る。</p>	<p>B</p>	<p>国立博物館の業務の充実を図るため、企業から広報等の支援を受けるなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。 今後も、引き続き検討する必要がある。</p>
<p>5 新たな博物館の運営に向けた取り組み 法人本部に九州国立博物館(仮称)設置準備室を設置し、展示の企画・設計、展示に必要な作品収集、調査研究等の機能の整備など、開設に支障のないよう準備を推進する。</p>	<p>開館への準備状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>九州国立博物館(仮称)設置準備室で実施。</p>	<p>-</p>	<p>(九州国立博物館(仮称))で評定。)</p>
<p>6 その他の入館者サービス (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。 (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。 (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。 (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。 (2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な博物館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる博物館となるよう努力する。 (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。</p>	<p>その他の入館者サービスの状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(1)-1 (目的) 高齢者・身体障害者等の利用に関する検討委員会を発足させ、利用方針を策定し順次実施する。 (効果) 当館ではバリアフリーを推進し、施設についてはハートビル法に全て対応している。 なお、施設・環境整備委員会を設置し、高齢者、身体障害者等への配慮について、更に検討を行った。 また、高齢者・身体障害者に対しては、職員がきめ細かくに対応し、館のリーフレットにエレベーター、身障者用トイレ及びスロープ等の表示を入れ、案内に努めた。 (自己点検評価) 利用方針の策定について、今後引き続き検討する。 (1)-2 (目的) 快適な観覧環境を提供するための展示施設プログラムを策定し、計画的な整備を実施する。 (効果) 展示・サービス改善委員会及び施設・環境整備委員会を設置し、整備プログラムの策定について検討を行った。 施設・設備面では、館内表示の改善、傘立ての設置、ロッカーの増設、自動販売機の設置、ベアベッドを設置し、改善結果をインフォメーションコーナーで観覧者に周知した。 (自己点検評価) プログラム策定について、今後引き続き検討する。 (1)-3 (目的) 一般来館者、専門家を対象に満足度調査を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるほか必要なサービスの向上に努める。 また、特別展等に関し、専門家の展覧会評を求め、広報誌等に掲載する。</p>	<p>A</p>	<p>入館者に対するサービスの向上を図るため高齢者、身体障害者のためのトイレ、エレベータ、スロープ等を設置し、館内表示の改善、傘立て・自動販売機・ベビーベッドの設置、ロッカーの増設音声ガイド、夜間開館、小中学生の毎週土曜日の無料化を実施するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 今後も、アンケート結果の分析やモニター制度を検討するなどの確に入館者のニーズを把握し、きめ細かなサービスを提供することが望ましい。</p>

(効果)

展示・サービス改善委員会を設け、モニター制度の導入について、検討を行った。
なお、数年前から観覧者に対しアンケートを実施しており、13年度においても、平常展・特別展の両方において館内数カ所にアンケートコーナーを設置し、観覧者の意見及び感想を聞き、平常展においては80%以上、特別展においては約90%の観覧者から満足したとの回答を得た。
アンケートの回答中、要望のあった事項については、検討を行い、展示面では、本館に各コーナー毎に解説パネルを置き、和・英の二カ国語での解説を行い、国内外の観覧者の理解を図った。
13年度は、観覧者の理解促進のため、以下の事業を実施した。

解説ボランティアの導入

音声ガイドによる作品解説

関連イベント(ギャラリートーク、作品解説、公開講座、夏期講座、講演会)の実施

また、特別展等の企画実施に際し、外部の大学等の研究者にゲストキュレーター等を委嘱する等積極的に専門的情報を収集し並びに指導助言を得た。

(自己点検評価)

モニター制度の導入について、今後、引き続き検討を行う。

展示会の企画や展示方法等については、高い評価を得た。

また、解説ボランティアからも、展示会に関する意見や印象・感想等に関するレポートを求め、今後の事業の参考となる英語の解説(キャプション)の充実や展示の方法、図録の内容等について、貴重な意見を得た。

〔参照〕事業実績統計表 219～222頁

(1)-4

(目的)

展示解説の充実や見やすい表示等を行うとともに、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、利用者に対するサービスの向上を図る。

常設展示の解説の英語表記を順次、充実させる。

リニューアルした古代寺院遺跡地図の運用を開始し、展示品の観覧理解のための充実を図る。

会場の陳列作品の解説一枚刷りを配置する。

ボランティアによる列品解説を行い、入館者へのサービス向上を図る。

(効果)

特別展「仏舎利と宝珠」展より、音声ガイドを導入し、正倉院展においても実施した。

また、ハイビジョン等を設置し、ぶつぞう入門、高精細画像による作品紹介を行った。

本館コーナー解説については6月に、西新館各部門解説については12月にそれぞれ英語表記を導入した。

寺院地図の改訂を行い、新館の中間室に設置した。

改訂内容として、寺院の詳細が分かるよう点灯ランプの種類を増やす、当時の寺院の実態について、最新情報に改める、英文の概要を併記した。

クイズ形式の解説の無料配布を実施すると共に、西新館1階のコンピュータ端末で、名品紹介として解説情報を提供した。また、陳列品一覧は「奈良国立博物館だより」にも掲載した。

13年度は約90名の解説ボランティアを配置し、作品解説を行ったほか、図書コーナーにおいて入館者への学習アドバイスを行った。

(自己点検評価)

入館者から、内容が分かり易く充実していると好評であった。

外国人入館者へのサービスが向上した。

入館者の展示品に対する理解促進に役立った。

入館者の観覧の参考になった。

丁寧で分かりやすい解説が高い評価を得た。

〔参照〕事業実績評価表 167・169頁

(2)

(目的)

開館日・開館時間の弾力的運用等により利用者サービスの向上に努める。特に今年度からは、平常展示について、小・中学生は、毎週土曜日を無料とする。

(効果)

毎週金曜日等を夜間開館日とし、午後5時の閉館を2時間延長し、午後7時まで開館した。平常展示について、小・中学生は毎週土曜日を無料とした。

また、正倉院展では、開館時間を拡張して9:00～18:00とした。

(2)(自己点検評価)

入館者のニーズに対応した、開館時間の弾力的運用により、特に正倉院展での開館時間拡張は、入館者数の大幅な増加につながった。

〔参照〕事業実績評価表 170・172頁

(3)

(目的)

レストラン・ミュージアムショップの利用者へのアンケート調査を実施し、調査結果を踏まえ、関係者と協議し、利用者サービスの向上に努める。

(効果)

レストラン・ミュージアムショップの協力を得てアンケートを実施し、アンケート結果を踏まえ、清涼飲料水の自動販売機を2台新たに設置した他、コインロッカーの増設を行った。

(自己点検評価)

今後もアンケート結果を踏まえて改善内容、方法を継続して検討する。

項目別評価（九州国立博物館（仮称））

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評価	
		A	B	C		段階的評価	定性的評価
<p>5 新たな博物館の運営に向けた取り組み 法人本部に九州国立博物館（仮称）設置準備室を設置し、展示の企画・設計、展示に必要な作品収集、調査研究等の機能の整備など、開設に支障のないよう準備を推進する。</p>	開館への準備状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評価を決定する。			<p>(1) 九州国立博物館（仮称）の設置準備 【方針】 九州国立博物館（仮称）の設置準備 【取り組み】 法人本部に九州国立博物館（仮称）設置準備室を設置し、開館に向けた準備を進めている。 【実績】 4月1日に、東京国立博物館内に九州国立博物館（仮称）設置準備室を設置し、主幹として鷲塚泰光奈良国立博物館長を兼務発令した。 独立行政法人国立博物館本部において、事務・研究の両面を支援する体制を整え、九州国立博物館（仮称）の設立準備に係る業務を遂行した。 また、九州国立博物館（仮称）の設立準備に係る業務を遂行する上で、東京国立博物館からの多大なる協力を得て、庶務的・会計的な事務処理をはじめ各専門分野での検討・調査等を行うことができた。 【自己点検評価】 九州国立博物館（仮称）設置準備室の業務を円滑に取り進めるために、専従の室長を配置することが必要である。 九州国立博物館（仮称）設置準備室の業務を具体的に実施し、開館後における事業及び管理運営等の業務を遂行していくために、各専門分野に専従の職員を配置することが必要不可欠である。</p> <p>(2) 常設展示業務 【方針】 常設展示にかかる映像（CG等）ソフトに関する調査やシナリオの作成等を検討するため、協力者会議を設置し、月2回程度開催する。 【取り組み】 「九州国立博物館（仮称）常設展示プロジェクトチーム」を新たに設置するとともに、協力者会議をさらに展示業務に特化した「九州国立博物館（仮称）常設展示専門プロジェクトチーム」を設置し、展示の企画・設計、資料収集・調査研究等の検討を進めている。 【実績】 平成12年度に取りまとめられた展示の基本設計を実施設計の段階に進めるべく、映像ソフト作成の検討等をはじめとする各種プロジェクトを設置し、活発に検討を行い、平成14年度実施予定の展示実施設計に向けての基本的な資料を整えることができた。 7月25日に、「九州国立博物館（仮称）常設展示プロジェクトチーム」を設置し、「展示テーマの具体化に対する総体的な検討」、「展示資料の借用交渉を含めた総体的な検討」、「映像ソフト、展示模型、レプリカ等の総体的な検討」、「展示レイアウトの総体的な検討」を実施した。 なお、常設展示プロジェクトチーム設置以前は、設立準備室と福岡県との担当者により検討を行った。 ・ 年間 25回開催 10月1日に、「九州国立博物館（仮称）常設展示専門プロジェクトチーム」を設置し、「展示テーマの具体化」、「展示資料、映像ソフト、展示模型、レプリカ等の具体化」、「展示のレイアウト」について、専門的かつ具体的な検討を実施した。 なお、常設展示専門プロジェクトチーム設置以前は、常設展示実施計画検討に係る協力者により検討を行った。 ・ 第一テーマ（遊動と定住）……………年間 9回開催 ・ 第二テーマ（イネと鉄）……………年間 19回開催 ・ 第三テーマ（仏教と都城）……………年間 11回開催 ・ 第四テーマ（交易圏の拡大）……………年間 23回開催 ・ 第五テーマ（東洋と西洋）……………年間 7回開催 ・ 合同会議（第一～第五テーマ）……………年間 3回開催</p>	A	<p>本部に九州国立博物館（仮称）設立準備室を設置し、常設展示プロジェクトチームや各種の検討会を設けるなど、設立に向けて着実に検討が進められていると思われる。 なお、映像資料、模型、レプリカの作成や展示レイアウト、学校との連携などを企画・調整・検討するうえで、早い時期から教育普及的效果を十分考慮できる人を配置するなど、専門分野の職員を適宜配置して準備を進めることが望ましい。 さらに、開館後の展示活動において、常設展示プロジェクトチームの計画した展示計画及びそれを具体化するために作成する「展示レイアウト」や「映像ソフト、展示模型、レプリカ等」により、研究職員の活動や発想が制限されることのないよう十分な配慮が必要である。</p>

【自己点検評価】

今年度検討した内容については、平成14年度実施予定の展示実施設計に十分反映させることが重要である。

引き続き、展示資料の確保状況や映像資料、模型・レプリカ等の作製状況を踏まえながら、展示テーマや展示レイアウト等の総合的な調整・検討が必要である。

【方針】

展示基本設計に基づいた模型、レプリカ等を含めた展示資料を、開館時までに収集・作製するため、これらの情報収集等を行う。

【取り組み】

模型・レプリカ等を含めた展示資料の収集を行い、各展示資料の調査に係るプロジェクトチームを設けるなど、具体的な資料の調査、検討を始めたところである。

【実績】

平成14年度実施予定の展示実施設計においては、具体的な展示資料を想定しての設計を行うために、東京・京都・奈良の国立博物館と展示計画の検討・調整を頻繁に実施し、九州国立博物館（仮称）が希望している展示資料の約77%を調整することができた。

また、独立行政法人国立博物館以外の施設等との借用交渉については、九州国立博物館（仮称）が希望している展示資料の約51%が借用できる見通しとなった。

なお、海外の博物館等が所蔵する資料については、今年度大韓民国（国立中央博物館、文化財庁）へ出向き、九州国立博物館（仮称）が希望する展示資料を提示し、協力を要請したところである。

また、中華人民共和国の山西省博物館長の来日を受けて、九州国立博物館（仮称）への協力を要請した。

以上の展示資料の収集状況を踏まえ、3月1日に、「九州国立博物館（仮称）常設展示資料調査専門プロジェクトチーム」を設置し、個別具体的な資料調査を始めた。

さらに、九州国立博物館（仮称）の展示・企画等を検討するため、各地の博物館等の展示手法や展示資料等の実態調査を実施した。

独立行政法人国立博物館内における九州国立博物館（仮称）の展示資料の調整状況

- ・ 長期 488件（うち国宝 1件、重要指定文化財 21件）
- ・ 短期 34件（うち国宝 3件、重要指定文化財 11件）
- ・ 調整中 159件（うち国宝 4件、重要指定文化財 5件）

独立行政法人国立博物館以外の施設等からの展示資料の借用交渉状況

- ・ 長期 263件（うち国宝 3件、重要指定文化財 8件）
- ・ 短期 9件（うち国宝 1件、重要指定文化財 3件）
- ・ 調整中 266件（うち国宝 2件、重要指定文化財 15件）

九州国立博物館（仮称）常設展示資料調査専門プロジェクトチームの開催状況

- ・ 進貢船（東京国立博物館所管）について、日本海事史学会や財団法人船の科学館及び東京国立博物館の協力を得て、3月15日に、第1回の会合を開催し、調査・検討を開始した。
- ・ 宗家文書（東京国立博物館所管）について、第一線の研究者や東京国立博物館の協力を得て、3月12日に、第1回の会合を開催し、調査・研究を開始した。

各地の博物館等の実態調査の実施状況

- ・ 博物館等の展示手法等の実態調査..... 年間 20か所、21回
- ・ 展示資料の実態調査..... 年間 53か所、65回
- ・ 以上の各地域における情報収集のほかに、東京国立博物館の協力を随時得ながら、東京国立博物館での展示手法や展示資料等の実態調査を頻繁に行った。

【自己点検評価】

展示計画に支障がないよう、国内外との更なる調整・交渉等を行うとともに、個別資料調査の結果を踏まえた対応を検討していくことが重要である。また、展示手法等の具体的な検討を行う必要がある。

調整中の展示資料は、引き続き検討するとともに、調整済みの長期や短期の展示資料については、具体的な展示期間を確保し、展示計画に支障のないようにする必要がある。

九州国立博物館（仮称）の展示活動で予定している海外資料について、アジア諸国等への協力要請を具体的に進める必要がある。

具体的な資料調査に当たっては、学術的調査及び修理調査を実施し、学術報告・修理計画を作成するために、事前計画を周到に練り、効率よく調査・検討を行っていくことが必要である。

(3) 博物館諸機能業務

【方針】

博物館諸機能業務に関する検討を進める。

【取り組み】

「管理運営」、「教育普及・生涯学習」、「交流」及び「情報システム」などの博物館における諸機能の業務に関する検討を進めている。

【実績】

九州国立博物館（仮称）の運営手法・管理手法等について、福岡県と一体的に実施するため、施設の維持管理をはじめとする運営費や人員配置計画等に係る諸問題を検討するとともに、その対応を協議した。

また、現在、九州国立博物館（仮称）の設置に当たって、支援活動を展開している財団法人九州国立博物館設置促進財団の将来的な支援方策等の在り方について、協議を行った。

教育普及・生涯学習、交流、高度情報化の各機能については、活発な検討を行った結果、基本計画をそれぞれ取りまとめることができた。

管理運営

福岡県と一体的に運営等を行うために、その具体的な協議を進めるとともに、財団法人九州国立博物館設置促進財団からの支援方策の検討を行った。

- ・ 年間 17回

教育普及・生涯学習機能

学校教育との連携、体験学習及びボランティア活動等について、福岡県とともに、協議・検討を行い、基本計画を策定した。

- ・ 定例的な検討会議..... 年間 11回
- ・ 指導助言者との検討会..... 年間 3回
- ・ 基本計画策定会議..... 年間 2回

交流機能

交流についての基本的な考え方や課題について、福岡県とともに、協議・検討を行い、基本計画を策定した。

- ・ 定例的な検討会議..... 年間 7回
- ・ 指導助言者との検討会..... 年間 2回

地域との交流

九州の各県立博物館等からの支援・協力体制を構築するために設けられた「九州国立博物館支援協議会」において、共同企画・研究やネットワーク作り等の構想を協議した。

- ・ 支援協議会..... 年間 2回
- ・ 支援協議会ワーキンググループ..... 年間 2回

海外との交流

海外の博物館等との交流について、関係機関に要請を行った。

- ・ 大韓民国（国立中央博物館、文化財庁）、中華人民共和国（山西省博物館）

高度情報化機能

収蔵資料管理をはじめとする情報システムの問題点と今後の方向性及びコンテンツの作成について、福岡県とともに協議・検討を行い、情報システム基本計画の素案を作成した。

- ・ 定例的な検討会議..... 年間 10回
- ・ 指導助言者との検討会..... 年間 3回
- ・ 基本計画策定会議..... 年間 3回

総合会議（教育普及・生涯学習、交流及び情報システムの機能）

個々の機能を検討する上で、他機能を踏まえた観点で総合的に捉えることが必要であるため、各機能の検討計画等の情報交換を行った。

- ・ 年間 2回

【自己点検評価】

運営手法・管理手法等については、協議を行った結果の取りまとめを行い、予算や人員の確保などの具体的な結果が得られるよう、努めることが重要である。

また、引き続き、財団法人九州国立博物館設置促進財団からの支援方策等の検討を実施し、その具体化を図るべく準備を行う必要がある。

教育普及・生涯学習、交流、高度情報化の各機能については、基本計画に基づいた実施計画を作成する必要があり、専門的な知識を有する人員を配置し、個々の機能の具体的な検討を計画的に進める必要がある。